
やってみようプロジェクト

調査研究報告書

文化庁委託事業平成 30 年度戦略的芸術文化創造推進事業

公益社団法人 日本劇団協議会

（公社）日本劇団協議会としてこの社会的包摂事業への取り組みを始めてから三年目を迎えた。そもそも言えば、芸術団体や劇場が行っている社会包摂事業の社会的効果を数値化することは可能か、ということでスタートしたものだったが、それぞれの実践を通じて、私たちが向き合うべき社会的課題の広さを再発見してきたように思う。引きこもりなどの若者自立支援、あるいは高校生の学習意欲、生きる意欲を掘り起こすワークショップなどの青少年対象から、障がい者、高齢者、さらには認知症患者、そして在日外国人と、その対象範囲はどんどん拡大している。自己表現すること、コミュニケーション力を身につけることが困難になっている人々が、時を追うにしたがってむしろ増えているという社会的課題の重さを思い知らされたとも言える。そしてその課題に対して、演劇という芸術が生み出してきた様々な方法論、あるいはその本質の持っている力が、大きな効果を上げ得るものであることを学んできた三年間であったとも言える。特に、兵庫県立ピッコロ劇団による小野市での在日外国人向けの「日本語で遊ぼう」というワークショップは、これからの日本社会のありようを探る上で、大きな示唆に富んだものであった。北播磨市民活動支援センター（小野市うるおい交流館エクラ）と小野市国際交流協会という地域の二つの団体とピッコロ劇団が協同したことが、私たちに求められる内容をより明確にしたと思えたからだ。言葉にすれば「安心、安全な場所だからこそ出来るコミュニケーションの追求」ということになるのかも知れない。今回実施したその他の活動でも、NPO法人、社会福祉法人、学校、協同組合など地域で様々な活動を展開し、信頼を得ている場所だからこそ、作り得た成果がそこにある。それらのことは参加者から、またそこに立ち会った施設や団体の方々からの言葉で裏付けられてもいる。

ただ、それらの成果をより目に見える形にし、数値化し政策根拠（エビデンス）とするという目標から言えば、その努力はまだその過程にあると言えるだろう。研究者の方々の協力を得て、その方法論の追求もより広く、深いものになりつつあるが、より具体的なものにする上での関係各位からのご意見、示唆もいただければと思う。

当法人としては、次年度以降は本事業を、地域における文化拠点である劇場、文化施設との協力関係をより深める形での展開を構想している。本報告書が、その広がりの一助となることを期待したい。

内容

はじめに.....	2
要旨.....	1
1. 背景と目的.....	4
1.1. 社会的インパクト評価とは.....	4
1.2. 文化芸術を活用した社会包摂活動における社会的インパクト評価の可能性.....	6
2. エデュケーションワークショップ.....	8
2.1. 実施概要.....	8
2.2. 結果.....	9
2.3. 今後の展望.....	9
3. コミュニケーションワークショップ.....	10
3.1. コミュニケーションワークショップの一覧.....	10
3.2. コミュニケーションワークショップの評価の進め方.....	10
3.3. 【障害者対象】（都立石神井特別支援学校）.....	12
3.4. 【高齢者対象】（特別養護老人ホームはるびの郷）.....	24
3.5. 【青少年対象】（児童養護施設杉並学園）.....	36
3.6. 【青年対象（さいたま）】（さいたま市若者自立支援ルーム）.....	47
3.7. 【青年対象（東京）】（ワーカーズコープ連合会）.....	60
3.8. 【在日外国人対象】（小野市うるおい交流館エクラ）.....	70
3.9. 岐阜県立不破高校（岐阜県不破郡垂井町）.....	83
3.10. 日本演劇情動療法協会（仙台市）.....	98
4. 結論と今後の展望.....	110
4.1. 協働先との関係性.....	110
4.2. 今後展開していくために.....	111
5. 終わりに.....	112
6. 参考資料.....	114
6.1. コミュニケーションワークショップの記事掲載等.....	114
7. 補足：団体概要.....	115

要旨

コミュニケーションワークショップ

プログラム概要

本事業において、実施したプログラムは下記 No.1~6 の6つと、調査のみ実施の7~8の2つである。それぞれ対象は障害者、青年、高齢者等多様であり、各協働先と共に実施している。それらのプログラムに関して、調査員が昨年度事業の振り返り（兵庫県立ピッコロ劇団以外）、サクセスイメージの共有、セオリーの作成、評価設問設計、測定手法設計、測定の実施、測定結果の分析・まとめ、最終的なフィードバックを通して、社会的インパクト評価を実施した。特に調査としては3年目となる今年度は、コミュニケーションワークショップによる「効果・成果（アウトカム）」のみを測るのではなく、何がその効果・成果を生み出しているのかを詳細に把握するために「課題分析の妥当性（ニーズ）」、「内容妥当性（セオリー）」、「実施の適切性・十分性（プロセス）」、「効率性」の観点から総括（レーティング）を行なった。さらに「協働体制を問うための指標」を設けることで、劇団が協働先（受け入れ先の施設やアウトリーチ先等）とどのような形で協働することでコミュニケーションワークショップの「効果・成果（アウトカム）」を高められる可能性があるかについても調査を実施した。

No.	対象	協力団体（劇団）	協力団体（アウトリーチ先等）	昨年度からの継続
1	障害者	朋友	東京都立石神井特別支援学校	✓
2	高齢者		社会福祉法人はるび	✓
3	青少年		社会福祉法人光明会	✓
4	青年 （さいたま）	青年劇場	NPO 法人さいたまユースサポートネット	✓
5	青年 （東京）	銅鑼	日本労働者協同組合ワーカーズコープ連合会	✓
6	在日外国人	兵庫県立ピッコロ劇団	NPO 法人北播磨市民活動支援センター（小野市うるおい交流館エクラ）、NPO 法人小野市国際交流協会	—
7	高校生	文学座	岐阜県立不破高校	—（別学校での実施は有）
8	高齢者 （認知症）	NPO 法人日本演劇情動療法協会	仙台富沢病院	✓

主な結果

主な結果として、プログラム実施の結果成果として考えられる、「参加者の自己肯定感の高まり」、「協力団体の価値認識」を示す。加えて、プログラム評価の総括の際に用いられる、課題分析、内容、実施、効果、効率性の5つの観点について、各プログラムを分析した「評価の総括」を示す。

「参加者の自己肯定感の高まり」としては、8団体中2団体のみが目標値達成となった。自己肯定感の向上が見られたのはどちらも対象者が青年であった。本ワークショップの目的や対象者によっては、ロジックモデルに「参加者の自己肯定感の高まり」の項目が含まれておらず、本項目の必要性は全ての事業について言えるものではないことに留意が必要である。「協働団体の価値認識」の割合は8団体中6団体と高い結果となった。1~2年前前から継続の事業もあり、劇団と協働先団体と関係性が出来てきたことでコミュニケーションワークショップの質が向上したり、劇団の講師側にも対象者へのアプローチのノウハウが溜まってきたことが言えるだろう。

あらかじめ各プログラム共通で設定した 2 つの指標に関する結果を示す。1 つは、コミュニケーションワークショップ実施の前後でワークショップ参加者の自己肯定感が高まったか。もう 1 つは、各プログラムの協力団体が、ワークショップの価値を認識したかどうかである。

内容	目標値	各プログラムの実績値							
		1	2	3	4	5	6	7	8
参加者の自己肯定感の高まり	50%	(50%)	—	(0%)	83%	60%	0%	36%	—
協力団体の価値認識	70%	80%	99%	96%	100%	75%	100%	51%	56%

評価の総括に関しては、5 つの段階「A：十分に可能性がある B：ある程度可能性がある C：どちらとも言えない D：あまり可能性はない E：全く可能性はない」で、各課題分析が妥当か、内容が妥当か、プログラム実施が適切かつ十分か、効果が十分か、効率性が十分かの 5 項目について評価を実施した。まず、「課題分析の妥当性（ニーズ）」は No.1～8 まで A または B と概ね良好であることが分かる。これは協働先団体（受け入れ先の施設やアウトリーチ先等）が日頃からどれだけ対象者のニーズを捉えていて、それを劇団側に伝えられたかによると考える。「内容妥当性（セオリー）」は、プログラムの対象者が抱える様々な課題に対して各コミュニケーションワークショップの内容が妥当であったかであるが、A～C と有効に働いた場合と必ずしもそうでない場合があった。課題分析がきちんとできているほど、ワークショップの内容の妥当性が高かったことがわかる。「実施の適切性・十分性（プロセス）」は A と B が半数ずつという結果で、劇団講師が状況の変化にあわせてやり方を微修正しながら柔軟に適応していくことが出来た。「効果・成果（アウトカム）」は B が多いが青年向けの 2 事業では A の結果であった。青年向けは当初ロジックモデルで描いた効果・成果を超える効果・成果が出ており、また受け入れ先施設の変化という想定外の効果も見られ、本ワークショップのさらなる可能性を感じた。「効率性」は資金面で課題が残るも概ね B であり、今年度の実施により各事業を持続的に実施していくためのヒントを見出すことができた。

評価設問	各プログラムの実績値							
	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.
課題分析の妥当性	A	A	B	B	B	A	A	A
内容の妥当性	A	A	B	C	A	B	A	B
実施の適切性・十分性	B	A	B	B	B	A	A	B
効果	B	B	B	A	A	B	B	B
効率性	B	B	B	B	C	B	A	B
総合	B	A	B	B	B	B	A	B

加えて、各プロジェクトで設定した社会的指標の中で、客観指標を測定した結果があるものについて示す。その結果、高齢者対象プログラムでは、自立度を測定する IADL の値が、4.8 から 7.6 へと統計的に改善した（点数が高いほど自立度が高い）。青年対象（さいたま）のプログラムでは、「これまでは母親に車で送り迎えをしてもらっていた R さんが、本番前の日曜日は自主稽古をするためにはじめて電車に乗って一人で来た。この稽古は自分で企画して、仲間を誘って実現させたものである」という変化が見られた。青年対象（東京）のプログラムでは、実際にワークショップ後に、（自己申告ではあるが、）就職・アルバイトの活動を開始した参加者もいた。在日外国人対象のプログラムでは、中間アウトカムの測定により、本ワークショップによって、参加者の外国人にとって、平均 2.7 人の新たな繋がりが生まれたことがわかった。県立不破高校で実施されているワークショップでは、その SROI 値が、2.2 となった。仙台富沢病院で実施されている演劇情動療法では、医学的デー

夕に関しても、患者に対して情動療法を実施することで、情動を見る指数である NPI や DEI が改善し、向精神薬の利用減少に役立てられることが示唆された。

プログラム.		客観指標	結果
1	障害者対象	なし	—
2	高齢者対象	IADL (自立度) 定性変化	4.8 から 7.6 へと統計的有意に改善 重度の特養から、軽い施設へと移動
3	青少年対象	なし	—
4	青年対象 (さいたま)	定性変化	自主稽古をするために電車に乗って一人で外出
5	青年対象 (東京)	就職数	ワークショップ後に就職 (アルバイト含む) 活動を 始めた青年が自己申告で 5 人中 3 人
6	在日外国人対象	新たにできた友人数	ワークショップにより、平均 2.7 人の 新たなつながりが継続
7	高校生対象	SROI	2.2
8	高齢者 (認知症) 対象	NPI、DEI (情動に関する指標)	NPI は減少、DEI は向上 (情動が改善)

今後の展望

現在実施しているコミュニケーションワークショップは、対象者の選定や協働体制に多様な工夫があり、試行錯誤の中で積み重ねてきたことがわかった。評価の観点からは、事業ごとに個別にロジックモデルを描き、それに対応する定性的・定量的指標を独自に設定している。各指標を測定していくにあたり、そもそもの事業特性として、対象者が少なく不安定であること、一部事業自体が単発の介入で終わるものがあることなど、困難となる状況が多い。今後、コミュニケーションワークショップを社会課題へのアプローチのひとつとして提言し、広く活用されるようにしていくためには、対象者の絞り込み・安定化とある程度の規模の確保、外部要因を排除するための評価設計、説得性の高い指標・測定方法を含めた評価設計が初期段階から必要である。これらの今年度の学びを活用して、次年度以降の事業設計・評価設計に活かしていきたい。

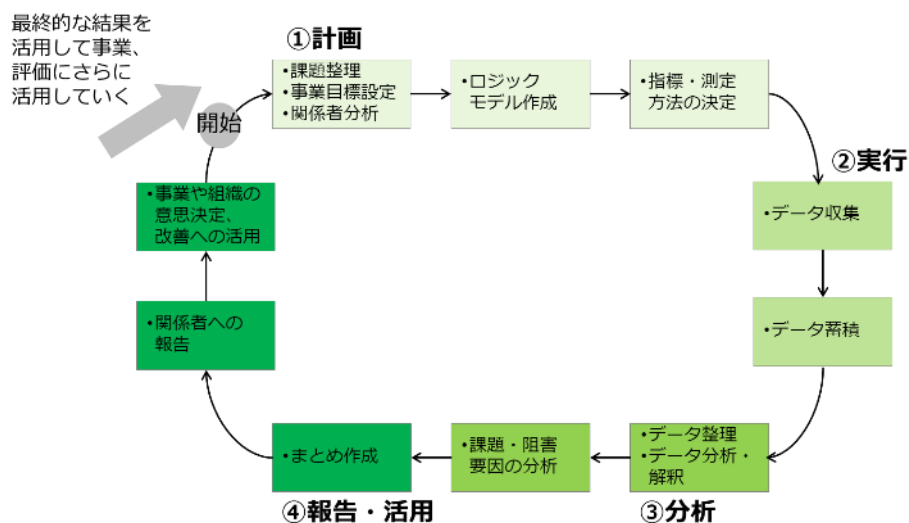
1. 背景と目的

1.1. 社会的インパクト評価とは

本事業には、平成 28 年度に実施した「芸術団体における社会包摂活動の調査研究」、さらに平成 29 年度に実施した「演劇による社会的包摂プロジェクト」の継続事業という位置づけがある。一昨年度、昨年度は複数のプログラムについて、社会包摂に関する演劇活動が社会へ与える影響について、社会的インパクト評価により効果検証を行ってきた。また、一部のプログラムについては、SROI（Social Return on Investment：社会的投資収益率）という手法を用い、その事業成果を定量的に把握し、貨幣価値に換算することにより、社会的インパクトの可視化を試みてきた。一方で、SROI を算出することが困難なプログラムもあり、全てのプログラムではなく可能な範囲で SROI の算出を試みた。本事業では 2 年間の事業に引き続き、各プログラムの事業成果について可視化を試み、可能な範囲で客観指標での定量化、および SROI の算出を試みた。

社会的インパクト評価とは、担い手の活動が生み出す「社会的価値」を「可視化」し、これを「検証」し、資金等の提供者への説明責任（アカウントビリティ）につなげていくとともに、評価の実施により組織内部で戦略と結果が共有され、事業・組織に対する理解が深まるなど組織の運営力強化に資するものである¹。その目的は内部や外部への説明責任の履行はもちろんだが、そのプロセスや結果を通じて、組織や事業の学び、改善につなげていく、ということに重きがある。こうした評価の概念は、内閣府がワーキンググループを立ち上げた平成 27 年度以降、日本でも広まってきている。平成 30 年 3 月 30 日に発表された「休眠預金等交付金に係る資金の活用に関する基本方針」では、社会的インパクト評価の実施が明記され、「民間公益活動による成果だけでなく、民間公益活動の革新性等も含めて、総合的に評価を行わなければならない。」とされている。平成 28 年 6 月には「社会的インパクト評価イニシアチブ」と呼ばれる日本全体として社会的インパクト評価を普及させるためのプラットフォームの仕組みが立ち上がっている。民間事業者、シンクタンク、中間支援組織、資金提供者、研究者、行政など様々な分野の人々が連携しており、平成 30 年 8 月 1 日現在、150 の団体が参加している²。社会的インパクト評価は、「評価」という名称ではあるが、その本質は社会的課題を解決する、あるいは社会に新たな価値をもたらすという意味での「正の社会的インパクトを最大化」し、「負のインパクトを抑えていく」ことにある。つまり、成果を可視化する評価のプロセスを通じ、成果向上を目指すものである。こうした概念は、近年では社会的インパクト・マネジメントと呼ばれるようになってきている。

図表 1-1 社会的インパクト評価のプロセス



¹ 内閣府ホームページ「社会的インパクト評価について」http://www5.cao.go.jp/kyumin_yokin/impact/impact_index.html

² 社会的インパクト評価イニシアチブウェブサイト <http://www.impactmeasurement.jp/member/>

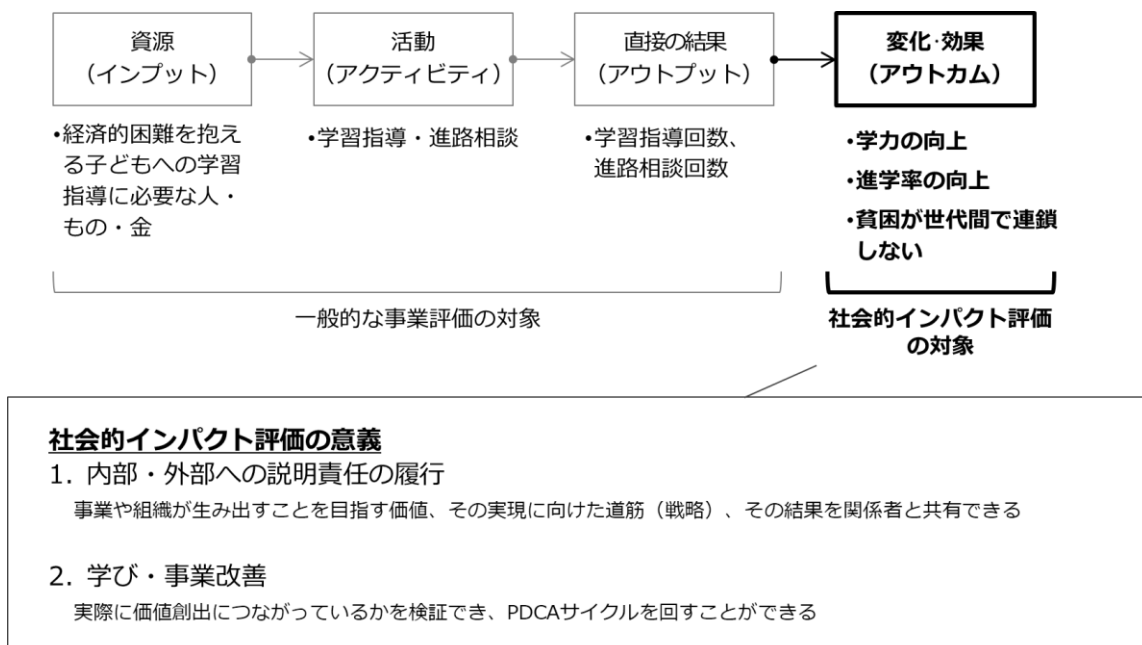
社会的インパクト評価は、評価の手法としては、図表 1-1 に示すように、計画、実行、分析、報告・活用の 4 つのステップを踏む。こうしたプロセスはプログラム評価の流れを汲んでおり、ニーズ評価、セオリー評価、プロセス評価、アウトカム/インパクト評価、その効率性の評価を行うことと近い。そのため、本事業では、評価の最後に、「評価の総括」を図表 1-2 に示す 5 つの観点で行うこととした。

図表 1-2 プログラムの評価に関する総括³

	評価設問	詳細	評価結果
1	課題分析の妥当性 (ニーズ)	プログラムが改善しようとしている社会状況やプログラムへのニーズに関する項目	対象者にとって重要な課題やニーズを十分に把握できていたか？
2	内容の妥当性 (セオリー)	プログラムの概念化とデザインに関する項目	演劇ワークショッププログラムは、(想定していた) 対象者の課題やニーズに応えるものとして合理的かつ実行可能で、適切なものだったか？
3	実施の適切性・ 十分性 (プロセス)	プログラムの運営、実施、サービス提供に関する項目	演劇ワークショッププログラムの運営は、計画通りに、または臨機応変に適切に、十分な形で実施することができたか？
4	効果 (アウトカム)	プログラムの成果・影響に関する項目	演劇ワークショッププログラムによって、期待するような変化・効果が生まれたか？
5	効率性	プログラムの費用・費用対効果に関する項目	演劇ワークショップは、今後も継続的に実施し続けられるものか？

社会的インパクト評価においては特に、各事業の資源（インプット）、活動（アクティビティ）、直接の結果（アウトプット）から変化・効果（アウトカム）に至るまでの流れを整理することが重要である。こうした論理の流れ（ロジック）を整理したものは、ロジックモデルと呼ばれる。ロジックモデルを各プログラムについて整理することにより、関係者の対話を促進し、成果の把握をどのように行うかの、評価の軸とした。

図表 1-3 社会的インパクト評価とは

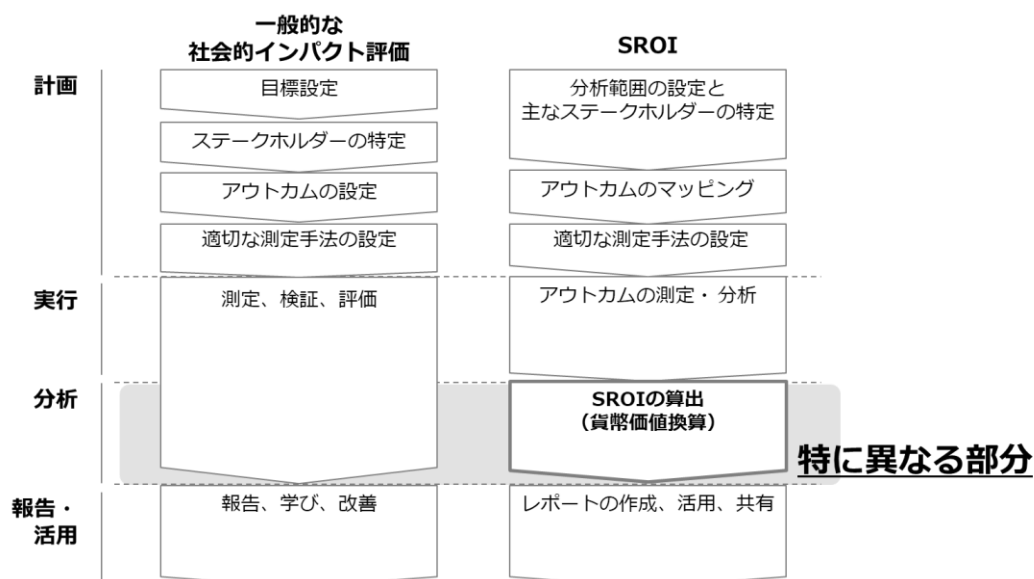


³ Rossi, 2005「プログラム評価の理論と方法」P.53

本事業で活用した SROI 評価は、社会的インパクト評価の一種であり、社会的価値を貨幣価値換算することに特徴がある。活動に関与する利害関係者（以下、ステークホルダー）を明らかにし、関係者ごとのインプット、アウトプット、アウトカムを定義し、それぞれを定量評価することで、社会生産性の向上に資することを目的とした評価手法である。企業財務の評価手法 ROI（投資収益率）をベースに、社会要素を定量化して評価対象に組み入れている。SROI 評価はアウトカムが明確でないものや、その因果関係が不明瞭なもの、およびステークホルダーが複雑で多岐にわたる場合には不適⁴とされる。

本事業では、演劇的手法を用いた社会包摂活動の成果を可視化し、活動の成果向上に活用することを大目的とし、プログラムの内 SROI 評価が適するものについて、社会的価値の貨幣価値換算を試みることにした。

図表 1-4 社会的インパクト評価と SROI 評価の比較



1.2. 文化芸術を活用した社会包摂活動における社会的インパクト評価の可能性

社会的課題の複雑化を背景に、文化芸術を活用した社会包摂活動に対する期待が高まっている。文化庁でもその戦略的芸術文化創造推進事業では「共生社会実現のための芸術文化活動」という言葉が明記され、また、「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律（平成 30 年法律第 47 号）」が平成 30 年 6 月 13 日に公布、施行されるなど、多様な社会課題があり、分断される社会の中で、多くの人を直観的に巻き込むことができる芸術活動は、社会包摂に対する使命を担っているとも言える。

こうした役割が求められる中、その効果を可視化することが求められている。こうした効果の可視化は、より多くの文化芸術を活用した社会包摂活動を増やす、あるいは持続可能にするためにも、評価は重要な役割を担うと考えられる。評価の実施には主に二つの大きなメリットがある。一つは、成果の可視化を行うことで、想定する成果の実現度を認識し、社会包摂に向けて事業をより良く改善できることである。「なんとなく良いことをやっている」状態から、「（関係者にとって）明確に成果を認識できる」状態に移行することで、活動の対象者により良い効果をもたらす取り組みができるようになる。もう一つは、プログラムを直接見たり、感じたりしたことがない人にも、わかりやすい形でプログラムの価値を伝え、成果を報告することにより、周囲に理解を促すことができることである。資金提供者等に対しては説明責任の履行であり、新たな関係者にとってはプログラム理解のきっかけづくりとなる。社会包摂活動の成果の言語化や可視化を通して、より広がりを持たせることができる。

⁴ 慶應義塾大学 SFC 研究所「SROI」実施ガイドライン（2014 年 3 月）<http://tama.sfc.keio.ac.jp/sest/guideline-sroi.pdf>

文化庁の方針を踏まえても、一人一人の生活を豊かにし、より良い社会を実現していくためには社会包摂という文脈は必要不可欠である。芸術活動は元々社会包摂に適した要素を持ち合わせていると考えられ、芸術を活用した社会包摂活動を持続可能にしていくためにも、評価という翻訳の作業には大きな可能性がある。

2. エデュケーションワークショップ

2.1. 実施概要

現在の俳優養成、および教育の現場では優秀なファシリテーターを必要としており、またその養成も急務とされている。その要望に応えることのできるワークショップとして、過去の実績を踏まえた上で、さらに裾野を広げながら、スキルアップ、ブラッシュアップできる体験型ワークショップが「エデュケーションワークショップ」である。

過去 10 数年間、学校教育に演劇を位置づける数少ない国の一つの英国より指導者を招聘し、演劇的手法をツールとして導入したエデュケーションワークショップとして定着してきた。そのコンセプトやスキルを学び、日本各地の演劇や教育の現場で活躍している指導者が講師としてそれぞれ異なる 3 コースからアプローチし、座学では学び得ないコミュニケーション能力や社会性を育成する総合的学習のツール、更には文化の多様性、協働、ジレンマの克服といった基本的な生きる力を、ワークショップ受講者が体験を通して獲得していく。

本年度は新たな拠点として兵庫県にて DIE コースを実施した。更に新たな展開として、ワークショップリーダー、ファシリテーターを志す人を対象に、座学を中心としたガイダンスと小学校でのワークショップを実際に見学し、その後意見交換をする検証ワークショップを実施することができた。

コース	事前ガイダンス
講師	西海真理（劇団朋友）
実施日	6/4
会場	芸能花伝舎
コース	DIE(ドラマ・イン・エデュケーション) [東京]
講師	西海真理（劇団朋友）
アシスタント	稲有寿沙、武藤麗子、敦澤穂菜美、平塚美穂（以上劇団朋友）
実施日	8/4～8/6
会場	朋友芸術センター
コース	DIE(ドラマ・イン・エデュケーション) [兵庫]
講師	西海真理（劇団朋友）
アシスタント	水野千夏（劇団朋友）、中川義文、本田千恵子（以上ピッコロ劇団）
実施日	8/21～8/23
会場	ピッコロシアター
コース	教育
講師	渡辺貴裕（東京学芸大学教職大学院准教授）
アシスタント	水野千夏、こやまあつこ、平塚美穂、船場未生（以上劇団朋友）
実施日	8/7～8/9
会場	朋友芸術センター
コース	インプロ
講師	絹川友梨（俳優／インプロバイザー）
アシスタント	水野千夏、こやまあつこ、渡辺聖、細田知栄子（以上劇団朋友）
実施日	8/11～8/13
会場	朋友芸術センター
コース	検証ワークショップ
ファシリテーター	西海真理（劇団朋友）
アシスタント	稲有寿沙、敦澤穂奈美（以上劇団朋友）
実施日	11/13
会場	杉並区立桃井第三小学校、朋友芸術センター

2.2. 結果

本年度は集中的なワークショップとして、東京で DIE コース、教育コース、インプロコースの 3 コースを継続的に実施し、更には要望の高かった他地域でのワークショップとして兵庫県尼崎市のピッコロ劇場で DIE コースを実施することができた。本事業は、長年継続的に実施していることもあり、その成果は著しいものがある。これからファシリテーションやプログラムデザインを学ぼうとしている方、ファシリテーターとして研鑽を積みたい方、ファシリテーターとして実績を持つ方たちの検証の場としても、多数参加の中で、有意義なスキルアップ、ブラッシュアップをすることができた。ファシリテーターのスタンス、プログラムデザイン、ワークショップの受講者をどう位置づけるかを体験的に明確にすることができた。

また DIE を基本とするワークショップを東京に限ることなく全国にその裾野を広げることが待ち望まれていた中、新たな地域で実施することができたことは、その意義と成果はとても大きなものとなった。継続と共にさらに他地域への展望が広がった。

また新しく実施したガイダンスと検証ワークショップでは、本事業のワークショップの理念と理論を座学として学び、また実際に行う小学校のワークショップを見学したことで、振り返りの中で細かな検証をすることができた。このことはより深い理解を生み、有意義な事業とすることができた。

2.3. 今後の展望

本事業のワークショップは、継続の中でその成果は大きくなることが実感される。毎年のように参加される方や、新たな参加者の広がり、この事業の重要性を物語るものである。それとともに全国にその裾野を広げることが次の命題になってきている。このワークショップの経験者が核となり、各地方へと波及効果を及ぼし、各地域の劇場、施設や、協力団体、教育関係、演劇関係者と連携を取りながら、継続的に実施しその裾野を広げていきたい。

3. コミュニケーションワークショップ

3.1. コミュニケーションワークショップの一覧

本章では、プログラムの実施および社会的インパクト評価実施について、それぞれのプログラム別に記載する。記載は図表 3-1 の通し番号の順である。

事業は講師によるプログラム実施と、調査員による評価からなる。全体を通して、プログラムの企画・実施と評価を並行して実施する事業であり、講師と調査員が協働しながら事業を進めた。

各プログラムの実施概要は下記図表 3-1 の通りである。全 8 種類のプログラムがある。No. 1～No. 5 は、昨年度から継続してプログラム実施および評価を行っている。No.6 は今年度の新規、No.7 と No. 8 は調査・評価のみ実施している。それぞれのプログラム内容の詳細は各プログラムの「概要、プログラム内容」に記述する。

社会的インパクト評価（事業が適する場合のみ SROI 評価）を担当する調査員を計 6 人配置した。各プログラムの担当を 1 人以上とし、プログラム実施を担う講師との連携およびコミュニケーションを重視した。コミュニケーション手段はメールや電話、対面等であるが、プログラムの見学や、参加者へのインタビュー等を実施することで、現場の声を丁寧に拾い、評価の枠組みを現場に即して設計することに注力した。

図表 3-1 プログラム

No.	対象	協力団体（劇団）	協力団体（アウトリーチ先等）
1	障害者	朋友	東京都立石神井特別支援学校
2	高齢者		社会福祉法人はるび
3	青少年		社会福祉法人光明会
4	青年（さいたま）	青年劇場	NPO 法人さいたまユースサポートネット
5	青年（東京）	銅鑼	日本労働者協同組合ワーカーズコープ連合会
6	在日外国人	兵庫県立ピッコロ劇団	NPO 法人北播磨市民活動支援センター（小野市うるおい交流館エクラ）、NPO 法人小野市国際交流協会
7	高校生	文学座	岐阜県立不破高校
8	高齢者（認知症）	NPO 法人日本演劇情動療法協会	仙台富沢病院

※No.7、8 は昨年度からの継続調査。No.6 以外の劇団は昨年度からの継続実施。

3.2. コミュニケーションワークショップの評価の進め方

評価の進め方は以下のとおり。昨年度から継続的に実施があるプログラムについては振り返りから始め、改めてセオリー作成、指標の測定を実施した。

図表 3-2 評価の進め方

手順	実施内容
1	昨年度事業の振り返り（兵庫県立ピッコロ劇団以外）
2	サクセスイメージの共有、セオリーの作成
3	評価設問設計
4	測定手法設計
5	測定の実施
6	測定結果の分析・まとめ、フィードバック

以降、3.3 章よりプログラムごと、図表 3-3 の順番で記述する。

図表 3-3 報告書の順番

手順	実施内容
1	概要、プログラム内容
2	背景と目的
3	ロジックモデル
4	評価設問と指標
5	測定と分析結果
6	まとめと今後の展望

3.3. 【障害者対象】（都立石神井特別支援学校）

図表 3-1 の内、No.1 のプログラムの講師、調査員の一覧を図表 3-4 に示した。

図表 3-4 No.1 プログラムの講師、調査員

講師	西海真理
講師アシスタント	水野千夏、こやまあつこ、細田知栄子、平塚美穂、武藤麗子、渡辺聖、敦澤穂奈美、船場未生
コーディネーター	夏川正一
	以上 劇団朋友
調査員	落合千華、栗野泰成

3.3.1. 概要、プログラム内容

障害者対象プログラム内容を図表 3-5 にまとめた。

図表 3-5 障害者対象プログラムの概要

対象者	特別支援学校に通う生徒（中学 1、2 年生）
活動場所	東京都立石神井特別支援学校
プログラム目的	多様な演劇的手法を取り入れたワークショップで、子どもたちが自由に表現し、コミュニケーションの楽しさを体験することで、自己受容感と他者とのコミュニケーション能力が向上する。また、学校内での発表事業を講師陣と共に作り上げる
プログラム概要	特別支援学校の授業の一環として、講師が約 30 人のクラスに演劇的ワークショップを実施する。ジェスチャーゲームやダンスなどに取り組む
実施時期・期間	平成 30 年 11 月 16 日、19 日、20 日、27 日、12 月 1 日、2 月 5 日、2 月 12 日、2 月 19 日

図表 3-6 障害者対象プログラムの流れの例

実施内容	詳細
名札の記入と全体の説明	テーブルにそれぞれの名前（あだ名）を記入し、見えるところに貼る。教員、生徒全体のワークショップの流れについての説明
動物の真似をする	講師の合図でそれぞれがジャンプ、手をあげる、動物の真似をするなどを行う
音に合わせたダンス	クラブミュージック、クラシック、アジアン、盆踊りといった多様な音楽に合わせたダンスをそれぞれが踊る。静かな音楽になって寝る、また音楽が変わることで起きる、を繰り返す
ドアになる、ドアを通る	二人ペアで開きドア、自動ドア、回転ドアなどの多様なドアを作り、その間を別の子どもたちが通る。交代し、ドア役や通る役を繰り返す
休憩	
学習発表会の練習	ナレーションチームは声の大きさを変えて呼びかけるワークや、草・木のチームは動きの練習など、それぞれの役割に合わせて練習。一人一人のセリフの練習

3.3.2. 背景と目的

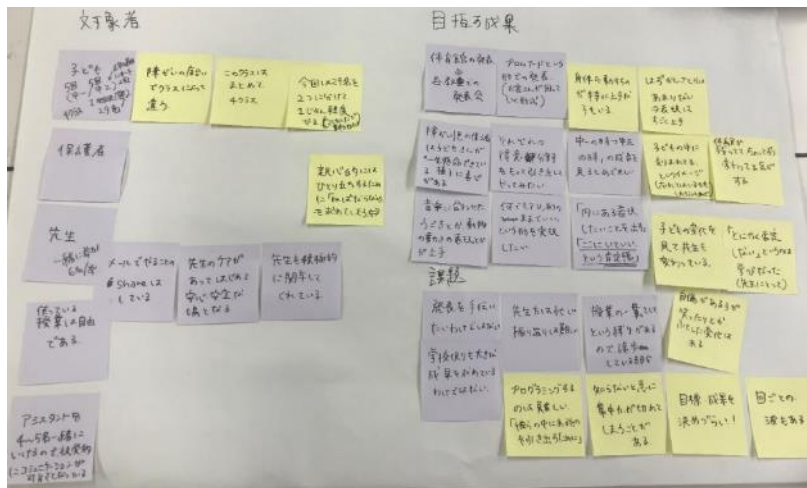
本プログラムの背景には、講師陣が実施してきたドラマ教育（Drama in Education : DIE）の流れがある。講師の一人である西海氏は英国のドラマ教育のスペシャリスト、ケネス・テイラー氏から学びワークショップを行っている（詳しくは2 エデュケーションワークショップを参照）。講師達を中心に DIE の実践を行うグループができ、本プログラムではアウトリーチの形で、地域の組織や団体と連携しながらプログラムを実施する運びとなった。

また、東京都立石神井特別支援学校とは昨年度もプログラムの実施があるが、既に昨年度より前から連携がある。学校側からは冬に予定される学校行事の発表会の練習のためにも、劇団という外部からの支援が必要とされている背景があった。プログラムでは、協働先にとって重要なことを踏まえた上で、参加者のありのままを受け入れられる場、他者とのコミュニケーションを自然に実践する場の実現を大切にする。こうした場を通し、参加者が自己受容感を持ち、自分の想いを相手に伝え、内発的な動機付けにつなげることを目指している。

3.3.3. ロジックモデル

昨年度のロジックモデルを踏まえて、劇団朋友からのヒアリングを実施し、今年度の新たなロジックモデルを作成した。

図表 3-7 障害者対象に関する劇団朋友へのヒアリング結果①

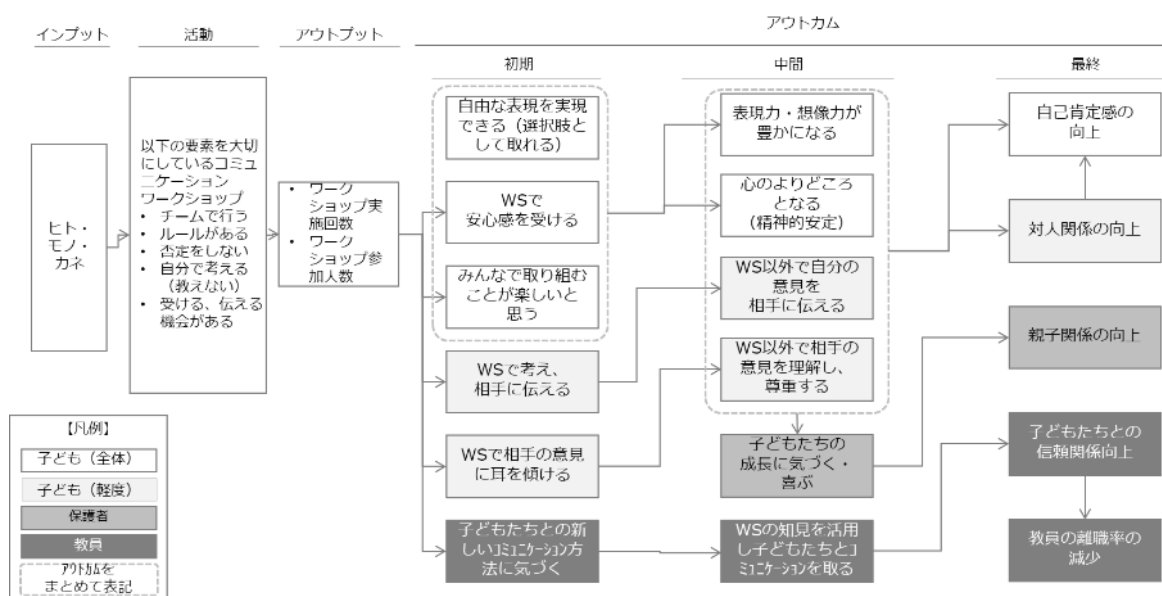


図表 3-8 障害者対象プログラムに関する劇団朋友へのヒアリング結果②

事業の目的・方向性	<ul style="list-style-type: none"> 心の内にある表現を引き出す 「ありのままが良い」「ここにいてよい」という実感をもたらし
昨年度から見えてきた成果	<p>子どもに関する成果</p> <ul style="list-style-type: none"> 自傷しがちな子が、ふとした時に笑顔を見せてくれた 成長を感じるが、体験が記憶に刻まれて、何かの拍子に表出するイメージ <p>先生に関する成果</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもたちが授業では見せない姿を見せてくれたことに先生たちは驚いていた 「とにかく否定しないこと」の大切さを知るきっかけになっていた <p>保護者に関する成果</p> <ul style="list-style-type: none"> 発表会のときに子どもが反応してくれたり、発表会後に写真を撮ったりするときに笑顔があった。保護者は子どもたちの成長を見て非常に喜んでる様子であり、これも成果だと思った

<p>昨年度から見えてきた課題と対応策</p>	<p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> 発表会は決められたことをする必要もあるので、本来ワークショップで実現したい自由な表現を抑えざるを得ない懸念がある（発表会では、先生がうまくナレーションをつなげるなどし、「完成されていること」に焦点が当たる場合が多い）。授業であるということや、保護者のニーズに応えるということもあるため、ある程度互いのニーズを満たすような形での妥協案で実施しなければならない状況がある 障害児にも軽度～重度等色々なケースがあるので目標・成果を決めづらい。昨年は自己肯定感の向上を目標にしていたが、今年度どうするかは考えなければならない 知らない話だと子どもたちの集中力が切れやすく、回ごとに反応に波がある（桃太郎、赤ずきんちゃんもやったが、反応なし等。） <p>対応策</p> <ul style="list-style-type: none"> 通常は 120 分だが、中だるみを避けるために今年度は 60 分で実施する 新しいお話を聞くというよりも、どれだけ反芻するかが重要。朋友としては、回を重ねると新しいものを実践したいが、繰り返すことも重要
-------------------------	--

図表 3-9 障害者対象プログラムのロジックモデルの修正版



ヒアリング結果を受けて、昨年度から図表 3-9 のようにロジックモデルを修正した。具体的な修正点としては、子どもを全体と軽度の子どもたちに分けて成果を表したこと、教員に加えて保護者の成果を追加したことがある。

また、プログラムの内容に加えて、協働先とのプログラムに向かう体制の重要性もヒアリングから得られた。ワークショップそのものの効果を測定するための評価設問とは別に、ワークショップを効果的に実施するためには、ワークショップを理解している、劇団朋友と協働先が協力しているなどの協働体制が重要なのではないか？という仮説があげられた。このような仮説は、特別支援学校だけでなく、高齢者施設や児童養護施設等複数のワークショップ実施先のある劇団朋友だからこそ生まれたものでもあり、そのため、協働体制を問う評価設問を設定することとした。下記、劇団朋友から得られたコメントをまとめる。

『教員の理解度は高く、積極的に関与してくれる。障害児のケアなど、教員がいなければワークショップ自体が成り立たないところもある。積極的にケアをしてくれる。』

『授業の予定が詰まっており、事前・事後に丁寧な議論をしづらい。』

『発表のための準備・指導をお願いされることもあり、本来のワークショップの目的とは異なる意図になることがある。』

3.3.4. 評価設問と指標

作成したロジックモデルに則り、下記のように評価設問と指標を作成した。今年度調査に関しては、調査時期を勘案し、保護者への指標の設定はせず、子どもたちと教員の指標のみを設定した。また、設定した指標の回答者は全て教員とした。

図表 3-10 障害者対象プログラムのアウトカムと評価設問

アウトカム種類	アウトカム項目	評価設問	測定方法、時期
初期－子ども (全体)	自由な表現を実現できる(選択肢として取れる)	プログラムにおいて子どもたちは自由な表現を実現できていたか? (「学校教科と比較してどの程度選択肢として機能していたか」)	教員向けアンケート、毎ワークショップ後
	ワークショップで安心感を受ける	プログラムにおいて子どもたちは安心して参加していたか? (「子どもたちはワークショップを安心して受けていましたか」)	
	みんなで取り組むことが楽しいと思う	プログラムにおいて子どもたちは友だちと楽しく参加していたか? (「子どもたちは共に楽しんで取り組んでいましたか」)	
初期－子ども (軽度)	ワークショップで考え、相手に伝える	プログラムにおいて子どもたちは周囲に自分の感情や意見を伝えられていたか?	教員向けアンケート、初回・最終回の2回
	ワークショップで相手の意見に耳を傾ける	プログラムにおいて子どもたちは周囲の感情や意見を聞いていたか?	
初期－教員	子どもたちとの新しいコミュニケーション方法に気づく	先生にとって新たな子どもたちとの接し方に気づくことができる機会であったか?	
中間－子ども (全体)	表現力・想像力が豊かになる	子どもたちはそれぞれ独自の発想を持っている、それを表現できるか?	
	心のよりどころとなる(精神的安定)	プログラム実施が子どもたちにとって心のよりどころとなっているか?	
中間－子ども (軽度)	ワークショップ以外で自分の意見を相手に伝える	「友達の考えとつないで、意見を伝えることができる」	
	相手の意見を理解し、尊重する	「友達の意見や立場を尊重することができる」	
中間－教員	ワークショップの知見を活用し、子どもたちとコミュニケーションを取る	「ワークショップで学んだことを、普段の業務で活用したことはありますか」	
最終－子ども (全体)	自己肯定感の向上	「子どもたちは自分自身に誇りをもっている」	
最終－子ども (軽度)	対人関係の向上	「子どもたちは、何でも打ち明けられる友達がいる」	
最終－教員	子どもたちとの信頼関係向上	「生徒は自身のことを信頼し、慕ってくれていると思えますか」	
	教員の離職率の減少	学校の全体の平均離職率とワークショップ経験のある教員の平均離職率(長期的)	測定なし

協働体制を問う評価設問を下記のように設定した。

図表 3-11 協働体制を問うための評価設問と指標

指標の種類	評価設問	協働体制に関する指標	測定方法	測定時期
ストラクチャー指標	どの程度の職員がワークショップの知識があるか？	ワークショップを知っている施設の職員数	・施設職員による自己評価	・初回、最後
	どの程度の職員がワークショップを理解しているか？	ワークショップを理解している施設の職員数		
プロセス指標	どの程度の職員がワークショップに参加しているか？	ワークショップに共に参加する施設の職員数	・朋友による評価	・毎ワークショップ後
		ワークショップに参加した施設職員の人数・回数		
	どの程度の職員とワークショップについて議論できているか？	施設職員がワークショップについて議論した回数	・朋友による評価	・毎ワークショップ後
アウトカム指標	どの程度の職員がワークショップに対して前向きに取り組んでいるか？	ワークショップに関する協働体制「協働先の熱意は十分だと言えますか」	・朋友による評価	・初回、最後
		ワークショップに関する協働体制（コミットメント）「ワークショップに対して、どの程度関わりたいと思いますか」	・施設職員による自己評価	・初回、最後
		協働先との人間関係「協働先とは、十分なコミュニケーションを取りやすい関係性がありますか」	・朋友による評価 ・施設職員による自己評価	・初回、最後

3.3.5. 測定と分析結果

3.3.5.1. 定性結果

評価者がワークショップを見学した結果から、全体としてクラスの多くの子どもたちが自主的に参加している様子が観察できた。ワークショップの一例では、手をつないで動く、動物になって歩いてみる、音楽に合わせて踊る、ペアでドアを作ってそのドアを他の人が通る、等の項目を実施した上で、最後に発表会の練習としてナレーションの練習や、全体の演目の練習を実施していた。この内、特にドアを作ってそこをみんなが通る、というワークにおいては、半分以上が積極的にやりたい、やりたいと参加し、先生も生徒も楽しく自主的に参加している様子が伺えた。自ら進んで参加していなくても、周囲で観察してみている生徒たちも安定しており、楽しそうに見ていた。ドアをやりたい人、ドアをくぐりたい人、いずれも積極的に参加したがっていた。

また、教員への簡易インタビューを実施した結果、「子どもたちが安心して楽しんで参加できる場の提供を受けて助かっている」、「演劇という専門性を持った劇団員の方が来ることにより、発表会の練習に非常に役立っている」という声が聞かれた。

さらに、ワークショップの全日程が終了した後は、学校側から劇団側へ子どもたちからのメッセージが描かれた冊子が送られ、楽しかった様子や、感謝の意が表れていた。特に、子どもたちがワークショップの講師の名前を憶えていたこともうかがえた。

図表 3-12 障害者対象プログラムの子どもたちからのメッセージが描かれた冊子



3.3.5.2. 定量結果

定性結果に加えて、図表 3-10 に示した評価設問に則って、複数の項目を定量的に測定した。毎回のワークショップ後、教員に回答をもらったアンケート結果について図表 3-13 に示す。その結果、全ての項目で肯定的な回答が得られた。特に、「3. 子どもたちは普段よりも、みんなで楽しく参加していた」という項目については、3.5 と高い平均値が得られた。一方で、「6. 先生自身が、子どもたちの新しい接し方に気づくことができた」については、相対的に低い結果となっている。この理由として、一部アンケートのコメントとしても見られた、「普段から教員が子どもたちに真摯に向き合っているという誇り」というものがあげられると考えられる。以下、自由記述として得られたコメントをそのまま引用する。

『特別な授業というのは、生徒によっては逆にストレスをかけることになる。質問に普段よりもと書くのは、教員に対して失礼だと感じる。生徒の心のケアをどれだけ考えていますか？普段通りにできることが一番難しいことです。』

『気持ちが高揚しすぎ、少し騒がしい場面もできてしまった。』

アンケートの設計として、ベースラインを取得することができないため、設問として「普段よりも」という比較級を用いたが、それに対して教員の一部からは「普段通りに実施していることへの誇り」が逆に引き出されたような結果となった。

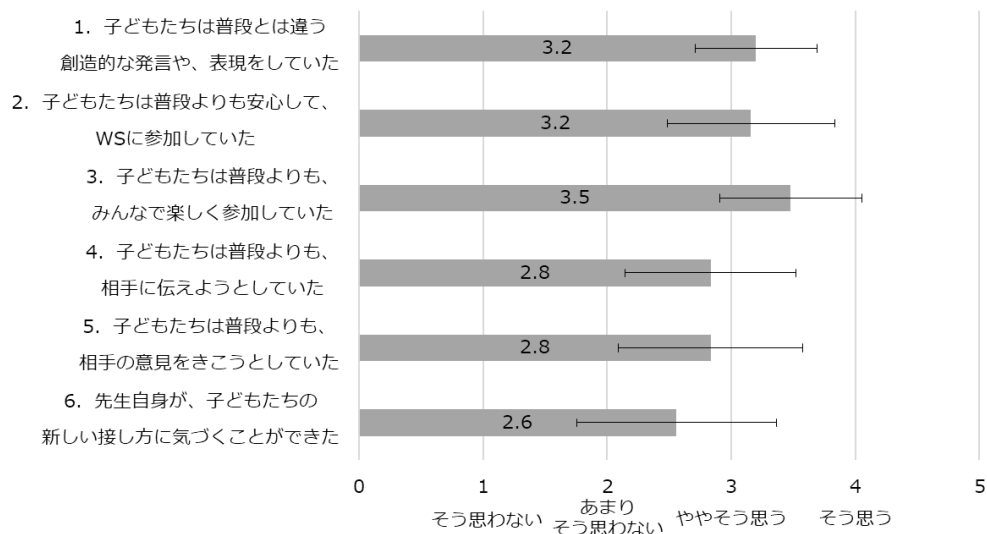
一方で、下記のように、「普段とは異なる」ということに関して意義を感じている教員の意見もあった。

『普段と違う活動で戸惑いもあるが、一方で普段と異なる経験をすることで、生徒自身新たな発見や、教員にとって、生徒の「普段と異なる面」が見られ、得られることの意義を感じている』

いずれのコメントからも得られるのは、演劇的手法によるワークショップが、授業の一環として行われていることで、「普段とは違う」状況を生徒にもたらしているということだろう。生徒から直接の声を聴いていないが、図表 3-12 の子どもたちからの感想では、「自由なダンスがたのしかったです」などの声も得られており、普段とは違う活動が子どもたちに肯定的な影響を及ぼしていることは示唆された。

図表 3-13 障害者対象プログラムの毎回のアンケート結果（教員の四段階評価平均値、N=25(11~12月)）

※図中のエラーバーはデータの変動を示しており、標準偏差の区間を表す（以下図表において全て同様）



実施時期が 11 月頃からの開始で、年 2 回のアンケートは、実施前と実施後で比較することができなかったが、最後にとったワークショップにおける子どもたちの様子に関するアンケートの結果を図表 3-14 にまとめる。その結果、「1-1.子どもたちはそれぞれ独自の発想を持っている」、「1-2.子どもたちはいつも劇団朋友のワークショップを心待ちにしている」、「1-7.子どもたちの細やかな変化に、自分自身良く気が付くと思う」の 3 項目では、やや肯定的な結果が得られた。一方で、その他の項目については肯定的、否定的な意見が半々で聞かれた。教員からの自由回答で得られたコメントを見ると、

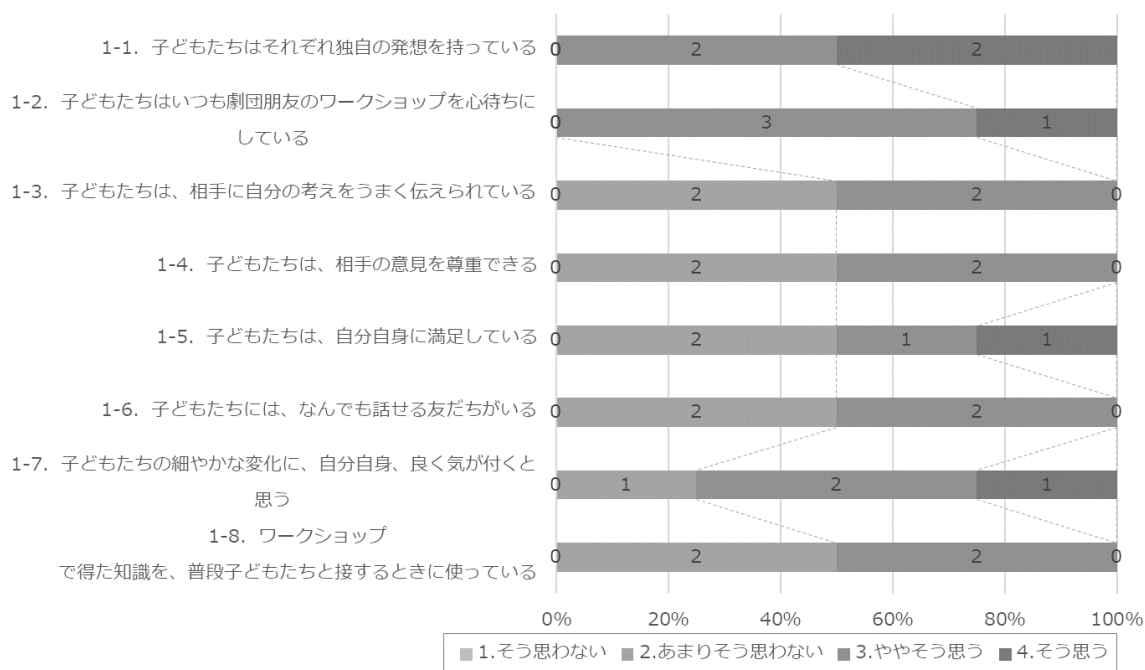
『活動内容について学校側の考えを聞いていただき、柔軟に対応していただいている』

『興味を持たなそうな生徒に対しても、少しでも声をかけたり、関わろうとしてもらってよかったです』

『やるのはかまわないが、年間を通して行うなど高等部の部活動で行っていくのはどうでしょう？希望が多いと思います』

など、実施自体には前向きな声が多く、劇団朋友が実施したい「ありのままで良い」「ここにいてよい」という実感をもちやす」ワークショップの雰囲気になっていたことが伺えた。

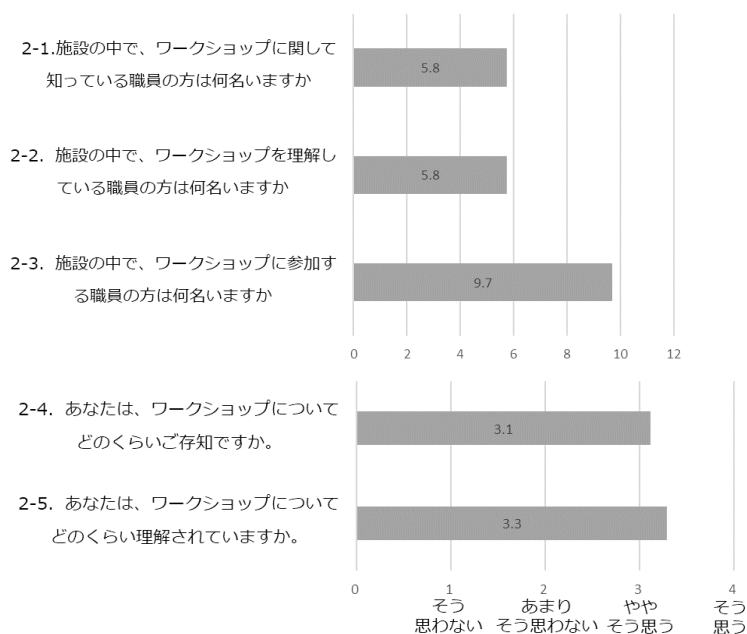
図表 3-14 障害者対象プログラムの最終回時アンケート結果 (教員の四段階評価平均値、N=9(12月))



3.3.5.3. 協働体制に関する結果

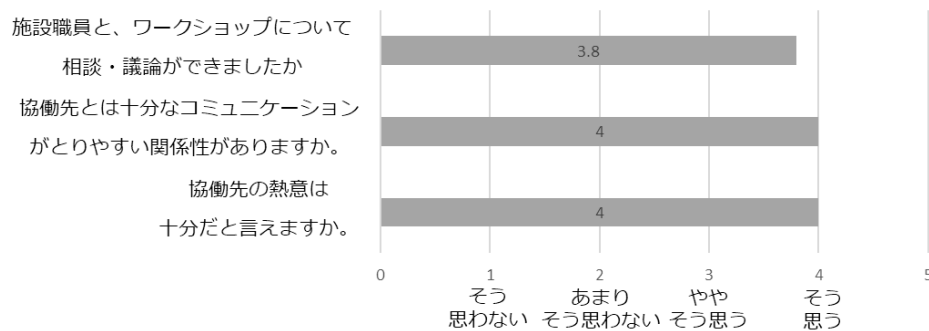
図表 3-11 に示した協働体制を問う指標に関して、複数の項目を定量的に測定した。その結果、平均して約 6 人の職員（教員）が、ワークショップを理解しているとの結果となり、平均してワークショップに参加する教員は約 10 人程度との結果であった。また、個別の回答として、ワークショップについてどのくらい知っているか、理解しているか、の設問に対しては、平均して 3.1、3.3 と、肯定的な回答が上回った。加えて、教員からは『生徒とワークショップを行う前に教員と一度ワークショップを行えるとよいかもしれないと考えました。』という自由回答もあり、今後継続して実施する場合には、教員向けのワークショップが実施されれば、より理解が深まる可能性が示唆された。

図表 3-15 障害者対象プログラムの協働体制に関するアンケート結果 (教員による回答、N=13(12月))



また、劇団朋友からの回答では、毎回の参加人数が子どもたち平均 27 人に対し、職員が 8 人という結果となった、また、各ワークショップについて相談・議論ができたか、コミュニケーションがとりやすかったか、協働先の熱意は充分であったかという設問に対しては、非常に肯定的な回答が得られた。

図表 3-16 障害者対象プログラムの協働体制に関するアンケート結果（劇団朋友による回答、N=5）



以上の結果より、障害者対象プログラムにおいては、劇団朋友と特別支援学校の間で十分な協働体制が取れていたことが示唆された。

3.3.6. まとめと今後の展望

3.3.6.1. 自己肯定感の向上と演劇ワークショップの価値を認識した割合

日本劇団協議会があらかじめ各プログラム共通で設定した 2 つの指標に関する結果を示す。1 つは、コミュニケーションワークショップ実施の前後でワークショップ参加者の自己肯定感が高まったか。もう 1 つは、各プログラムの協力団体が、ワークショップの価値を認識したかどうかである。

図表 3-17 2 つの共通指標の結果

No.	内容	目標値	実績値
1	コミュニケーションワークショップ実施前後で、ワークショップ参加者の自己肯定感が高まった割合	50%	(50%)
2	本事業の協力団体が、演劇的手法によるワークショップの価値を認識した割合	70%	80%

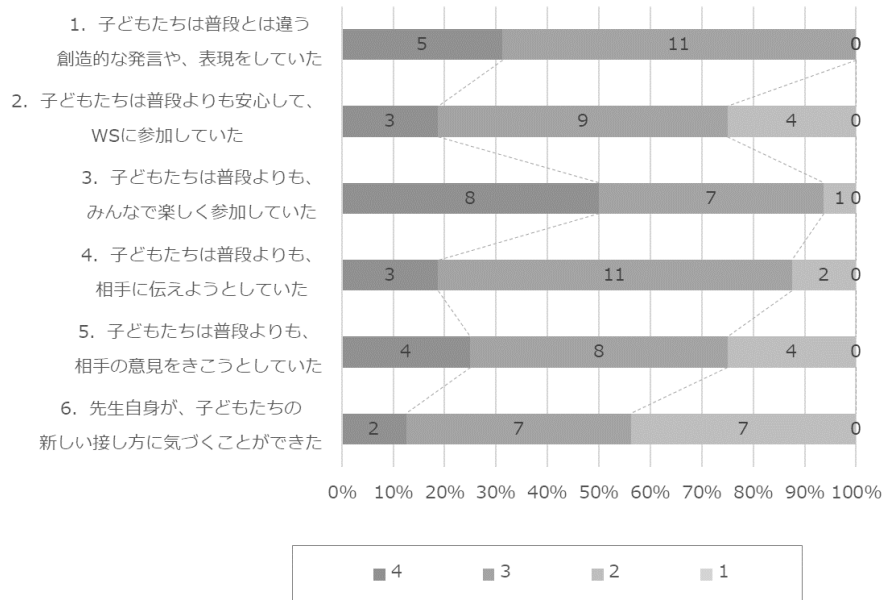
1 つ目の算出方法は、年 2 回の事前・事後の教員向けアンケートにおける「子どもたちは、自分自身に満足している」から算出した。一方で、本アンケートの回答は、最終回時のみとなっており、初回時におけるベースラインの測定ができていない。そのため、アンケートの肯定的な回答自体は 50%ではあるが、表記としては(50%)とした。

2 つ目の指標に関しては、各アウトカムについてプログラム実施後に行った教員のアンケートを回答数で見た場合に、1 つの項目を除くすべての項目で 70%以上が肯定的な回答をしていることがわかり、平均して約 80%の肯定的な回答が得られた（図表 3-18）。一方で、教員向けの協働体制に関するアンケート、「施設の中で、ワークショップを理解している職員の方は何人ですか」の回答数を、全体の回答数で除すると、13 人の内 5.8

人という平均回答のため、全職員の内 45%が理解していると言える。これらの結果から、学校内でプログラムの理解をしている教員は半数程度であるが、参加したことのある教員の価値認識は高いと言えるだろう。

図表 3-18 障害者対象プログラムの毎回のアンケート結果（教員の四段階評価、N=16(11月)）

※四段階評価で 4 が最も肯定的、1 が最も否定的



3.3.6.2. 評価の総括

本プログラムの評価の総括として、Rossi,2005「プログラム評価の理論と方法」より、以下の5つの観点で評価者によるアセスメントを行った。プログラムの評価とは、一般に下記5つの観点のうち1つ以上のアセスメントを伴うものとされている。各項目に対し、

- A：十分に可能性がある B：ある程度可能性がある C：どちらとも言えない D：あまり可能性はない
E：全く可能性はない
のいずれかで回答することとした。

図表 3-19 プログラムの評価に関する総括⁵

	評価設問	詳細	評価結果
1	課題分析の妥当性 (ニーズ)	プログラムが改善しようとしている社会状況やプログラムへのニーズに関する項目	対象者にとって重要な課題やニーズを十分に把握できていたか？
2	内容の妥当性 (セオリー)	プログラムの概念化とデザインに関する項目	演劇ワークショッププログラムは、(想定していた)対象者の課題やニーズに応えるものとして合理的かつ実行可能で、適切なものだったか？

⁵ Rossi,2005「プログラム評価の理論と方法」P.53

3	実施の適切性・ 十分性（プロセス）	プログラムの運営、実施、サービス提供に関する項目	演劇ワークショッププログラムの運営は、計画通りに、または臨機応変に適切に、十分な形で実施することができたか？
4	効果（アウトカム）	プログラムの成果・影響に関する項目	演劇ワークショッププログラムによって、期待するような変化・効果が生まれたか？
5	効率性	プログラムの費用・費用対効果に関する項目	演劇ワークショップは、今後も継続的に実施し続けられうるものか？

図表 3-20 障害者対象プログラムの評価に関する総括

	評価設問	詳細
1	課題分析の妥当性（ニーズ）	A：十分に可能性がある
2	内容の妥当性（セオリー）	A：十分に可能性がある
3	実施の適切性・十分性（プロセス）	B：ある程度可能性がある
4	効果（アウトカム）	B：ある程度可能性がある
5	効率性	B：ある程度可能性がある

1. 課題分析の妥当性については、評価としてニーズに関して掘り下げて分析を行ったものではないが、劇団朋友が昨年度から継続して特別支援学校側と協働体制を作り上げてきたため、細やかなニーズを広い、プログラムを設定できてきたと言えるだろう。具体的には、朋友側が実践したい、「ありのままで良い」「ここにいてよい」という実感をもちワークショップの実践と、学校側の求める発表会の準備を学校側と議論しながら調整し、授業としての設計を行ってきたことがあげられる。協働体制を測る結果に関しても、特別支援学校からも、劇団朋友からもおおむね肯定的な結果が得られており、本プログラムは対象者のニーズに応えられる体制があったと言える。一方で、日本においては、公教育の観点から、学校側のニーズ＝子どもたちのニーズ、と置き換えることも可能ではあるとは言え、子どもたちや保護者から直接のニーズを抽出するような体制がない。今後、より多面的に子どもたちのニーズに応えるためには、子どもや保護者の声を聴き出す機会を創出するだけでなく、教育施策の意図を汲み取ることも重要だと考えられる。

2. 内容の妥当性に関しては、劇団朋友側が積み重ねてきた DIE の実践を踏まえて、ニーズに対してどうプログラムを設計し、実践できるかについてロジックモデルを踏まえて議論できたため、十分にその妥当性があると言える。昨年度既に実績のあるプログラムを踏まえて、劇団朋友と調査員との議論を行い、プログラムから求めるアウトカムが創出されないのではないかなど、新たにロジックモデルを作り直している。今後も継続する場合には、今年度の結果を踏まえ、さらにロジックモデルを更新することなどにより、よりよいプログラム設計が可能となるであろう。

3. 実施の適切性・十分性については、滞りなくプログラムを実践できていた一方で、開始が当初の予定よりもやや遅い 11 月以降となってしまったことから、ある程度可能性があると言える。プログラムの開始時期に関しては、学校側のニーズによるものでもあるため、今後より良いプロセスに向けては、学校側との定期的な議論が必要となるだろう。ワークショップの実施に関しては、毎回子どもたちが約 30 人、教員が 10 人程度参加するなど、協働先の理解も十分であったと言える。かつ毎回の教員が回答するアンケート結果も肯定的な結果であったことから、十分に劇団朋友の意図が反映されたプログラムが実施されていたことがうかがえる。

4. アウトカムに関しては、子どもたちからのメッセージが描かれた冊子、および教員からの最終回時のアンケート結果からも、ある程度期待する成果が生まれた可能性があると言える。子どもたちはダンスや動物のワークシ

ワークショップが楽しかったという具体的な声を持ち、実際に「自由な表現を実現できる、ワークショップで安心感を受ける、みんなで取り組むことが楽しいと思う」といった初期アウトカムは期待する成果が生まれていたと考えられる。加えて、図表 3-14 の「1-2. 子どもたちがワークショップを心待ちにしている」の結果から、中間アウトカムである「心のよりどころとなる（精神的安定）」の項目にも影響があったことが示唆された。一方で、最終アウトカムである「自己肯定感の向上」に関しては、半数が肯定的（ベースラインの比較なし）な回答となったが、本プログラムからの影響かを判断することが困難であり、長期を要する成果に関しては引き続きの観察が必要であると考えられる。

5. 効率性に関しては、演劇ワークショップは、今後も継続的に実施し続けられうる可能性がある程度あると考えられる。上記示したように、プログラムが滞りなく行われ、期待する成果がある程度出ていると考えられており、複数の教員から継続したい旨があげられていた。今後継続するにあたっては、公教育の授業の枠の中で実践するという制限とワークショップの期待する成果の間で引き続きバランスを取りながら、費用対効果に関して考える必要が出てくるだろう。

総合的に見て、本プログラムは対象者のニーズに応え、滞りなく期待する成果の一部を実現できてきていると言える。今後継続のためには、引き続き協働体制を構築しながら、より良いプログラムの実施に向けて改善を続けていくことが重要であろう。

3.4. 【高齢者対象】（特別養護老人ホームはるびの郷）

プログラムの講師、調査員の一覧は図表 3-21 の通りである。

図表 3-21 No.1 プログラムの講師、調査員

講師	西海真理
講師アシスタント	水野千夏、こやまあつこ、細田知栄子、平塚美穂、武藤麗子、渡辺聖、敦澤穂奈美、船場未生、稲有寿沙
コーディネーター	夏川正一
	以上 劇団朋友
調査員	落合千華、栗野泰成

3.4.1. 概要、プログラム内容

高齢者対象プログラム内容を図表 3-22 にまとめた。

図表 3-22 高齢者対象プログラムの概要

対象者	高齢者（通所者、入所者）、施設職員および高齢者向け事業を担うボランティア
活動場所	特別養護老人ホームはるびの郷（社会福祉法人はるび。以下、はるびの郷）
プログラム目的	多様な演劇的手法を取り入れたワークショップで、高齢者が自由に表現し、新たに出会う人とのコミュニケーションの楽しさを体験することで、身体的・精神的な刺激を通じた QOL の向上を目指す。また、施設職員やボランティアの担い手と共に取り組むことで、年齢を超えた共生と、互いの学びへとつなげる
プログラム概要	講師がはるびの郷で通所者、入所者、施設職員、ボランティアなど対象を問わず演劇的ワークショップをグループに実施する。声を出すことを中心に、静止画やインプロなどにグループで取り組む。各ワークショップ約 10~20 人が参加
実施時期・期間	平成 30 年 7 月 22 日、8 月 15 日、8 月 26 日、9 月 19 日、9 月 23 日、10 月 7 日、10 月 10 日、11 月 7 日、11 月 11 日、12 月 23 日

図表 3-23 高齢者対象プログラムの流れの例（一部）

実施内容	詳細
名札の記入と 全体の説明	テーブルにそれぞれの名前（あだ名）を記入し、見えるところに貼る。全体のワークショップの流れについての説明
呼吸・発声	呼吸の意味や意義を伝えつつ、ゆっくりと息を長く吸ったり、吐いたりすることを繰り返す
拍手渡し（円になり、 声を出して自己紹介）	参加者全員で円になり、順番に声を出しながら自己紹介を行う。隣の人に拍手で渡していく。「元気に」「楽しく」「悲しく」など、感情表現豊かに、自己紹介を行う
じゃんけんゲーム	代表者とじゃんけんをし、最初は通常のじゃんけん、次に後出しじゃんけんを行う
身体を触れて、グループ で静止画を作る （ワンタッチオブジェ）	5~6 人程度のグループを作り、「海の日」などのテーマを全員で表現する。静止した写真を作る。一人の人が作ったものに、身体の一部が触れる形でグループの人が加わっていくように、作っていく

3.4.2. 背景と目的

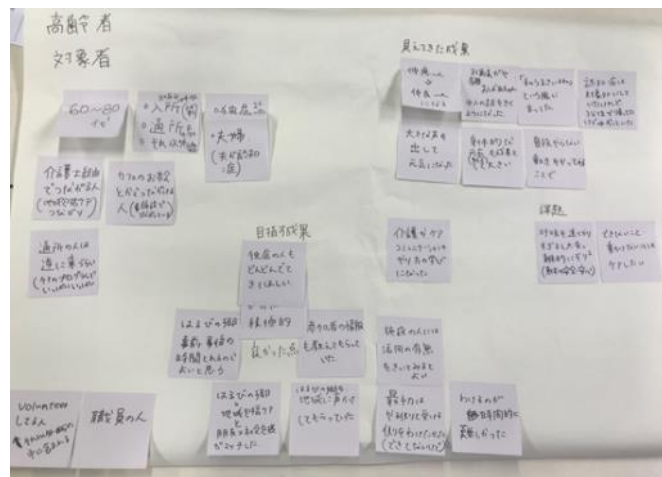
本プログラムの背景には、No.1 の障害者対象プログラムと同様、講師陣が実施してきた DIE の流れを汲んでいる。

はるびの郷とは昨年度からプログラムの実施があり、地域包括ケアの実施にも熱心な高齢者施設ということで、劇団員のつながりからプログラム実施が実現した。プログラムでは、協働先にとって重要なことを踏まえた上で、高齢者の方が普段しないような活発な動きや表現を取り入れ、精神的な面だけでなく、身体的にも日常生活で効果が表れることを期待して設計している。こうした場を通し、個々人の健康面に寄与するだけでなく、出会った人同士がつながり、地域のコミュニティが活性化することで、自発的な健康増進につながることも期待している。

3.4.3. ロジックモデル

昨年度のロジックモデルを踏まえて、劇団朋友からのヒアリングを実施し、今年度の新たなロジックモデルを作成した。

図表 3-24 高齢者対象プログラムに関する劇団朋友へのヒアリング結果①

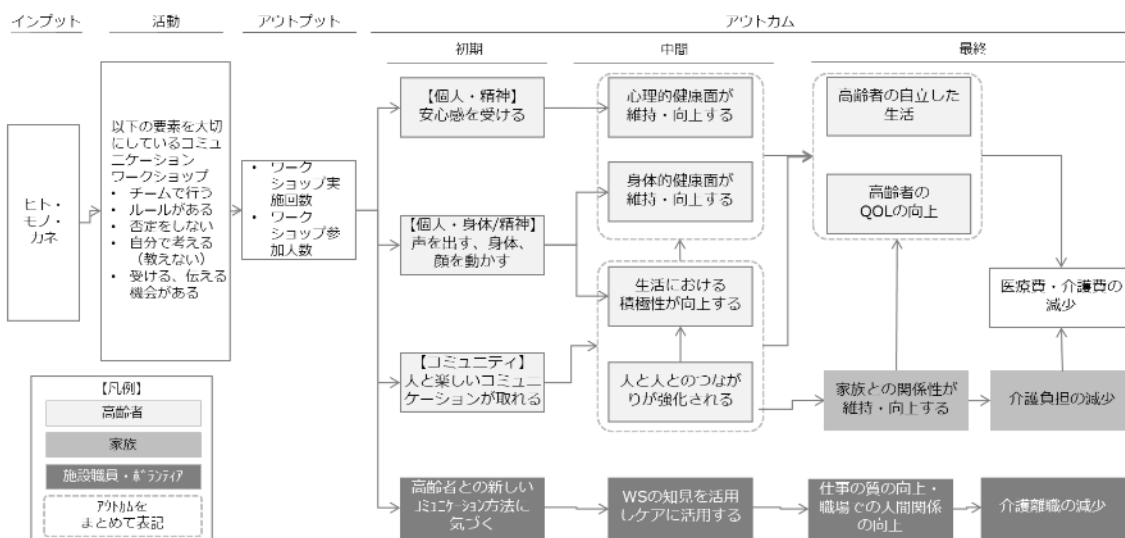


図表 3-25 高齢者対象プログラムに関する劇団朋友へのヒアリング結果②

事業の目的・方向性	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢者の方が普段しないような活発な動き・表現をして、元気になる ・ 精神的だけでなく、身体的にも日常生活で効果が現れることを期待している。心の内にある表現を引き出す
昨年度から見えてきた成果	<p>高齢者に関する成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 大きな声で脳を刺激するので、精神だけでなく、身体も元気になった。(参加者がゲームをしているときに無意識に立って動いていた) ・ 参加者の仲が良かった。入所者で仲が悪かった二人が話すようになった ・ 旦那さんが亡くなって落ち込んでいたが、外に出てこられるようになった ・ 周りから煙たがられるお騒がせおばあちゃんが、静かに人の話を聞くようになった(最後のときは、「私うるさいよね」と言っていた。) ・ 認知症の旦那さんを奥さんが連れてきて、2回目は1人で参加 <p>施設職員に関する成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ワークショップの際には毎回前向きに参加し、お互いの学びをワークショップ後に振り返る等、良い関係性構築ができた。そこから施設の中でもケアに活用することにつながっていた

<p>昨年度から見てきた課題と対応策</p>	<p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> 施設の入所者・通所者だけでなく、普段外に出ない独居の方こそ対象にしたい 耳が聞こえない方がおり、どのように参加させるか難しいと感じている 身体的な限度がそれぞれ異なるので、注意しつつ行うべきだと感じている。(以前呼吸のワークをやった時は、対象者の呼吸が荒くなり、大丈夫かと不安になった) 車いすの方の参加もあり、車いすのままでもできることはあるので、もっと工夫していこうと考えている <p>対応策</p> <ul style="list-style-type: none"> 自らは参加しづらい、独居の方等に関しては、地域包括ケア等を通じてアウトリーチする(実現可能性は要検討) ワークショップが身体的に大変な場合もあるので、「無理しないで、できる人だけでやりましょう。」と声をかけるなどを実践する
------------------------	--

図表 3-26 高齢者対象プログラムのロジックモデルの修正版



ヒアリング結果を受けて、昨年度から図表 3-26 のようにロジックモデルを修正した。具体的な修正点としては、初期アウトカムにも「人と楽しくコミュニケーションが取れる」など、コミュニティに関する成果を追加したこと、家族に関するアウトカムとして「家族との関係性が維持・向上する」という成果を追加したことなどがあげられる。

また、障害者対象プログラムと同様、プログラムの内容に加えて、協働先とのプログラムに向かう体制の重要性もヒアリングから得られた。ワークショップそのものの効果を測定するための評価設問とは別に、ワークショップを効果的に実施するためには、ワークショップを理解している、劇団朋友と協働先が協力しているなどの協働体制が重要なのではないか？という仮説があげられた。下記、はるびの郷との協働体制に関して劇団朋友から得られたコメントをまとめる。

『はるびの郷は、元々地域包括ケアの需要にこたえる形の事業を実施しており、演劇を通じた社会包摂事業の供給がうまくマッチした。』

『はるびの郷の職員との関係性は非常に良好。初めは、演劇ワークショップと言われても効果をイメージできなかったようだが、回を重ねると参加者の情報を提供してくれたり、地域住民に声かけをしてくれたり、ワークショップの開催にも協力的な姿勢がある。』

3.4.4. 評価設問と指標

作成したロジックモデルに則り、下記のように評価設問と指標を作成した。今年度調査に関しては、調査時期を勘案し、家族への指標の設定はせず、高齢者と施設職員の指標のみを設定した。また、高齢者に関するアウトカムと施設職員に関するアウトカムに分けて、それぞれ自己評価でのアンケート回答の形式をとることとした。

図表 3-27 高齢者対象プログラムの高齢者に関するアウトカムと評価設問

アウトカム種類	アウトカム項目	評価設問	測定方法	測定時期
初期	【個人・精神】安心感を受ける	ワークショップを安心して受けていたか（「不安なくワークショップに参加できましたか」）	・自己評価アンケート ・施設職員評価アンケート	毎ワークショップ後
	【個人・身体/精神】声を出す、体、顔を動かす	ワークショップで身体的な動きをできたか（「普段しないような健康的な活動ができましたか」）	・自己評価アンケート ・施設職員評価アンケート	毎ワークショップ後
	【コミュニティ】人と楽しいコミュニケーションが取れる	ワークショップでは周囲の人と良いコミュニケーションができたか（「周囲の人と楽しく取り組みましたか」）	・自己評価アンケート ・施設職員評価アンケート	毎ワークショップ後
中間	心理的健康面が維持・向上する	ワークショップの経験を通して、普段の生活の気持ちも明るくなったか	・心理的健康面の尺度に関する自己評価アンケート 「気持ちをなるべく明るく持つ」等	初回・最後
	身体的健康面が維持・向上する	ワークショップの経験を通して、身体的健康面が維持・向上したか	・健康の4段階評価に関する自己評価アンケート 「現在の健康状況について」	初回・最後
	生活における積極性が向上する	ワークショップの経験を通して、他の活動に対しても積極性が向上したか	・生活における活動参加、「地域の活動に参加する」に関する自己評価アンケート	初回・最後
	人と人とのつながりが強化される	ワークショップの経験を通して、どんな人とのつながりができたか	・「同居の家族以外に頼れる人」に関する自己評価アンケート	初回・最後
最終	高齢者の自立した生活	IADL（尺度を活用）	・自己評価アンケート	初回・最後
	高齢者のQOL向上	EQ-5D（尺度を活用）	・自己評価アンケート	初回・最後
	医療費・介護費の減少	要介護度	・自己評価アンケート	初回・最後

図表 3-28 高齢者対象プログラムの施設職員に関するアウトカムと評価設問

アウトカム種類	アウトカム項目	評価設問	測定方法	測定時期
初期	高齢者との新しいコミュニケーション方法に気づく	ワークショップでの気づきがあったか 「ワークショップを通して、高齢者の方とのコミュニケーション方法に新たな気づきがありましたか」	・自己評価アンケート	毎ワークショップ後
中間	ワークショップの知見を活用し、ケアに活用する	ワークショップの知見を普段活用できているか「ワークショップで学んだ知見を活用して業務に活かしたことがありますか」	・自己評価アンケート	毎ワークショップ後
最終	仕事の質の向上・職場での人間関係の向上	ワークショップを通して、労働条件等が改善したか	・労働条件等の不満に関する自己評価アンケート	初回・最後
	介護離職の減少	ワークショップを通して、勤務先での継続勤務に寄与があったか	・勤務先の勤続期間に関する自己評価アンケート ・施設データ	初回・最後

協働体制を問う評価設問は、No.1 障害者対象プログラムと同様、図表 3-11 のように設定した。

3.4.5. 測定と分析結果

3.4.5.1. 定性結果

評価者がワークショップを見学した結果から、全体として、昨年度からの継続参加の対象者も多く、また、施設入所の方から地域住民の方まで、多様な方が楽しんで参加している様子が伺えた。ワークショップの一例では、大きな声であいさつをする、自己紹介をするというものがあり、多くの人が思った以上に「運動になる」「楽しい」と、終始笑顔で参加している様子があった。施設職員も一緒になって参加しており、身体的に不安がある人も安心して参加している様子が見受けられた。

また、参加者と施設職員への簡易インタビューを実施した結果、「毎回大笑いすることができ、楽しい」、「もっといろんな人が参加出来たらよい」「いつも劇団朋友の人に来てもらって、ありがたい」という声が聞かれた。劇団朋友が独自で実施した自由記述のアンケートからは、多くの方が「とてもおもしろかった」と回答し、「声を出し、笑うこと」や、グループで静止画を作る「ワンタッチオブジェ」が特に楽しかったという声が寄せられた。ワンタッチオブジェを実施する際には、高齢者、施設職員、劇団朋友のメンバーが一つのグループになってそれぞれ取り組んでおり、車いすの方も一緒に楽しく取り組む様子が見受けられた。

劇団朋友では、ワークショップの設計の際に、図表 3-30 のように、何を狙いとして各活動をやるのかが明確に記してあり、また、座って行うもの、立って行うものも予め決められている。こうした目的に沿った細やかな設計が、「高齢者が普段しないような活発な動き・表現をして、元気になる。」という目的を踏まえた各成果につながっていくと考えられる。

図表 3-29 ワークショップの様子（ワンタッチオブジェの作成）



図表 3-30 高齢者対象プログラムの設計資料（劇団朋友作成）

うだであそぼう！ 2018年7月22日（日）はるびの郷（高齢者一般対象）10:00-11:30（一般 職 daysa-サービス ヘルパー-13名スタッフ 名 合計 イ

普段使わない声や身体を動かしてみる左脳の活性化、楽観脳の刺激。コミュニケーション（受け止める、伝える、協働）

time	activity	内容	狙い	convention		
10:10	10	スタッフ紹介・本日の目的	普段使わない体や声を出して脳を活性化、セロトニンの増加	目的伝達		坐
10:18	8	呼吸・発声	呼吸の意味意義→1・2・4・8・16 あいうえお10回ずつ	左脳の活性化		坐
10:32	15	拍手渡し	名前を言って→自分の名前、隣の人の名前、「〇〇から△さんへ」→拍手なしで「さわやか」に自分の名前→エキサイト	受ける伝える 演じる	modeling	坐
10:42	10	じゃんけんgame	美穂とじゃんけん→後出しじゃんけん	テンション上げる、参加の増幅	modeling	坐
10:52	10	わっしょい	対抗戦、最長2分割ゲームわっしょい	受ける伝える、続ける、声を出す。	modeling	立
11:02	10	休憩				
11:17	15	still Image	結婚式・誕生日・七夕・ひな祭り	想像、創造		立
		Thought tracking				立
11:27	10	one touch obge	海の日	身体で表現。Touch 受け入れる、協働		立

88

3.4.5.2. 定量結果（毎回のワークショップ後）

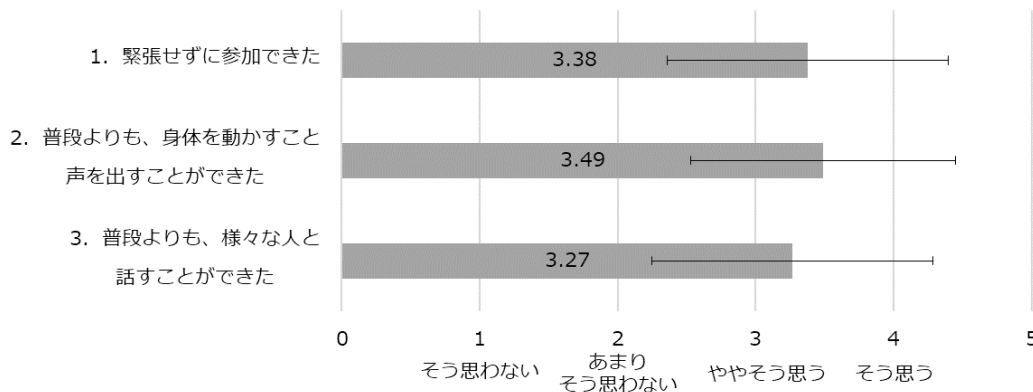
定性結果に加えて、図表 3-27、図表 3-28 に示した評価設問に則って、複数の項目を定量的に測定した。毎回のワークショップ後、対象の高齢者と、施設職員から集めたアンケート結果について図表 3-32、図表 3-33 に示す。その結果、全ての項目で肯定的な回答が得られた。特に、高齢者へのアンケートからも、施設職員のアンケートからも、「普段よりも身体を動かすこと、声を出すことができた」という項目について、最も肯定的な回答が得られている。また、全体の項目を通して、高齢者よりも施設職員の方が相対的にやや肯定的に捉えていることが示唆された。

中でも高齢者からは、自由記述の回答の中から「無理なく楽しく参加できる」という声が多く寄せられ、今後も継続してほしいという声もあげられていた。また、施設職員からは、独居の人への声を出す機会として有効、脳のトレーニングとして有効、といった声が寄せられた。下記に得られた声の一部を掲載する。

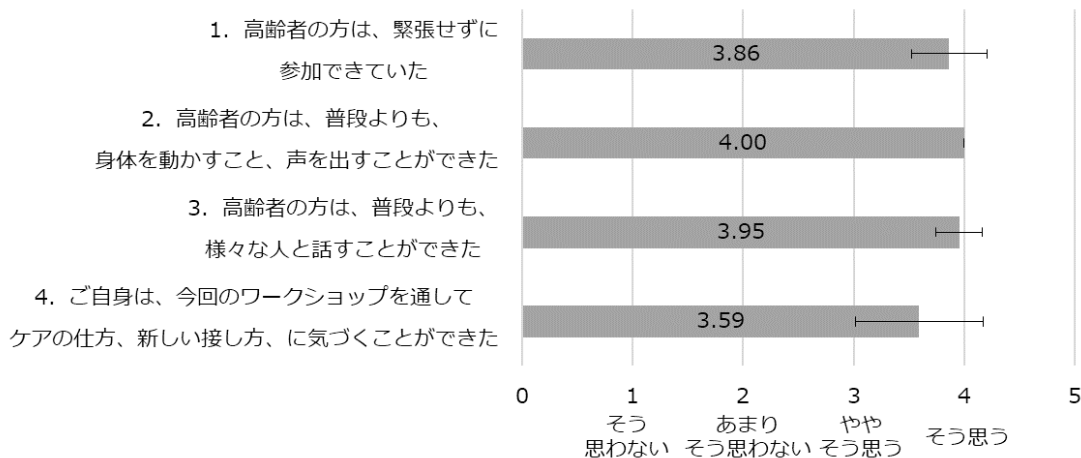
図表 3-31 自由回答から得られた声

対象者	得られた声
高齢者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 皆さんとこうしてやるのが楽しかった!ここに来るのが楽しみではない。動ける範囲で楽しめる ・ 簡単なことでもこんなに楽しく出来るのですね ・ ジェスチャーパントマイムなどで体の痛みを忘れて、有意義な時間を過ごす事が出来てありがとう ・ 知らない方とのふれあいがあった。自分だけでは出来ない動きができてよかった ・ すばらしい会です。こういうのは毎月でもやってほしい。体調が悪かったけれど無理してやってよかったと思います ・ 歩行出来ない車椅子生活なのでこうした行事はすごく楽しく、明日への勇気が出てくる。是非次回もお願いしたい ・ 若い方が入って下さり、一緒にやれた事が明るくてとてもよかった。若い人とのつながりが無い老人には何より ・ 最初は緊張しましたが、とても自然な流れで引き込まれていき、自分自身も皆さんも笑顔になりとても楽しい時間でした。体も脳も動かしたり、新たな動きで活性化。年を重ねても楽しく自分らしく過ごしていけるようになると良いなと思いました
施設職員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 参加者同士の距離感が最初に比べて近くなったと感じました ・ 独居の方が多く、普段声を出さない事が多いです。このような機会があちらこちらであると良いと思います ・ ミラーは相手の動き次の動きを考えなくてはならないので脳トレに有効だと思いました

図表 3-32 高齢者対象プログラムの毎回のアンケート結果（高齢者の四段階評価平均値、N=45）



図表 3-33 高齢者対象プログラムの毎回のアンケート結果（施設職員の四段階評価平均値、N=22）

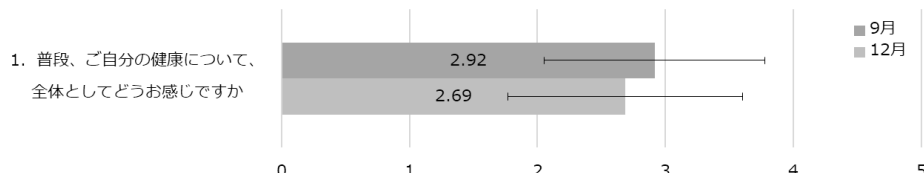


3.4.5.3. 定量結果（プログラム開始時と終了時）

高齢者対象プログラムでは、プログラム開始時と終了時に、対象者の変化を見るためのアンケートを実施した。高齢者、施設職員からの結果を共に、開始時と終了時と比較することができた。その結果、高齢者からの結果に関しては概ね維持傾向となった。特に IADL（自立度）の結果に関しては、9月と12月の結果を比較すると有意に改善したと言える（一方で、同じ対象者を9月と12月で比較しているわけではないため、注意が必要である）。

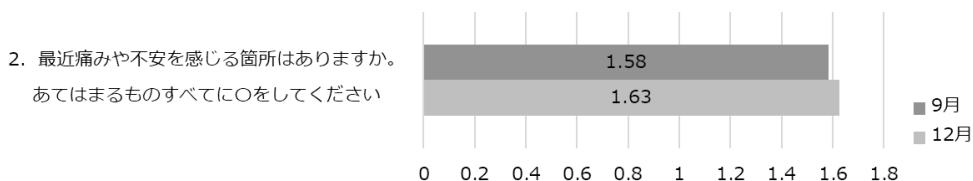
図表 3-34 高齢者対象プログラムの開始時・終了時アンケート結果①

（高齢者の四段階評価平均値、N=12（9月）、N=16（12月））4が最も肯定的、1が最も否定的な回答



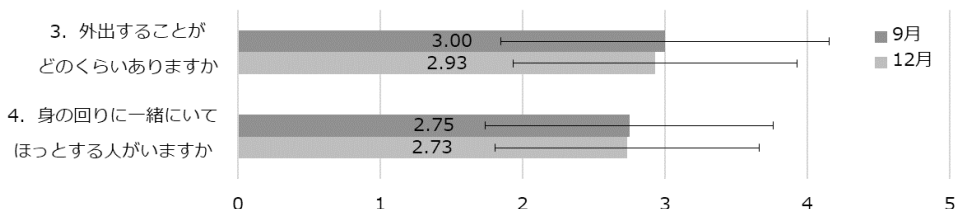
図表 3-35 高齢者対象プログラムの開始時・終了時アンケート結果②（高齢者の平均値、N=12（9月）、N=16（12月））

※痛みを感じる場所として腰、膝、腕、足、首、肩、その他の項目で算出



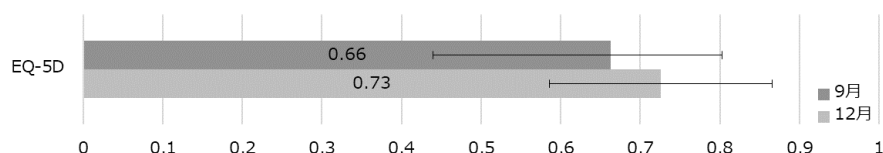
図表 3-36 高齢者対象プログラムの開始時・終了時アンケート結果③

（高齢者の平均値、N=12（9月）、N=16（12月））4が最も肯定的（頻度が高い）、1が最も否定的（頻度が低い）な回答

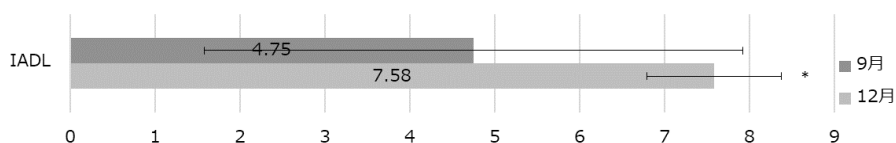


図表 3-37 高齢者対象プログラムの開始時・終了時アンケート結果④（高齢者の平均値、N=12（9月）、N=16（12月））

*P<0.05で有意差あり（等分散でないため、注意が必要）



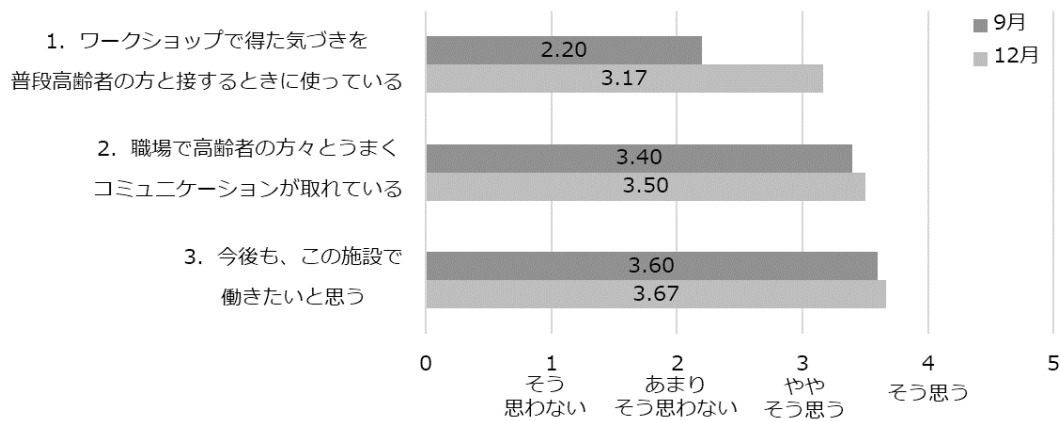
図表 3-38 高齢者対象プログラムの開始時・終了時アンケート結果⑤（高齢者の平均値、N=12（9月）、N=16（12月））



施設職員からの結果に関しても、概ね維持、改善という結果が得られた。特に「1. ワークショップで得た気づきを普段高齢者の方と接するときに使っている」という項目に関しては、平均で 2.2 だった回答が 3.2 となり、得られた学びをそれぞれが活用していることが考えられる。

図表 3-39 高齢者対象プログラムの開始時・終了時アンケート結果⑥

(施設職員の平均値、N=5 (9月)、N=6 (12月))



4. 今後、この施設には何年くらい働くつもりですか	5.2 年 (平均値)
---------------------------	-------------

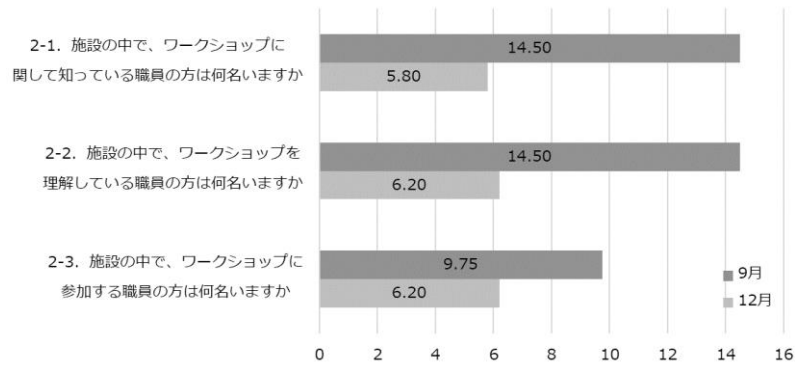
加えて、はるびの郷内の特別養護老人ホームに入所していた高齢者の方で、本プログラムに参加していた方が、症状が軽くなり、別の施設に移られたということも聞かれた。プログラムだけの効果によるものとは言えないが、こうした変化は介護度重症化予防にとって、意味があるデータであると考えられる。

3.4.5.4. 協働体制に関する結果

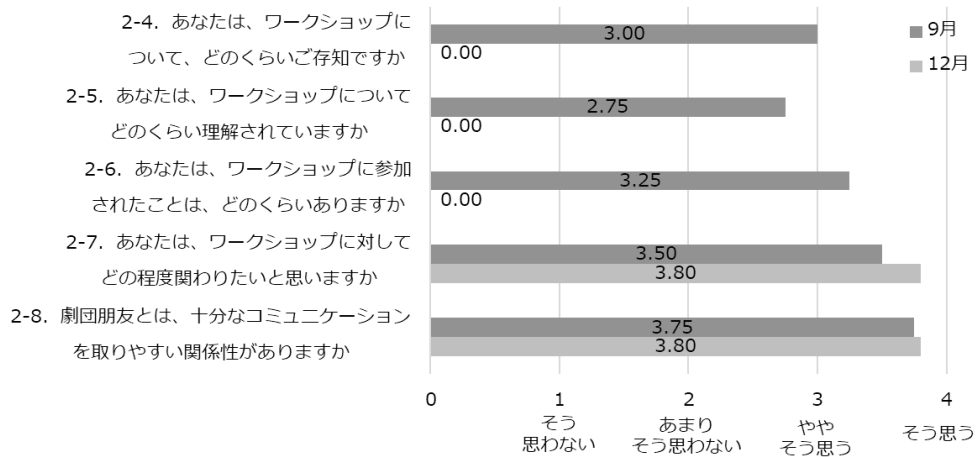
図表 3-11 に示した協働体制を問う指標に関して、複数の項目を定量的に測定した。その結果、平均して約 15 人の職員（施設職員）が、ワークショップを理解しているとの結果となり、平均してワークショップに参加する職員は約 15 人程度との結果であった。また、個別の回答として、ワークショップについてどのくらい知っているか、理解しているか、の設問に対しては、平均して 3.0、2.8 と、肯定的な回答が上回った。また、多くの職員が、ワークショップに参加し、ワークショップに積極的に関わりたいと思っていることが、図表 3-41 の結果からわかる。「2-8. 劇団朋友とは十分なコミュニケーションを取りやすい関係がありますか」では、平均の回答が 3.8 と、多くの職員が肯定的に答えたことがわかる。また、劇団朋友からの回答では、毎回の参加人数が高齢者平均 13 人に対し、職員が 5 人という結果となり、各ワークショップについて相談・議論ができたか、コミュニケーションがとりやすかったか、協働先の熱意は充分であったかという設問に対しては、100%で「4. できた」の回答が得られた。

以上の結果より、高齢者対象プログラムにおいては、劇団朋友とはるびの郷の間で十分な協働体制が取れていたことが示唆された。

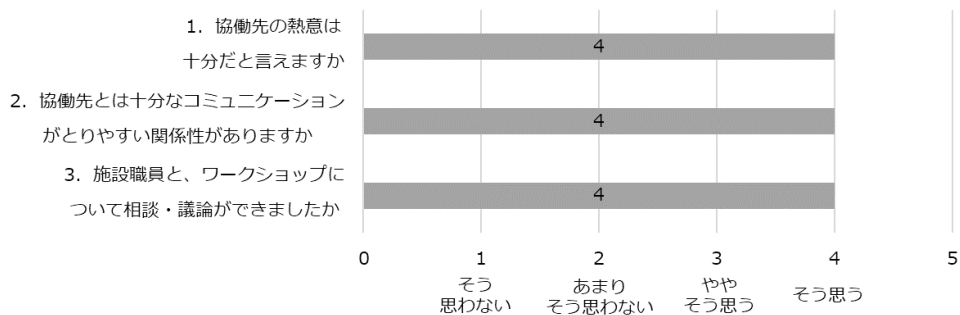
図表 3-40 高齢者対象プログラムの協働体制に関するアンケート結果①（施設職員の平均値、N=5（9月））



図表 3-41 高齢者対象プログラムの協働体制に関するアンケート結果②（施設職員の平均値、N=5（9月）、N=6（12月））



図表 3-42 高齢者対象プログラムの協働体制に関するアンケート結果③（劇団朋友による回答、N=4）



3.4.6. まとめと今後の展望

3.4.6.1. 自己肯定感の向上と演劇ワークショップの価値を認識した割合

日本劇団協議会があらかじめ各プログラム共通で設定した 2 つの指標に関する結果を示す。

図表 3-43 2つの共通指標の結果

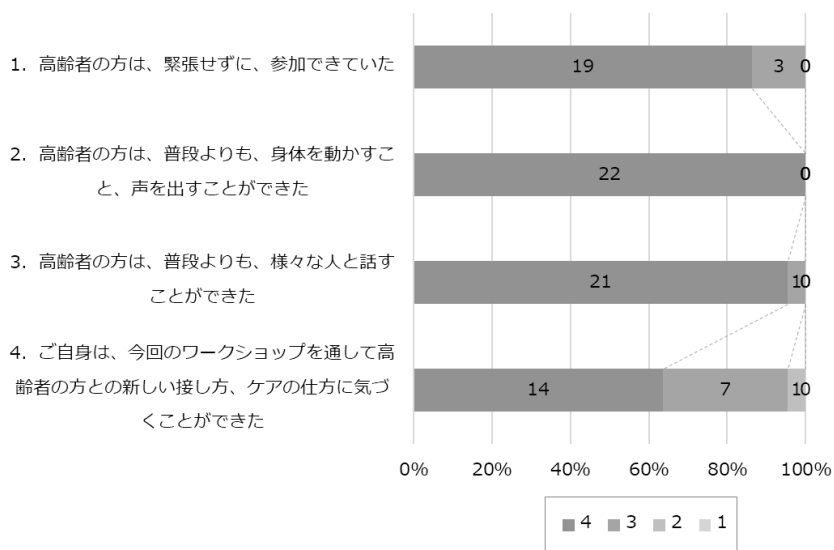
No.	内容	目標値	実績値
1	コミュニケーションワークショップ実施前後で、ワークショップ参加者の自己肯定感が高まった割合	50%	—
2	本事業の協力団体が、演劇的手法によるワークショップの価値を認識した割合	70%	99%

1 つ目の項目については、高齢者のアウトカムの中に自己肯定感が含まれていないため、実績値はなしとなっている。

2 つ目の指標に関しては、各アウトカムについてプログラム実施後に行った職員のアンケートを回答数で見た場合に、すべての項目で 90%以上が肯定的な回答をしていることがわかり、平均して 98.9%の肯定的な回答が得られた（図表 3-44）。一方で、職員向けの協働体制に関するアンケート、「あなたは、ワークショップについてどのくらい理解されていますか」の項目では、平均して 2.75 と、やや肯定的な結果にとどまっている。これらの結果から、参加したことのある職員の価値認識は非常に高いが、施設全体としては参加したことがない、理解していない職員が一定数いることが考えられる。

図表 3-44 高齢者対象プログラムの毎回のアンケート結果（職員の四段階評価、N=22(9~12月)）

4 が最も肯定的、1 が最も否定的な回答



3.4.6.2. 評価の総括

本プログラムの評価の総括として、3.3.6 と同様の 5 つの観点で評価者によるアセスメントを行った。図表 3-19 に示された各項目に対し、A：十分に可能性がある B：ある程度可能性がある C：どちらとも言えない D：あまり可能性はない E：全く可能性はない、のいずれかで回答した結果を図表 3-45 に示す。

図表 3-45 障害者対象プログラムの評価に関する総括

	評価設問	詳細
1	課題分析の妥当性（ニーズ）	A：十分に可能性がある
2	内容の妥当性（セオリー）	A：十分に可能性がある
3	実施の適切性・十分性（プロセス）	A：十分に可能性がある
4	効果（アウトカム）	B：ある程度可能性がある
5	効率性	B：ある程度可能性がある

1. 課題分析の妥当性については、評価としてニーズに関して掘り下げて分析を行ったものではないが、劇団朋友が昨年度から継続してはるびの郷と協働体制を作り上げてきたため、細やかなニーズを拾い、プログラムを設定できてきたと言えるだろう。特にはるびの郷に関しては、昨年度から「協働先とうまくコミュニケーションが取れている」「先方がプログラムの価値をそもそも認識してくれていて、共に実施することに前向きである」という状態があり、互いに前向きにプログラムの設計を実施できていた施設であり、対象者のニーズを直接的に拾えたことの成功要因とも考えられるだろう。高齢者からの直接のニーズに関しても、昨年度から本事業同様の評価の枠組みだけでなく、劇団朋友が独自にアンケートを直接実施するなど、丁寧に拾い上げてきた背景があると言える。

2. 内容の妥当性に関しては、劇団朋友側が積み重ねてきた DIE の実践に加えて、昨年度の実績を活かして、「車いすの方がいるときはこういう風にしよう」「認知症の方が多時はこういう注意が必要だ」など、プログラム実施先に合わせたプログラム設計を十分に考えられていたと言える。ニーズを丁寧に拾い上げた上で、実態に沿ったプログラムが実施可能であった。

3. 実施の適切性・十分性については、事前からはるびの郷と滞りなく連絡を取り合い、長期的なプログラムを予定通り実践できていたと言える。毎回の参加者も 10~20 人程度に対して、常に 5 人程度の職員が参加するという定型化が進んでおり、まさに協働してプログラムを定期的実施することができていたと言える。

4. アウトカムに関しては、インタビューや高齢者、職員からのアンケート結果からも、ある程度期待する成果が生まれたと言える。本プログラムの目的である「高齢者の方が元気になる」「精神的だけでなく、身体的にも日常生活で効果が現れる」といったことは、そのアウトカムの特性から長期的に、かつ対照群を設定して測定をすることにより初めて本プログラムの寄与度が測定可能となると考えられるが、今回の評価においても、開始、終了時での各アウトカム項目の維持傾向が見られ、特に IADL では有意な改善が見えたと言える。また、はるびの郷内の特別養護老人ホームに入所していた高齢者の方で、本プログラムに参加していた方が、症状が軽くなり、別の施設に移られたということも聞かれた。今後、より本プログラムの寄与度を明瞭に示すためには、対照群を設定しつつ、より長期的に継続して見ていくことが必要であると言える。

5. 効率性に関しては、演劇ワークショップは、今後も継続的に実施し続けられうる可能性がある程度あると考えられる。上記に示したように、協働先からの高いニーズを把握しており、それに基づいたプログラムが滞りなく行われ、期待する成果がある程度出ていると考えられる。今後継続するにあたっては、費用対効果の面を見られるとなおよいと考えられ、例えば要介護のレベルを長期的に把握しつつ、プログラムがどのくらいの効果があるかを明示できれば、はるびの郷を含む高齢者施設としても取り組みを継続する意義が高まり、劇団側のプログラム実施のための資金調達にも役立つと考えられる。

総合的に見て、本プログラムは対象者のニーズに応え、滞りなく期待する成果の一部を実現できてきていると言える。今後継続のためには、引き続き優れた協働体制を維持しながら、より良いプログラムの実施に向けて改善を続けていくことが重要であろう。

3.5. 【青少年対象】(児童養護施設杉並学園)

プログラムの講師、調査員の一覧は図表 3-46 の通りである。

図表 3-46 No.1 プログラムの講師、調査員

講師	水野千夏
講師アシスタント	西海真理、こやまあつこ、細田知栄子、平塚美穂、武藤麗子、渡辺聖、敦澤穂奈美、船場未生、稲有寿沙
コーディネーター	夏川正一
	以上 劇団朋友
調査員	落合千華、栗野泰成

3.5.1. 概要、プログラム内容

青少年対象のプログラム内容を図表 3-47 にまとめた。

図表 3-47 青少年対象プログラムの概要

対象者	児童養護施設にいる子ども（小学生 1、4、5、6 年生）
活動場所	社会福祉法人光明会杉並学園（以下、杉並学園）
プログラム目的	多様な演劇的手法を取り入れたワークショップで、子どもたちが自由に表現し、コミュニケーションの楽しさを体験し、自己受容感とコミュニケーション能力が向上する
プログラム概要	講師が児童養護施設で演劇的ワークショップを実施する。静止画、インプロなどにグループで取り組む。参加する子どもは小学校 1~6 年生約 10 人（卒業生である中学校 1 年生が参加することもある。）
実施時期・期間	平成 30 年 7 月 8 日、7 月 21 日、8 月 18 日、8 月 25 日、9 月 2 日、9 月 17 日、9 月 29 日、10 月 8 日、11 月 3 日、11 月 23 日

図表 3-48 青少年対象プログラムの流れの例

実施内容	詳細
名札の記入と全体の説明	テープにそれぞれの名前（あだ名）を記入し、見えるところに貼る。全体のワークショップの流れについての説明
名前ゲーム	拍手をしながら自分の名前や次の人の名前を言う。喜怒哀楽を交えて自己紹介をする。リズムに合わせて名前を送る等
ストップ&ゴー	歩く、ストップ、ゴー、ジャンプ、拍手、ビーム、溶ける、等複数の身体表現を決めた上で、ルールの基に動き回る
休憩	
物を作る	自転車、滑り台、学校、水族館等の場所やものを身体で表現してみ、相手に伝える
「どきん」の表現	「オノマトペ」を考えて、ペアになって動きを作る。「泳いでみようかな」等と思った時に、どんな音が想像できるかを考え、それを体で表現してみる
静止画	物語を選んでグループで静止画を作る

3.5.2. 背景と目的

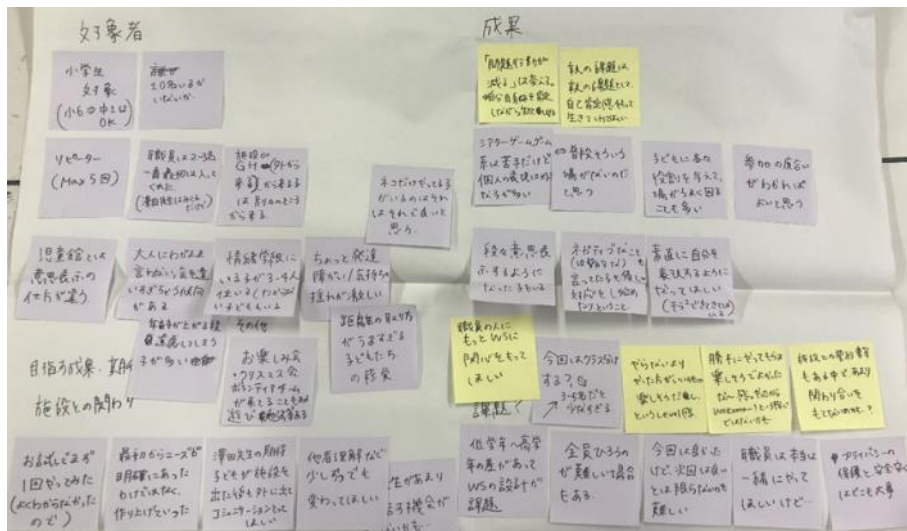
本プログラムの背景には、No.1 の障害者対象プログラム、No.2 の高齢者対象プログラムと同様、講師陣が実施してきたDIEの流れを汲んでいる。

杉並学園とは昨年度からプログラムの実施があり、昨年度からのリピーターという形で参加する小学生、あるいは卒業した中学生も複数いる。プログラムでは、児童養護施設の職員らと議論しつつ、子どもたちが安心して参加できる場を提供し、コミュニケーションがよりうまくできるようになるように考えて設計されている。こうした場を通し、子どもたちが自分自身を肯定的に捉え、素直に周囲とコミュニケーションを取れるようになることを目的としている。

3.5.3. ロジックモデル

昨年度のロジックモデルを踏まえて、劇団朋友からのヒアリングを実施し、今年度の新たなロジックモデルを作成した。

図表 3-49 青少年対象プログラムに関する劇団朋友へのヒアリング結果①

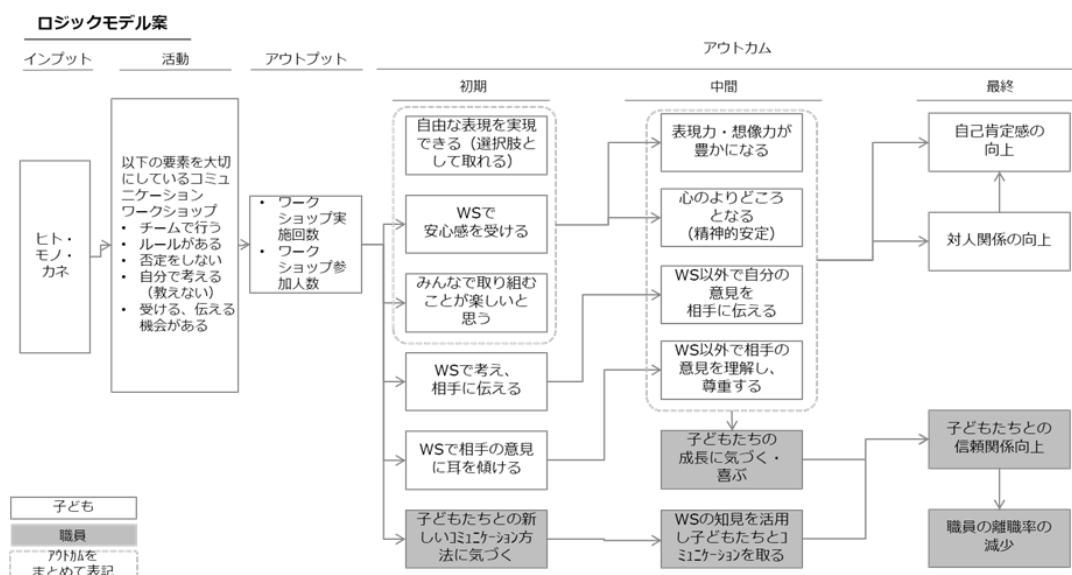


図表 3-50 青少年対象プログラムに関する劇団朋友へのヒアリング結果②

事業の目的・方向性	<ul style="list-style-type: none"> 施設の中だけでなく、外でもコミュニケーションが取れるようになること 自分自身をもっと肯定的にとらえられるように手助けをしたい 素直に、自分のやりたいことを意思表示できるようになること
昨年度から見てきた成果	<ul style="list-style-type: none"> 少しずつだが、高学年の子たちが意思表示するようになった ネガティブ（死ぬ・殺す）な言葉ばかり言う男の子が優しい態度を取った。（「騙されてかわいそうだと思う。」という発言。相手の動きをミラーリングするアクティビティで、相手がついていけないときに、動きに合わせてゆっくりやってくれた。等） 子どもに役割を与えると、場がうまくまわることも見てきた
昨年度から見てきた課題と対応策	<p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> 情緒学級に入っている子が 3,4 人いて、ルールをなかなか理解できない。「何を言っているかわかりません。」「どういう意味ですか?」と聞いてくることもある ルールがあるゲームが苦手だが、演じたり、静止画を作ったりするのは積極的な印象。ワークの内容によってばらつきがある 職員同士、子ども同士の横のつながりが意外とない。（施設だけでなく、グループホームのような外部から来る子どももいるため、顔見知りではあると思うが、横の繋がりには少ない様子。） 昨年は「問題行動が減る」というアウトカムを設定していたが、あまり関係ないかもしれない 低学年と高学年の差があり、プログラムの設計が難しい（簡単な内容だと 6 年生は飽きる、難しい内容だと 1 年生はついていけない等。） 1 年生の中には一日中ワークショップの内容に参加せずに猫のようにふるまう子どももいる

	<p>対応策</p> <ul style="list-style-type: none"> 2つのクラスに分けるといった意見も出たが、一部反対意見もある。反対の理由としては、1クラスが3人～5人になってしまう、他の人の演技を見ることも大事でもあり、全員ワークショップに「きちんと」参加することが必須なのではなく、ずっと注目してもらえない時間を作ることで、子どもたちも考えるきっかけになる等の効果もあると考えられる
--	---

図表 3-51 青少年対象プログラムのロジックモデルの修正版



ヒアリング結果を受けて、昨年度から図表 3-51 のようにロジックモデルを修正した。具体的な修正点としては、初期アウトカムに「自由な表現を実現できる（選択肢として取れる）」といった、意思表示を示すアウトカム項目を追加したこと、中間アウトカムに「ワークショップ自体が心のよりどころとなる（精神的安定）」となることにより、最終的に対人関係が向上していくことなどを追加した点があげられる。他に、昨年度のロジックモデルにおいては「生活の質が向上する」という子どもたちの最終アウトカムを入れていたが、本プログラムにおいてそこまでの範囲を想定していないという意見があげられ、削除することとなった。

また、障害者対象プログラム、高齢者対象プログラムと同様、プログラムの内容に加えて、協働先とのプログラムに向かう体制の重要性もヒアリングから得られた。ワークショップそのものの効果を測定するための評価設問とは別に、ワークショップを効果的に実施するためには、ワークショップを理解している、劇団朋友と協働先が協力しているなどの協働体制が重要なのではないか？という仮説があげられた。下記、児童養護施設との協働体制に関して劇団朋友から得られたコメントをまとめる。

『毎回いるのは1人の職員のみで、あまり話す機会はない。他の職員2～3人は初回のみ参加した。』

『1人の職員が担当している形であるが、積極的に子どもを誘ってくれているわけではないかもしれない。（施設の構造的なものか、職員の性格か、周囲の職員はあまり巻き込まれていない。）』

『最初から施設にワークショップのニーズがあったわけではない。まずやってみよう、というところから目的を作り上げていったが、施設が求めるものをつかみきれない。』

『職員にはワークショップに参加して、どういった体験を子どもたちがしているのか知って欲しいと思っているが、うまくいかない。（→ボランティア規則・誓約書があるくらいなので、職員と子どもの距離感を保っているのかもしれない。）』

『施設職員にとってのワークショップの印象は、外部からの支援がきてありがたく、子どもは楽しそうであった、といったものである印象。』

3.5.4. 評価設問と指標

作成したロジックモデルに則り、下記のように評価設問と指標を作成した。今年度調査に関しては、子どもたちに関するアウトカム、職員に関するアウトカム共に指標を設定した。それぞれ自己評価又は施設職員によるアンケート回答の形式をとることとした。

図表 3-52 青少年対象プログラムの子どもに関するアウトカムと評価設問

アウトカム種類	アウトカム項目	評価設問	測定方法	測定時期
初期	自由な表現を実現できる（選択肢として取れる）	ワークショップは自由な表現を実現する選択肢となったか	施設職員評価アンケート	毎ワークショップ後
	ワークショップで安心感を受ける	ワークショップで子どもたちは安心感を受けたか	施設職員評価アンケート	毎ワークショップ後
	みんなで取り組むことが楽しいと思う	ワークショップでの子どもたちの様子は毎回楽しそうであったか	施設職員評価アンケート	毎ワークショップ後
中間	表現力・想像力が豊かになる	ワークショップを通して、子どもたちは感情をうまく伝えられるようになったか	施設職員評価アンケート	初回・最後
	心のよりどころとなる（精神的安定）	ワークショップの場所は、定期的に子どもたちにとって楽しみになるような場所であるか	施設職員評価アンケート	初回・最後
	ワークショップ以外で自分の意見を相手に伝える	ワークショップを通して、子どもたちは自分の意見を周囲に伝えることができるようになったか	施設職員評価アンケート	初回・最後
	相手の意見を理解し、尊重する	ワークショップを通して、子どもたちは友達の見解や立場を尊重することができるようになったか	施設職員評価アンケート	初回・最後
最終	自己肯定感の向上	ワークショップを通して、子どもたちは自分自身を受け入れ、肯定できるようになったか	施設職員評価アンケート	初回・最後
	対人関係の向上	ワークショップを通して、子どもたちは、何でも打ち明けられる友達を作れるようになったか	施設職員評価アンケート	初回・最後

図表 3-53 青少年対象プログラムの施設職員に関するアウトカムと評価設問

アウトカム種類	アウトカム項目	評価設問	測定方法	測定時期
初期	子どもたちとの新しいコミュニケーション方法に気づく	ワークショップで、自身にとっても活用できる学びがあったか	施設職員評価アンケート	毎ワークショップ後
中間	ワークショップの知見を活用し、子どもたちとコミュニケーションを取る	ワークショップで学んだことを、普段の業務で活用できているか	施設職員評価アンケート	初回・最後
最終	子どもたちとの信頼関係向上	子どもたちは自身のことを信頼し、慕ってくれているか	施設職員評価アンケート	初回・最後

協働体制を問う評価設問は、No.1 障害者対象プログラム、No.2 高齢者対象プログラムと同様、図表 3-11 のように設定した。

3.5.5. 測定と分析結果

3.5.5.1. 定性結果

評価者がワークショップを見学した結果から、全体として、昨年度からの継続参加の小学生も多く、昨年度よりも落ち着いて参加している（ワークショップにきちんと参加する、発言等が落ち着いている）様子が伺えた。ワークショップの一例では、「オノマトペ」を考えて、ペアになって動きを作る、というものがあつたが、その際にはファシリテーター側等大人とペアになって実施して、安心して表現している姿が見受けられた。

また、参加者と施設職員への簡易インタビューを実施した結果、「楽しい」、という声が聞かれた。劇団朋友が独自で実施した自由記述のアンケートからは、多くの方が「とてもおもしろかった」と回答し、次回も楽しみにしている様子が見受けられた。

劇団朋友では、ワークショップの設計の際に、何を狙いとして各活動をやるのかが明確に記してあり全体の設計が予め決められている。こうした目的に沿った細やかな設計が、「自分自身をもっと肯定的にとらえられるようになり、積極的にコミュニケーションを取れるようになること」という目的を踏まえた各成果につながっていくと考えられる。

3.5.5.2. 定量結果（毎回のワークショップ後）

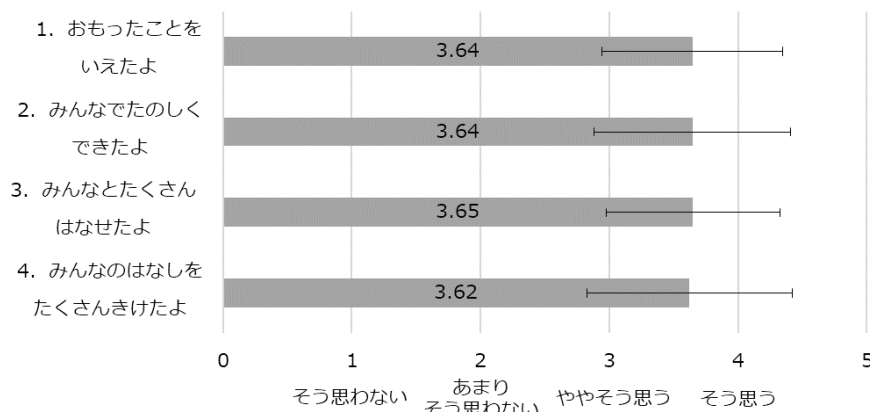
定性結果に加えて、図表 3-52、図表 3-53 に示した評価設問に則って、複数の項目を定量的に測定した。毎回のワークショップ後、子どもと施設職員からもらったアンケート結果について図表 3-55、図表 3-56 に示す。その結果、全ての項目で肯定的な回答が得られた。特に、施設職員のアンケートから、「子どもたちは普段とは違う創造的な発言や、表現をしていた」、「子どもたちは普段よりもみんな楽しく参加していた」という項目について、最も肯定的な回答が得られている。一方で、相対的に「子どもたちは普段よりも相手の意見を聞こうとしていた」という項目に関しては最も低い値が示された。

中でも施設職員からは、自由記述の回答の中から「子どもたちの発想力にびっくりした」「ワークショップを工夫してくださってありがたい」といった声が寄せられ、プログラム実践の意義を感じていることが示唆された。また、子どもたちからは「スプラッシュ」「アリとキリギリス」など、ワークの具体的な内容が特に楽しかったといったような声が寄せられ、集中して取り組んでいたことが伺えた。下記に得られた声の一部を掲載する。

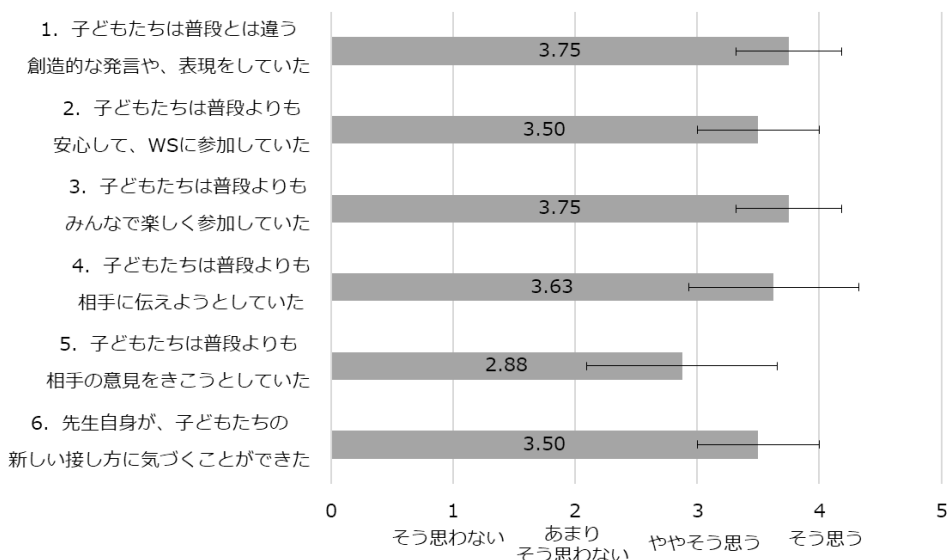
図表 3-54 自由回答から得られた声

対象者	得られた声
子ども	<ul style="list-style-type: none"> ・ いろいろたのしかった ・ スプラッシュがたのしかった ・ さいごに、うまになれてたのしかった ・ アリとキリギリスの最後のがたのしかった ・ 今日最後だったからつぎにいろんなあそびをしたい
施設職員	<ul style="list-style-type: none"> ・ このような形で子どもたちと関わることができて楽しかったです ・ 子どもたちの発想力、考え方にびっくりした。1 つのテーマでもたくさんの考えが出てきてみんなとても楽しそうに私も楽しかった ・ 子どもたちは毎回楽しみに参加しており、「自由に表現して良い場」「自由に過ごして良い場」と捉えているように感じます。ワークショップを毎回、プログラムの実施方法について工夫して下さっており、有り難いです ・ 発達障害や軽度の知的障害などの子もいる中で工夫してワークをすすめて下さっていると感じています

図表 3-55 青少年対象プログラムの毎回のアンケート結果（子どもの四段階評価平均値、N=45）



図表 3-56 青少年対象プログラムの毎回のアンケート結果（施設職員の四段階評価平均値、N=8）

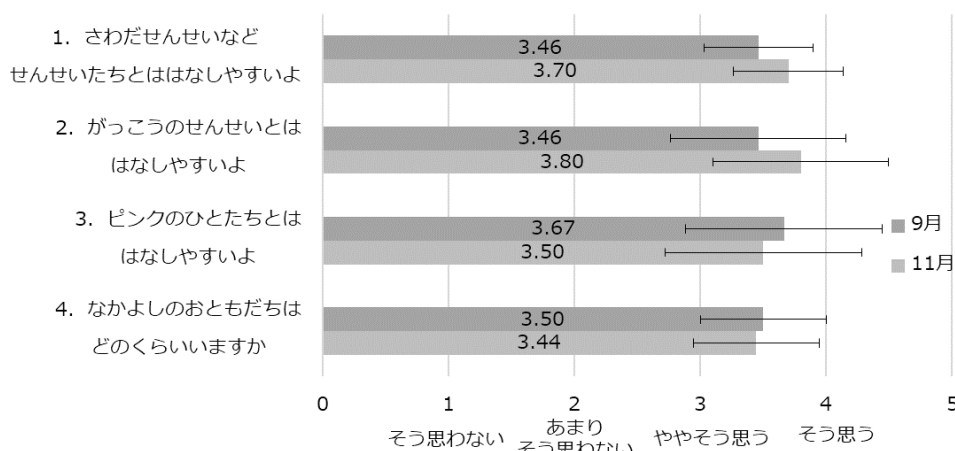


3.5.5.3. 定量結果（プログラム開始時と終了時）

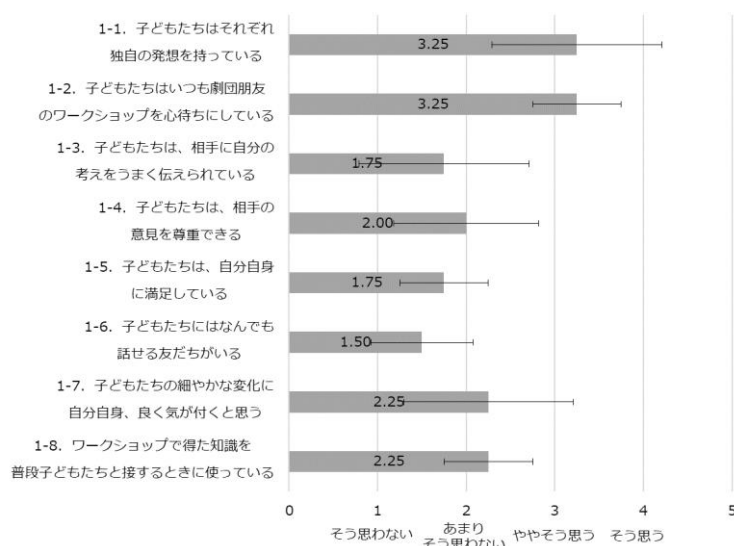
青少年対象プログラムでは、プログラム開始時と終了時に、対象者の変化を見るためのアンケートを実施した。子どもたちからの結果は、開始時と終了時と比較することができた。施設職員からの結果は、開始時のみとなっている。その結果、子どもたちの大人、友だちとの関係性は全ての項目において維持傾向となった。また、施設職員の結果から、「子どもたちはそれぞれ独自の発想を持っている」「子どもたちはいつも劇団朋友のワークショップを心待ちにしている」の2項目について、特に肯定的な結果が得られた。一方で、「子どもたちは、相手に自分の考えをうまく伝えられている」、「子どもたちは、自分自身に満足している」、「子どもたちにはなんでも話せる友だちがいる」の3項目については比較的低い結果となっており、これらについては、引き続きの継続した調査が必要だと言える。一方で、施設職員からの自由回答の結果を見ると、ワークショップに関して大変肯定的な意見が得られており、職員の声にもある通り、子どもたちの「大きな変化」として数値にはまだ表れていないものの、職員の視点から徐々に感じられていると言えるだろう。

図表 3-57 青少年対象プログラムの開始時・終了時アンケート結果

(子どもの四段階評価平均値、N=12 (9月)、N=10 (12月))



図表 3-58 青少年対象プログラムの開始時アンケート結果 (施設職員の平均値、N=4 (9月))



図表 3-59 自由回答から得られた声

対象者	得られた声
施設職員	<ul style="list-style-type: none"> 最初の頃は嫌々で参加していた印象であったが回が増す毎に子どもがその時間を楽しみにするようになりました。それが定期的に物事を実施する(参加させる)意味だと感じました ワークショップの回をとっても楽しみにしています。大きな変化はありませんが、普段は、はずかしがりやな子もワークショップだといっしょに活動できているようでうれしく思っています 以前は、伝える前にあきらめてしまうようなことが多くみられていた児童が、がんばって説明したり、自分の思いを表現する場面が増えたと感じる 本人なりに“楽しい”と感じているようです。まだまだ幼い子なので(精神的にも)継続参加することで変化するのではないかと思います

3.5.5.4. 協働体制に関する結果

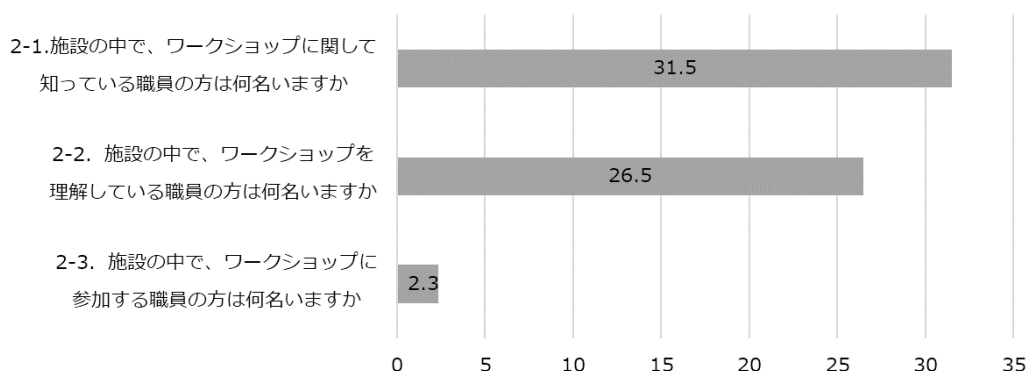
図表 3-11 に示した協働体制を問う指標に関して、複数の項目を定量的に測定した。その結果、平均して約 30 人の職員（施設職員）が、ワークショップを知っており、かつ 26 人程度が理解している結果となった。一方で、ワークショップに参加する職員自体は 2 人程度にとどまっている。個別の回答として、ワークショップについてどのくらい知っているか、理解しているか、の設問に対しては、平均して 3.0 と、肯定的な回答が上回ったが、参加したことがあるかに関しては、1.5 と低い結果となっている。また、多くの職員が、ワークショップに参加し、ワークショップに積極的に関わりたいと思っていることが図表 3-61 の結果からわかる。「2-8. 劇団朋友とは十分なコミュニケーションが取りやすい関係性がありますか」では、平均の回答が 3.3 と、肯定的な回答となっていた。

また、劇団朋友からの回答では、毎回の参加人数が子ども平均 9 人に対し、職員が 1 人という結果となった。協働体制に関して四段階で聞く項目では、相談・議論ができたか、コミュニケーションがとりやすかったかについては約 3 とやや肯定的な回答が得られ、協働先の熱意は充分であったかという設問に対しては、2 と低い回答が得られた。また、自由回答として

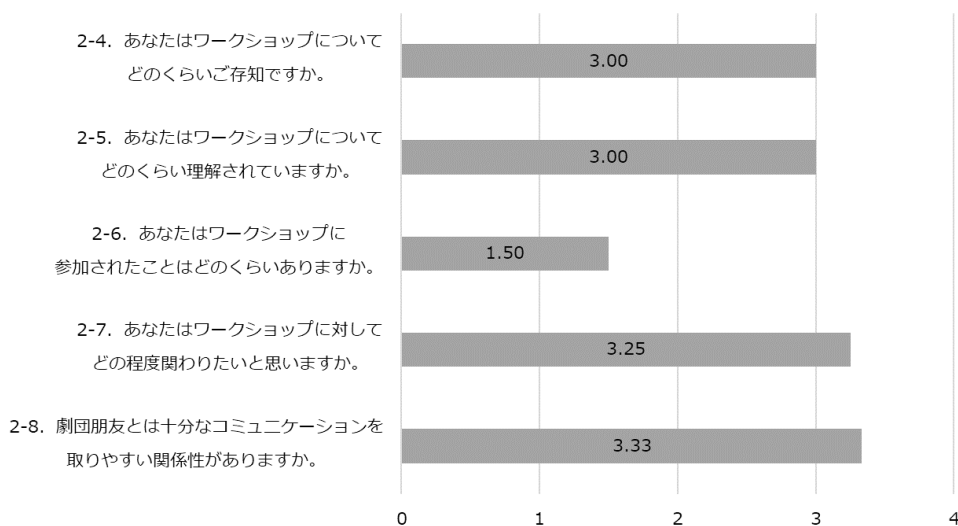
「職員の参加率が低いので、子どもたちが実際何をやっているのが把握していないと思う。職員のうち 1 人とは意見をかわせるが…。もう少し興味を持ってもらえるといいのだが。」

との懸念が寄せられた。以上の結果より、青少年対象プログラムにおいては、劇団朋友と杉並学園の間では協働体制に関して改善の余地があることが示唆された。

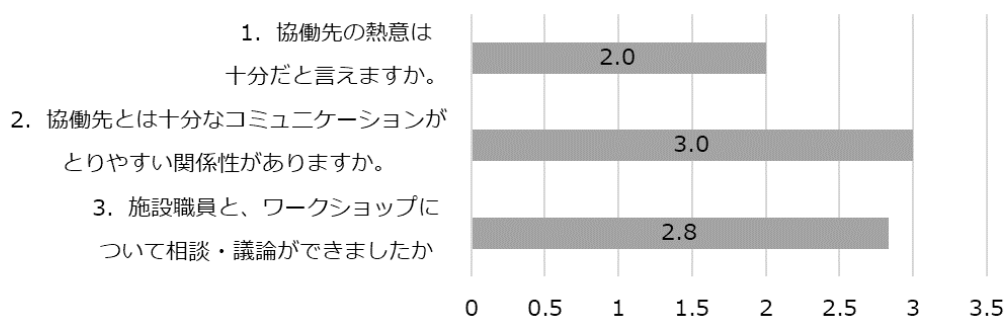
図表 3-60 青少年対象プログラムの協働体制に関するアンケート結果①（施設職員の平均値、N=4（9月））



図表 3-61 青少年対象プログラムの協働体制に関するアンケート結果②（施設職員の平均値、N=5（9月）、N=6（12月））



図表 3-62 青少年対象プログラムの協働体制に関するアンケート結果③（劇団朋友による回答、N=2）



3.5.6. まとめと今後の展望

3.5.6.1. 自己肯定感の向上と演劇ワークショップの価値を認識した割合

日本劇団協議会があらかじめ各プログラム共通で設定した 2 つの指標に関する結果を示す。

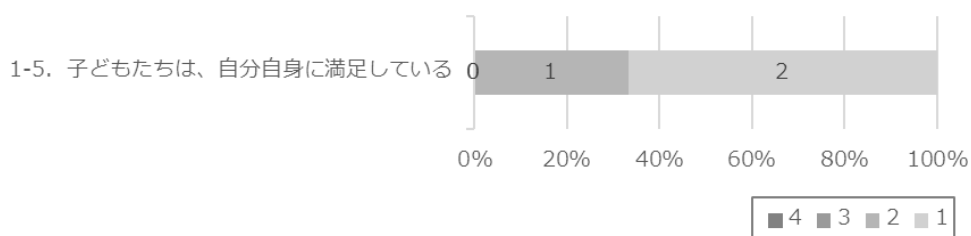
図表 3-63 2 つの共通指標の結果

No.	内容	目標値	実績値
1	コミュニケーションワークショップ実施前後で、ワークショップ参加者の自己肯定感が高まった割合	50%	(0%)
2	本事業の協力団体が、演劇的手法によるワークショップの価値を認識した割合	70%	96%

1 つ目の算出方法は、年 2 回の事前・事後の職員向けアンケートにおける「子どもたちは、自分自身に満足している」から算出した。一方で、本アンケートの回答は、初回時のみとなっており、最終回時における差分の測定ができていない。そのため、アンケートの肯定的な回答自体は 0%（全てネガティブな回答）ではあるが、表記としては(0%)とした（図表 3-64）。

図表 3-64 青少年対象プログラムの開始時アンケート結果（施設職員の四段階評価、N=4（9月））

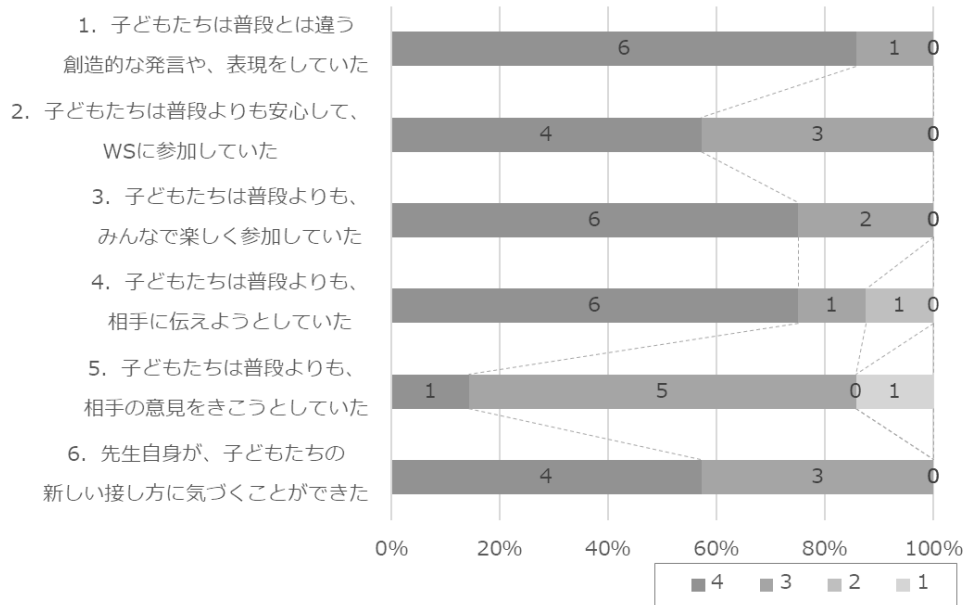
※4 が最も肯定的、1 が最も否定的な回答



2 つ目の指標に関しては、各アウトカムについてプログラム実施後に行った職員のアンケートを回答数で見た場合に、すべての項目で 80%以上が肯定的な回答をしていることがわかり、平均して 95.5%の肯定的な回答が得られた（図表 3-65）。また、職員向けの協働体制に関するアンケート、「あなたは、ワークショップについてのくらい理解されていますか」の項目では、平均して 3.00 と、やや肯定的な結果であり、施設の中でワークショップを理解している人数に関する項目でも、33 人の職員の内、約 27 人と、約 80%が理解を示していることがわかる。これらの結果から、児童養護施設職員からの理解度、価値認識の割合は高いことが示唆された。

図表 3-65 障害者対象プログラムの毎回のアンケート結果（職員の四段階評価、N=8(9~11月)）

※4が最も肯定的、1が最も否定的な回答



3.5.6.2. 評価の総括

本プログラムの評価の総括として、3.3.6と同様の5つの観点で調査員によるアセスメントを行った。図表3-19に示された各項目に対し、A：十分に可能性がある B：ある程度可能性がある C：どちらとも言えない B：あまり可能性はない E：全く可能性はない、のいずれかで回答した結果を図表3-66に示す。

図表 3-66 障害者対象プログラムの評価に関する総括

	評価設問	詳細
1	課題分析の妥当性（ニーズ）	B：ある程度可能性がある
2	内容の妥当性（セオリー）	B：ある程度可能性がある
3	実施の適切性・十分性（プロセス）	B：ある程度可能性がある
4	効果（アウトカム）	B：ある程度可能性がある
5	効率性	B：ある程度可能性がある

1. 課題分析の妥当性については、評価としてニーズに関して掘り下げて分析を行ったものではないが、昨年度から継続して杉並学園にてプログラムを実施してきたことから、ある程度直接的にニーズを抽出してきたと言えるだろう。一方で、施設職員から細やかなニーズを拾い上げるような協働体制はないため、「職員の参加率が低いので、子どもたちが実際何をやっているのか把握していないと思う」という状態があり、互いに前向きにプログラムの設計ができていないわけではないと言える。一方、子どもたちの様子を見ると、プログラムを昨年度から引き続き楽しみにしている様子があり、プログラムを通じて劇団朋友が独自に子どもたちから直接ニーズを拾い上げ、プログラムを設計してきていると言えるだろう。よって、ニーズに対してどのくらい応えられているかという問いに対しては、ある程度可能性がある結果とした。

2. 内容の妥当性に関しては、劇団朋友側が積み重ねてきた DIE の実践に加えて、昨年度の実績を活かして、「子どもたちが安心して過ごせる場」かつ、各子どものパーソナリティが分かった上でのプログラム設計ができていると言える。昨年度からのリピーターもいることから、「この子はこういう参加の仕方ができそう」「この子はこういう変化が見えているからこうしよう」など、ある意味個人にカスタマイズされたきめ細やかなプログラム設計を都度できていたと言える。

3. 実施の適切性・十分性については、事前に杉並学園と滞りなく連絡を取り合い、長期的なプログラムを予定通り実践できていたと言える。毎回の参加者も安定して7~10人程度いた。一方で、協働して進めた方が良いプログラムでありながら、施設職員の参加は十分でないと考えられ、今後施設職員の参加に関しては工夫が必要であると考えられる。

4. アウトカムに関しては、インタビューや子どもたち、施設職員からのアンケート結果からも、ある程度期待する成果が生まれたと言える。子どもたちは毎回プログラムを楽しみにしており、かつ安心して参加しているというのは一つのアウトカムと考えられる。加えて、昨年度からの引き続きの効果として、ネガティブ（死ぬ・殺す）な言葉ばかり言う男の子が優しい態度を取ったり、ワークショップのルールを無視してゲームに参加しなかった子どもも、個別の役割を与えれば参加するなど、新たな成果も見え始めている。一方で、内気であったり、積極的でない子どもも、前向きに参加しているという観察結果はあるものの、本プログラムの目的である「素直に、自分のやりたいことを意思表示できる」「自己肯定感の向上」というところまでは大きな変化として表れるのにまだ至っていないと考えられる。

5. 効率性に関しては、演劇ワークショップは、今後も継続的に実施し続けられうる可能性がある程度あると考えられる。協働体制にまだ改善すべき点が見られるが、施設職員からは継続の意義を感じる声もあげられた。一定の子どもが毎回参加する体制は整ってきていると言え、子どもたちから見て直接劇団朋友の講師らが信頼できる関係性を築けてきていると言えるだろう。子どもたちの自己肯定感向上に関しては今後も継続したプログラムを長期的に実施することが重要であると考えられ、一つ一つの成果の可視化を積み重ねながら、協働体制をより強化していくことが重要だと考えられる。

総合的に見て、本プログラムは対象者のニーズに応え、期待する成果の一部を実現できてきていると言える。今後継続のためには、施設職員側との協働体制を改善しながら、より良いプログラムの実施を目指していくことが重要であろう。

3.6. 【青年対象（さいたま）】(さいたま市若者自立支援ルーム)

3.6.1. 概要、プログラム内容

本プログラムは埼玉県さいたま市大宮区にある「さいたま市若者自立支援ルーム」（運営：NPO 法人さいたまユースサポートネット）の利用者を対象として実施した、若者自立支援を目的とした演劇ワークショップである。演劇ワークショップを 8 ヶ月間に渡り隔週ペースで開催し、7 月と 12 月には成果発表として同ルームにて演劇発表会を行った。本プログラムを、以下、青年対象（さいたま）プログラムとする。

図表 3-67 青年対象（さいたま）プログラムの講師、コーディネーター、調査員

講師	板倉哲
講師アシスタント	島野仲代・本間理恵・中津原知恵
コーディネーター	佐藤尚子
	以上青年劇場
調査員	千葉直紀、大沢望

図表 3-68 青年対象（さいたま）プログラムの概要

対象者	さいたま市若者自立支援ルーム利用者（15～30 代）
活動場所	さいたま市若者自立支援ルーム（さいたまユースサポートネット）
プログラム目的	高校中退者・不登校やひきこもりなど社会的に孤立している青少年に、演劇ワークショップを行い、コミュニケーションを培いながら、演劇を通して表現する事にもチャレンジしていく。最終的には多くの地域の方に成果を見てもらえるよう、発表をする。発表することで社会的にもこの活動を広め、居場所を求めている若者達に届けていく
プログラム概要	高校中退、不登校やひきこもりなどの若者たちを対象に、居場所づくりを行なっている、NPO 法人さいたまユースサポートネットが運営する「若者自立支援ルーム」に集まる青少年を対象に、月に 2 回演劇のワークショップを行う。そこに集まっている中高生から 30 代までの若者は、ひきこもり、虐待、不登校、貧困など一人一人別々の課題を抱えている。「あいさつができない」「自分の気持ちを伝えることができない」などの状態から、少しでもコミュニケーションをとることが出来るようにワークショップを行い、自立への後押しの一つにする。ルーム内での発表の機会を設けることで、マイルストーンとした
実施時期・期間	平成 30 年 5 月～12 月 全 20 回（各 2 時間前後） その他、発表会映像の上映会 1 回

図表 3-69 青年対象（さいたま）プログラムの流れの例

実施内容	説明
講師によるパフォーマンス	講師による踊りやお笑いなど、ルーム利用者の関心を引いたり、チャレンジする姿勢を見せる
アイスブレイク	「大きい提灯、小さい提灯」、「ジップ・ザップ・ボーイング」、「なんでもバスケット」、「後出しじゃんけん」など
詩の朗読	参加者が持ち込む作品を朗読する
インプロビゼーション	数人で即興の演劇をおこなう
休憩	
発表会の練習	参加者の立候補によって配役を決めて台本を読む。立ち稽古を行う

図表 3-70 青年対象（さいたま）プログラムの演劇発表の内容

時期	発表内容
前半 (夏の発表会)	桃太郎と狼（音声＋紙芝居で演劇発表。 原作：ルーム利用者 M くん、潤色：板倉講師）
後半 (クリスマス発表会)	クリスマスを探して（台本を持った状態で演劇発表。 原作：ルーム利用者 N くん、潤色：板倉講師）

3.6.2. 背景と目的

本演劇ワークショップ（以下、ワークショップ）の舞台となった「さいたま市若者自立支援ルーム」（以下、ルーム）は、さまざまな理由から悩みや問題を抱え、社会において孤立感を感じている若者たちに、安全・安心に過ごせる「居場所」を提供している。職員やボランティアに見守られ、他者との交流やイベントの参加などを重ねていきながら、利用者は達成感や自己肯定感を少しずつ得ていく。その結果、働く意欲が芽生えて就職活動を開始したり、掃除や調理など生きるために必要な技術を習得したりしながら、自立に向けて心とからだを整えていく。

ルームの運営内容としては、平日の日中に開設している、雑談や絵画、手芸、共同での調理、英語などの曜日が決まっているプログラムや、季節行事に連動したイベントの開催が中心となる。個々の利用者の事情を考慮し、職員間で情報を共有し、他の支援機関と連携してきめの細かい支援を目指している。

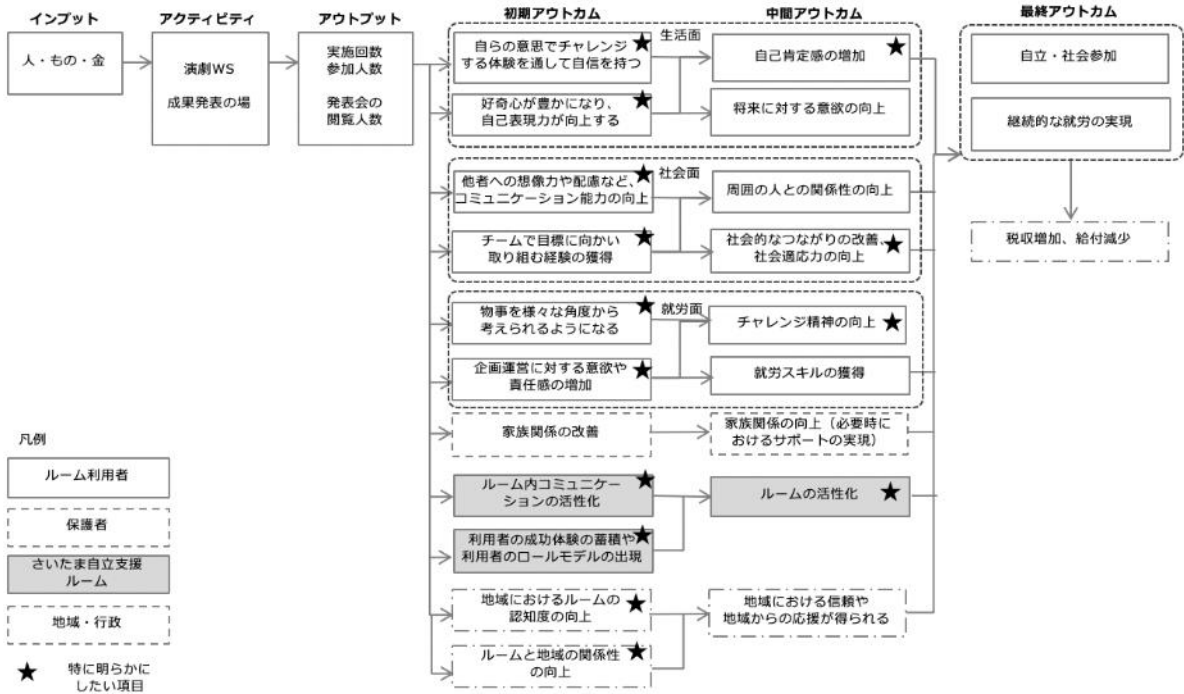
本プログラムは、ルームで平日の日中に開設しているプログラムの一つとして導入したものである。ルームの一室にて、ワークショップを 8 ヶ月間に渡り隔週ペースで開催した。参加は登録制ではなく、ルーム利用者であれば自由に出入りできる無料のプログラムとして行われた。コミュニケーション能力や自己肯定感を培いながら、演劇を通して表現することへチャレンジしていき、最終的に参加者みんなで何らかの作品の発表が出来るようになることを目的とした。

3.6.3. ロジックモデル

昨年度作成したロジックモデルを踏まえて、さいたま若者自立支援ルーム、青年劇場へのヒアリングを実施し、今年度の新たなロジックモデルを作成した。

図表 3-71 プログラムのロジックモデルの全体像

対象プログラム	さいたま市若者自立支援ルームの利用者に向けた演劇ワークショップ
対象者	演劇ワークショップ参加者
目的	コミュニケーション能力を培いながら、演劇を通して表現する事にもチャレンジしていく



3.6.4. 評価設問と指標

3.6.4.1. 調査の概要

①調査の目的

本プログラムにとっての重要な受益者であるルーム利用者がワークショップに参加することによって、自立に向けた成長をしていくことが本プログラムの成果である。また、参加者個々の観点だけではなく、本プログラムが全体として協働先であるルームの運営に貢献したかどうかも重要な観点である。そこで、本プログラムの成果を検証するために、ワークショップ参加者（ルーム利用者）の変化と、ルーム運営における本プログラムの貢献度合いの把握を目的とした調査を実施した。

②調査の方法

図表 3-72 に調査対象とデータ取得時期、および図表 3-73 に調査方法を示す。

図表 3-72 調査対象とデータ取得時期

対象者	事前	前半（夏の発表会まで）	後半（クリスマス発表会まで）	終了時
ワークショップ参加者		ワークショップ参加者による自己評価アンケート調査	ワークショップ参加者による自己評価アンケート調査	
ルーム職員	ワークショップの目的・内容のディスカッション ロジックモデル（セオリー）の再整理	ルーム職員によるワークショップ参加者評価アンケート/インタビュー調査	職員によるワークショップ参加者評価アンケート	MSC ⁶ ワークショップ
青年劇場ワークショップ講師		ワークショップ講師陣による毎回の内容の記録		
発表会の観覧者		発表会観覧者アンケート	発表会観覧者アンケート	

図表 3-73 調査方法

項目	調査の名称	調査の内容
a	ワークショップ参加者による自己評価アンケート調査	7月と12月の発表会の後に、ワークショップ参加者に質問票を配布して、ワークショップの感想やワークショップへの要望、ワークショップ参加者が感じている自分自身の変化などについての声を集めた
b	ルーム職員によるワークショップ参加者評価アンケート/インタビュー調査	7月と12月の発表会の後に、ワークショップ参加者のアウトカム評価の一環として、ルーム職員（2人）にアンケートおよびインタビューを実施した
c	ワークショップ講師陣による毎回の内容の記録	毎回、ワークショップ終了後に講師陣は振り返りのミーティングを開き、ワークショップの実施内容や参加者の様子の記録、次回ワークショップに向けた改善点を話し合った。その内容は、振り返りレポートにまとめられ、ルーム職員・日本劇団協議会・調査員に共有いただいた。また、調査員2人で計14回ワークショップに参加し、内容の確認を行った
d	発表会観覧者アンケート	7月と12月の発表会の観覧者に対して、感想や次回への要望などのアンケートを実施した
e	MSCワークショップ	終了時調査として、ルーム職員3人、青年劇場講師3人、日本劇団協議会2人に参加してもらい、モスト・シグニフィカント・チェンジ・ワークショップおよび事業の総括を実施した

3.6.4.2. ロジックモデルに基づいたアウトカム指標の設定

図表 3-74 に示すように、策定したロジックモデルに従って、下記の重要なアウトカムと指標（アンケート項目）を設定した。

図表 3-74 ロジックモデルに基づいた重要なアウトカムと指標（アンケート項目）

No.	重要なアウトカム	指標（アンケート項目）
1.1.	自らの意思でチャレンジする体験を通して自信を持つ	自信がついたように感じますか？
1.2.	好奇心が豊かになり、自己表現力が向上する	彼／彼女なりの表現ができたように感じますか？
1.3.	自己肯定感の増加	自分自身に満足しているように感じますか？（生活全般）
1.4.	アウトカム以外の追加質問	他の人の表現に刺激を受けたように感じますか？（仲間と一緒にやることの相乗効果）
1.5.	アウトカム以外の追加質問	先生のことを好きだと思いますか？
1.6.	アウトカム以外の追加質問	演劇ワークショップのことを好きだと思いますか？

⁶ モスト・シグニフィカント・チェンジ（MSC）は、事前設定の指標を用いず、現場から「重大な変化」を集めて「最も重大な変化」を選択する参加型・質的評価手法である。参考文献：リック・デビース、ジェス・ダート著、田中博監訳、MSC 翻訳チーム訳（2013）「モスト・シグニフィカント・チェンジ（MSC）手法・実施の手引き（日本語版 2013）」

No.	重要なアウトカム	指標
2.1.	他者への想像力や配慮など、コミュニケーション能力の向上	ワークショップで自分の意見を言えたと思いますか？
		ワークショップで他人の意見を聞けたと思いますか？
2.2.	チームで目標に向かい取り組む経験の獲得	準備から本番まで、みんなと協力してできたと感じますか？
2.3.	社会的なつながりの改善、社会適応力の向上	他のワークショップ参加者やルーム利用者、ルーム職員や家族、その他の人との会話は増えたと感じますか？
3.1.	物事を様々な角度から考えられるようになる	視野が広がったように思いますか？
3.2.	企画運営に対する意欲の増加	意欲的に取り組んだと感じますか？
3.3.	チャレンジ精神の向上	この経験を通して、また何かにチャレンジしたいと感じますか？（演劇じゃなくても OK）
4.1.	ルーム内コミュニケーションの活性化	演劇ワークショップ（演劇ワークショップ参加者）によって、ルーム内の会話は多くなりましたか？
4.2.	利用者の成功体験の蓄積やロールモデル化	演劇ワークショップによって、ルーム利用者の成功体験やロールモデルとなるような例は生まれましたか？
4.3.	ルームの活性化	演劇ワークショップ（演劇ワークショップ参加者）によって、ルームは明るくなったと思いますか？（活性化の度合い）
4.4.	アウトカム以外の追加質問	その他、ワークショップ参加者やルームに何か変化があったと感じていることがあれば、教えてください
4.5.	アウトカム以外の追加質問	その他、何かネガティブな情報があれば、改善のために教えてください

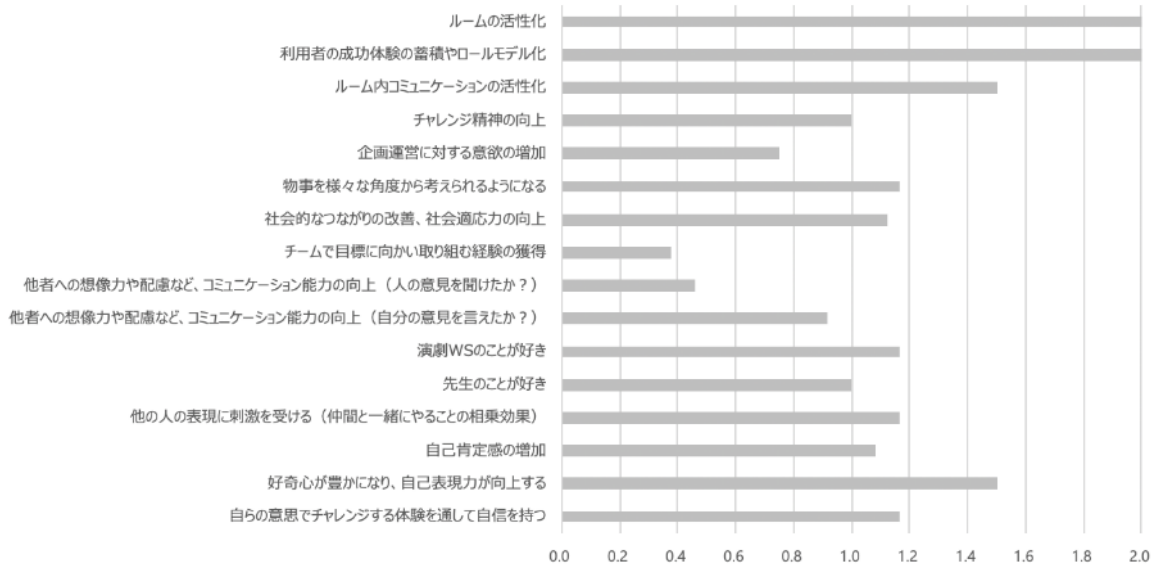
3.6.5. 測定と分析結果

3.6.5.1. ルーム職員に対する定量・定性調査結果

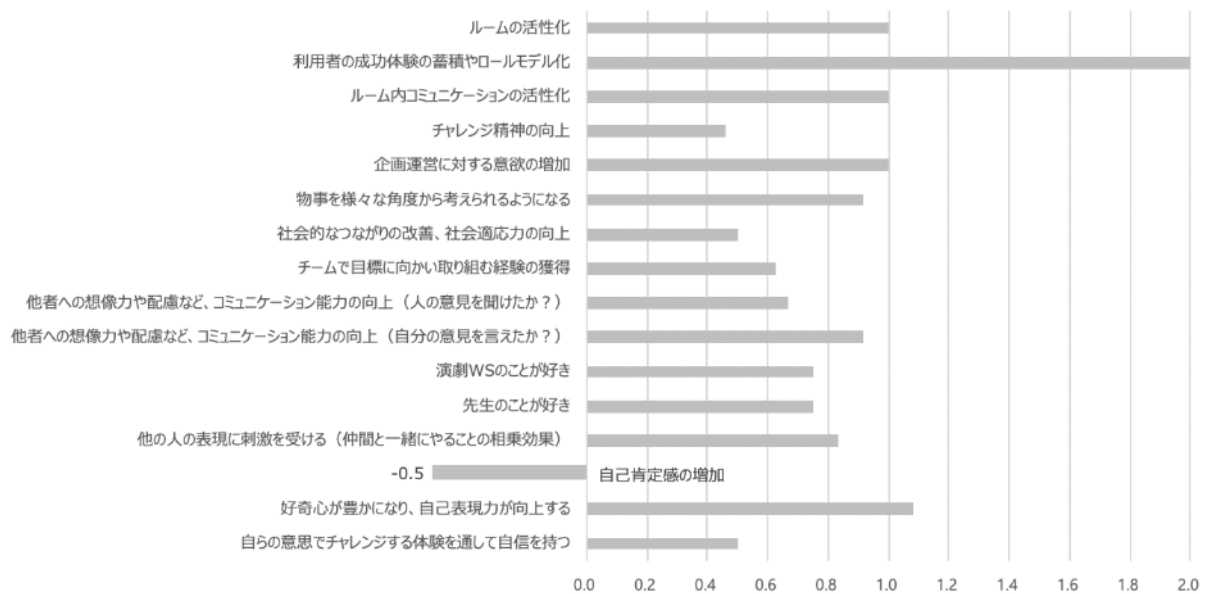
本ワークショップの参加者の変化を把握するために、ルーム職員に対して図表 3-75、図表 3-76 に示すアンケートを実施した。その結果、参加者個人の変化およびルーム全体の変化が見られた。具体的にはルーム全体は「利用者の成功体験の蓄積やロールモデルの出現」などの変化、参加者個人は「コミュニケーション活性化」、「物事を様々な角度から考えられるようになる」、「好奇心が豊かになり、自己表現力が向上する」などの項目について特に良い変化が生まれた。後期は「自己肯定感」のみ減少しているが、前期で活躍した主力メンバーの 2 人がワークショップ以外の別の事情（体調面の不調、家庭の事情）により精神的に落ち込んだことによって、全体の平均値が下がった結果となった。

アンケートおよびインタビューは、7 月と 12 月の発表会の後に、ルーム職員（2 人）に対して実施した。アンケート対象者は、前期・後期で代表性のある人物をそれぞれ 6 人選定した。ワークショップ参加前を「3」として、それぞれのワークショップ参加者について発表会後の感覚値を回答してもらい、6 人の平均値を算出した。選択肢は、「1：できなかった 2：あまりできなかった 3：どちらでもない 4：少しできた 5：できた」の 5 段階とし、グラフには変化量の差分を記載している。尚、7 月発表会後の調査でアウトカムを中心に自己評価を試みるも回答結果の信ぴょう性が低いことから、12 月発表会後の調査では実施プロセスと参加者ニーズを中心とした設問に切り替えている。ワークショップ参加者のアウトカム測定は、普段からよく観察を行っているルーム職員にお願いし、自己評価の結果は、ルーム職員に対する定量・定性調査の参考材料とした。

図表 3-75 ワークショップ参加者の変化① (ルーム職員による他者評価、前期、N=6)



図表 3-76 ワークショップ参加者の変化② (ルーム職員による他者評価、後期、N=6)



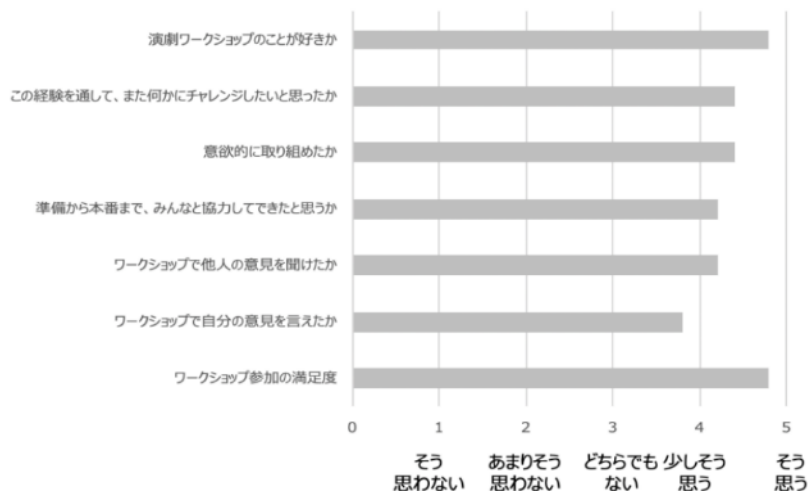
図表 3-77 ワークショップ参加者の変化③ (ルーム職員へのインタビュー結果、通年)

- ・ 一生懸命やった人はみんな変化が生まれている
- ・ 演劇ワークショップがあることで利用者もプログラムの数が増えて選択肢が増えた。ワークショップに参加している利用者の変化が大きい
- ・ 演劇ワークショップは、普段学校にっていないと得られない経験である。もっと回数を増やしたい。裏側も見学できたらいいと思う

3.6.5.2. ワークショップ参加者による自己評価

図表 3-78 に、ワークショップ参加者の自己評価アンケート結果を記載する。満足度は 5 段階中 4.8 と高く、ワークショップの好きなところとして「演劇をやる機会を与えていただけたこと」、「人前で発表する勇気をくれた」などの感想があげられた。

図表 3-78 ワークショップ参加者による自己評価アンケート結果（後期、N=5）

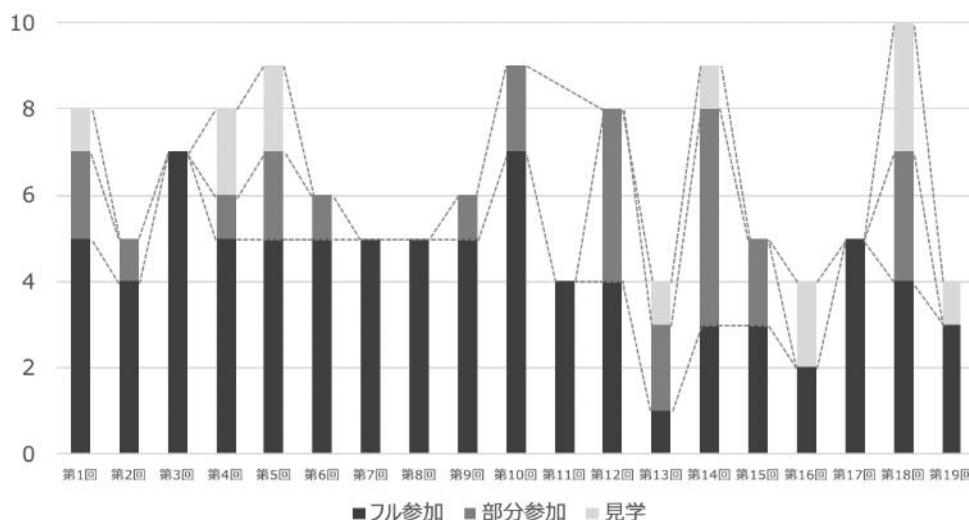


3.6.5.3. ワークショップ参加者数の推移

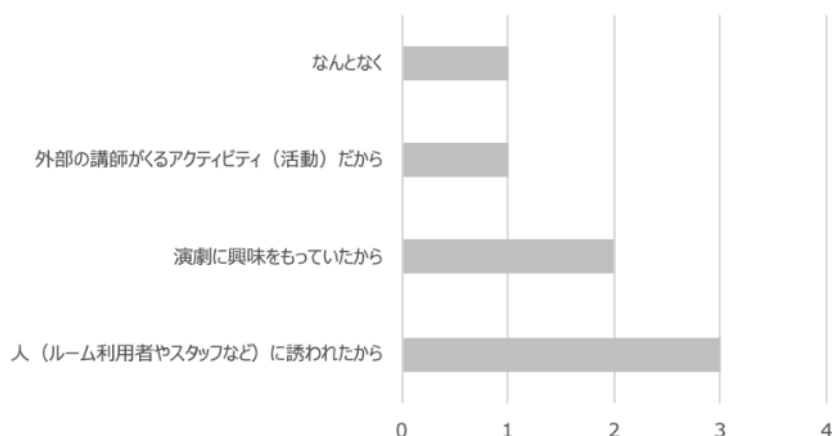
図表 3-79 に、ワークショップの参加者数の推移（ワークショップ講師陣による毎回の内容の記録結果）を示す。それぞれの利用者の第 1 回～第 19 回ワークショップ参加回数を合算したもので、途中参加や見学のみも参加とカウントしている。毎回安定的に参加出来ている利用者は少なく、平均参加回数は 4.2 回、中央値は 2 回である。前半（第 1 回～第 8 回）に比べて、後半（第 9 回～第 19 回）は参加者数が減少していることがわかる。このように参加者が不安定な中で、状況に応じてプログラム運営を変えるなど講師側はルーム職員と適宜相談をおこない柔軟にワークショップ運営を行なった。

また図表 3-80 に、ワークショップの参加動機を示す。もともと興味がある人よりも、「人（ルーム利用者やスタッフなど）に誘われたから」という理由での参加が多いことがわかる。

図表 3-79 ワークショップ参加者数の推移（通年）



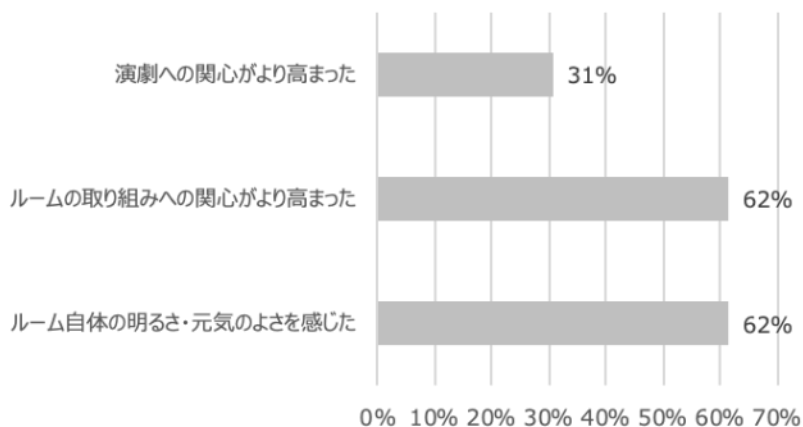
図表 3-80 ワークショップ参加の動機



3.6.5.4. 発表会観覧者アンケート

7月と12月の発表会の観覧者に対して、演劇発表の感想や次回への要望などを確認するためにアンケートを実施した。結果を図表 3-81 に示す。参加者は自立支援ルームの協働機関や地域住民、議員などで、ロジックモデルに描いた演劇ワークショップによるルーム全体の変化である「ルームの活性化」につながる結果となった。

図表 3-81 演劇発表会の観覧者の感想



- ・ 素晴らしかったです。脚本も面白かったですし、ナレーションも表現力が豊かで役の人もなりきって、とても楽しかったです。イラストも良かったです。みんなが楽しそうでした
- ・ 声の特徴を生かしたキャスティングもとても良かったように思います。音響も効果的に流れていて、とても効果があったように感じました
- ・ とても感動しました。ありがとうございます。オオカミさんをはじめ、こんなに表情が豊かでセリフが生き生きとした作品を拝見できて、感動しています。ひきこまれました

3.6.5.5. 関係者による MSC ワークショップ

本ワークショップのスタッフ振り返り会において、ルーム職員、ワークショップ講師、日本劇団協議会を対象に、参加型・質的評価手法である MSC（モスト・シグニフィカント・チェンジ）を応用したワークショップを実施した。発表会（前半）当日の様子と MSC ワークショップの様子を図表 3-82 に示す。MSC ワークショップの結果の抜粋を図表 3-83 に示す。演劇ワークショップを通じて発生したアウトカムを、「ワークショップ参加者に起こった重大な変化」と「ルーム全体/ワークショップの場が起こった重大な変化」の領域で整理して、それぞれをこれまでの変化をまとめたカードや付箋に書いてお互いに共有した。抽出したアウトカムは以下のとおりである。その後、それぞれの領域の中で「最も重大な変化」を 1 人 10 票の投票によって一つずつ選ぶ作業を行った。なお、投票は全領域をまとめて 8 人全員（全 80 票）で行った。「最も重大な変化」に選ばれたのは、ワークショップ参加者の R さんのエピソード。「これまでは母親に車で送り迎えをしてもらっていた R さんが、本番前の日曜日は自主稽古をするためにはじめて電車に乗って一人で来た。この稽古は自分で企画して、仲間を誘って実現させたものである」という内容である。彼女は前期の発表会で主役を務める活躍をした。（後期の発表会は、自身の入院手術と重なり欠席となった）



図表 3-82 発表会（前半）当日の様子と MSC ワークショップの様子

図表 3-83 MSC ワークショップの結果

変化の対象	抽出されたアウトカム（重大な変化）	投票得票数
自分 = ワークショップ 参加者	良い子になって周囲の意見に合わせるが多かった M くんが、講師に対して、ワークショップ運営に関する異論や提言など、自らの意見を主張するようになった。（これはかつてない事であり、人間関係を築く力を得るという点では一つの前進と捉えることもできる）	10 票
	ルームを卒業した A くん（昨年の本ワークショップ参加者）が訪ねてきて、彼が通っている就労支援施設で司会を頼まれたからアドバイスが欲しいと講師に相談があった。クリスマス発表会の舞台には本人の意思で登壇を辞退したが、発表会の最後に皆の前で立派なコメントを話してくれた	6 票
	後半の発表会に向けての台本を執筆してくれた N くん。「クリスマスを探して」のテーマがわかりやすく、物語性も豊かで、登場人物も魅力的で変化・成長	9 票

	の過程が明確である。彼は前半の発表会で M さんの創作活動に影響されて、主体的に作品を仕上げた。「自分はルームですべき役目は果たした」と卒業宣言。クリスマス発表会には参加しなかったが、影響力を与えた	
--	---	--

図表 3-84 MSC ワークショップの結果（続き）

変化の対象	抽出されたアウトカム（重大な変化）	投票得票数
自分 = ワークショップ 参加者	前半の発表会で主役を務める活躍した R さん。これまでは母親に車で送り迎えをしてもらっていたが、本番前の日曜日には自主稽古をするために、電車に乗って一人で来た。自分で企画して仲間を誘って実現させた	14 票
	物静かな O さんの変化。感情表現がなく物静かであった彼が、後半の演劇ワークショップでは、講師の指示に果敢にチャレンジするようになった。たくさん話すようになり、お茶目にボケるようになった。意図をもってリアクションを欲しがるようになるなど、感情を表出しても良いと安心できるようになった	9 票
	笑顔の可愛い M さんの変化。昨年本事業で演劇ワークショップに出会ったことが自信につながった。お弁当屋さんに就職することが出来て、ワークショップ講師にも誇らしげに何度も報告をしてくれた。演劇ワークショップでは台本の漢字を読むことが苦手であったが、他の参加者の協力を得て、読み仮名を振ってもらうなどコミュニケーションをとりながら実施できた	5 票
	後半の発表会で主演を演じた 2 人（A くん、G くん）。発表会の出演者が少ない中で、本番直前（前日）に急遽出演を決意してくれた。本番では台本を見ながらも堂々と演じきり、観覧者からのアンケートでは「直前に出演を決めて、一回だけの稽古で信じられない」との声が挙がるなど、貢献してくれた	5 票
ルーム全体/ ワークショップ の場	前半の発表会の台本を執筆した M くん。台本の世界は、二面性のある自分のカミングアウトだったのかもしれない。本ワークショップを通して、演劇だけではなく、自分の意見をスタッフに伝える人が多くなったと感じている	7 票
	いつでも見学 OK とし、毎回誰でも受け入れることで、ルーム利用者との交流につながる。互いに知り合いが増える感覚	3 票
	他のプログラムにあまり参加しない利用者が演劇ワークショップに継続的に参加したこと。特に A さんが、遅刻する場合に連絡をするなど、社会性が向上した	3 票

3.6.6. まとめと今後の展望

3.6.6.1. 自己肯定感の向上と演劇ワークショップの価値を認識した割合

自己肯定感の向上と演劇ワークショップの価値を認識した割合は、図表 3-85 の通りにまとめられる。「1. 自己肯定感の向上」については、「ワークショップに一生懸命取り組んだ利用者はみんな変化している」、「前半の発表会後に別の施設に移動することになった利用者は、新しい場所でも演劇ワークショップをはじめようとしている」というコメントがルーム職員からあがった。一方で仲良しの利用者が参加するから参加した、というような消極的な姿勢の利用者もいた。「2. 協力団体（さいたま市自立支援ルーム）が、演劇的手法によるワークショッ

「プログラムの価値を認識した割合」は、ルーム職員から「普段のルームのアクティビティでは得られない経験である」、「本ワークショップをきっかけに職員との共通の話題、やりとりが増えた」などの声あげられており、価値を認識している割合は100%である。

図表 3-85 2つの指標の結果

No.	内容	目標値	実績値
1	コミュニケーションワークショップ実施前後で、ワークショップ参加者の自己肯定感が高まった割合	50%	83% (スタッフによる他者評価 12人中10人が増加)
2	本事業の協力団体が、演劇的手法によるワークショップの価値を認識した割合	70%	100%

3.6.6.2. 評価の総括

本プログラムの評価の総括として、3.3.6と同様の5つの観点で劇団員3人、ルーム職員3人、日本劇団協議会2人によるアセスメントを行った。図表 3-19 に示された各項目に対し、A：十分に可能性がある B：ある程度可能性がある C：どちらとも言えない D：あまり可能性はない E：全く可能性はない、のいずれかで回答した結果を図表 3-86 に示す。

図表 3-86 青年対象プログラムの評価に関する総括

	評価設問	詳細
1	課題分析の妥当性（ニーズ）	B：ある程度可能性がある
2	内容の妥当性（セオリー）	C：どちらとも言えない
3	実施の適切性・十分性（プロセス）	B：ある程度可能性がある
4	効果（アウトカム）	A：十分に可能性がある
5	効率性	B：ある程度可能性がある

1. 課題分析の妥当性については、参加者からの要望や意見が少ない中においても、「ある程度可能性がある」という結論であった。劇団講師からは「重要な課題やニーズは未だにわからない。彼らに何が響くかわからない」という声があり、それに対してルーム職員からも同様に掴みきれないという話が出た。評価者が振り返り会後に行なった参加者へのアンケート調査（N=5人）によると、ルームのアクティビティ（活動）に求めることは「芸術・音楽など創作活動に関すること」が8割、他には「多くの人が参加出来ること」、「人前で発表する機会があること」、「就職に役に立つこと」がそれぞれ4割となった。また講師が参加者や参加しなかったルーム利用者との関係を築き上げる中で、ワークショップに参加できなくても、「劇作や小道具・衣装の準備ならばやりたい」という新たなニーズを発見し、今後のプログラム設計に多いに活かすことができると考える。特に本ワークショップ期間を通して講師と信頼関係を築くことができたMくんからは「発表会を無くしてももう少し緩く行うことで、皆が参加しやすくなると思う」と意見があがり、彼の意見はルームの多くの利用者を代表する声であると思われる。本ワークショップを通して講師が利用者たちと真摯に向き合う中で信頼関係を築くことができたため、今後ニーズ把握の精度は高まっていくと考える。前期、後期でそれぞれ劇作を書いた利用者たちは、「彼らが持っている内的な世界や自分の心の苦しみを表現していたのだろう。彼自身が人とどうつながりたいかの願望が含まれていたのかもしれない」と、講師は話していた。

2. 内容の妥当性に関しては、「C：どちらとも言えない」の結論となった。昨年度演劇ワークショップではクリスマス発表会の大成功があり、今年は発表の機会を増やすことによって、ワークショップ参加者のいろんな可能性を

引き出せるのではないかと、講師陣とルーム職員で仮説を立てて臨んだ。前期は発表会に向けてワークショップ参加者自らが劇作をおこなったり、投影するイラストを描いたり、みんなで自主稽古をおこなうなど各種の準備が主体的に行われた。後期は触発された別の利用者が劇作を行い、講師からも様々なアドバイスをしながら発表会までのスケジュールなどを行なった。しかしそれが却ってワークショップ参加者のプレッシャーとなったのか、別の要因もあるのか、後期の演劇ワークショップでは参加者が減少してしまった。講師からは「発表会の回数を増やしたり、それに向けてスケジュールを切ったことが、果たして利用者のためになったのだろうかという反省がある」とのコメントが挙がった。一方で、劇団側は何がワークショップ参加者に響くかわからない中で様々なコンテンツを試しながら演劇ワークショップを運営していた。その中でも「インプロ（即興演奏）ワークを行なった時には、参加者の反応がよく、彼らのエネルギーが爆発した」というコメントが劇団側から挙がった。これらのエピソードからも、演劇ワークショップは発表会に向けて稽古を積むということだけではなく、気が向いたときにいつ参加しても良い安心安全な場として開き、参加者の状況に合わせて様々なコンテンツを提供することにより、誰でも無理なく楽しめる、夢中になると思いも寄らない自分を発見できるなどといった可能性が拓けると考える。

3. 実施の適切性・十分性については、「B：ある程度可能性がある」であった。図表 3-79 に示す通り、特に後半は参加者が少なく、人の入れ替わりも激しかった。事前登録が不要な自由参加のプログラムであり、参加巻き込みの課題は残る。それでも講師陣はワークショップ開始時に利用者の関心を引く様々な工夫（漫才やダンスなど）や参加を促す声かけを都度行っていた。ルーム内の人間関係が複雑なことや、利用者の特徴（自己中心的・協調性が低いなど）があり、さらに体調面などの状況が刻一刻と変わる中で、講師はルーム職員と連携して柔軟に対応を行ったと言える。講師からは「演劇ワークショップの2週間の間に何が起きたかをルーム職員から共有してもらっていたので、それを知った上で参加できるので柔軟にいけたのだと思う」との感想があげられたことも、プロセス上は評価できるだろう。日本劇団協議会の職員からも「講師の皆さんはちゃんと準備をした上で臨むが、その場で臨機応変に内容を変えることができる。そういうワークショップ講師は多くないし、実施の適切性という意味で高評価」の意見があげられた。また振り返りコメントでは挙がらなかったが、毎回のワークショップでルーム職員やルーム理事が安定的に3人以上参加していたことも運営がうまくいった大きな要因であろう。彼らは自ら率先して演技にチャレンジしたり、ムードメーカーとなったり、よくワークショップ中に参加者を認めて褒めるコメントを述べていた。さらに講師陣は毎回丁寧にワークショップの振り返りとその内容をまとめて報告書の共有を行っており、ワークショップの状況や感じている課題、次回の対策など、細かく共有した。ワークショップ参加者が不安定な中で講師陣とルーム側の連携体制がよく取れて運営されていたと考える。

4. アウトカムに関しては、結論としては「A：十分に可能性がある」であり、効果はたいへん高いと考えられる。本演劇ワークショップを通して生まれた参加者・ルーム全体の変化は、ルーム職員へのアンケートによる定量的な測定ではほぼすべての指標で望ましい変化がみとめられ、特にルーム全体のアウトカムに関連する設問である「ルームの取り組みへの関心がより高まった」、「ルーム自体の明るさ・元気のよさを感じた」は非常に高い結果となった。定性的な変化は、MSC ワークショップやルーム職員へのインタビューで把握したが、ロジックモデルには含まれない予期せぬ多くのプラスの変化が生まれていることが判明した。MSC ワークショップで抽出された最も重大な変化である「これまでは母親に車で送り迎えをしてもらっていた R さんが、本番前の日曜日は自主稽古をするためにはじめて電車に乗って一人で来た。この稽古は自分で企画して、仲間を誘って実現させたものである」は、本ワークショップの発表会無しでは考えられなかったであろう。本プログラムが高い成果を上げていることがわかる。一方で「一人ひとりの成長はたくさんあったが、プログラムとして全体への効果がどのくらいあったかを考えるとレーティングは B ではないか」という意見も挙がった。このように、ワークショップに参加した個人に視点を向けると大きな効果が見受けられるが、ルーム全体に視点を向けるとその効果は限定的であり、その点は課題として認識されていることも付け加えておく。全体の結論としては、社会性や協調性にもともと課題のある人たちが「よくぞここまで」という象徴的なドラマ（変化）が生まれたこと、個々人の今後の人生に大きな影響を与えられたことに胸を張ってよいだろうということで「A：十分に可能性がある」となった。

5. 効率性に関しては、「B：ある程度可能性がある」で合意した。ルーム側は演劇ワークショップの価値を強く感じており、継続を強く希望している。資金面での課題は残るが、ルーム職員や利用者と話さず中で講師側も新たな関わり方の可能性を見出すことができた。具体的には、例えば発表することを目標にせず劇作に関心のある利用者にはメールでのやり取りでアドバイスを行うことも可能であり、双方にとって負担の少ない形で運営できるかもしれない。ルーム職員や利用者との関係性が深まる中で、継続のためのヒントが多く得られたことも今年度の成果であり、効率性の源泉になりうると言えるだろう。また発表会アンケート結果にあるように、発表会を行うことで「ルームへの関心がより高まった」、「ルーム自体の明るさ、元気の良さを感じた」という割合が多くいて、ルーム職員からは「Twitter でルームの活動を発信しているが、発表会のことを投稿したら地域の人からコメントが入った」という喜びのコメントが挙がった。さらに今年度の発表会を見に来てくれた地域の芸術分野のキーパーソンが興味を持ってくれたという情報もあり、本事業を通してファンの獲得やさらなる展開の可能性が広がっている。これらのことから、本ワークショップの途中経過として対外的に発表会の機会を設けたことは、効率性に貢献したと言えるだろう。

3.7. 【青年対象（東京）】（ワーカーズコープ連合会）

3.7.1. 概要、プログラム内容

図表 3-1 の内、No.5 のプログラムの講師、調査員の一覧を図表 3-87 に示した。以下、本プログラムを青年対象（東京）プログラムとする。

図表 3-87 青年対象（東京）プログラムの講師、調査員

講師	佐藤文雄
講師アシスタント	柴田愛奈、高辻知枝、馬淵真希
コーディネーター	小関直人
	以上 劇団銅羅
調査員	田中博、千葉直紀

青年対象のプログラム概要を図表 3-88 にまとめた。

図表 3-88 青年対象（東京）プログラムの概要

対象者	現在就職・就学していない 40 歳以下の若者
活動場所	第 1～3 回目 国立オリンピック記念青少年総合センター（渋谷区） 第 4～7 回目 ワーカーズコープ会議室（豊島区） 第 8～19 回目 劇団銅羅アトリエ（板橋区）
協働先	日本労働者協同組合ワーカーズコープ連合会
プログラム目的	仲間と共に舞台をつくり上げる体験を通して、若年無業者やひきこもりの若者たちに信頼感や自己効力感を土台とする自己表現力を培ってもらい、社会参加や就労へと繋げること
プログラム概要	若者自立支援団体等を通じて募集を行い、書類選考と面談で参加者を決定。ストレッチやシアターゲームなどコミュニケーションを図る内容のワークショップを行う合宿からスタートし、その後、上演作品を決めて稽古を重ね、関係者に発表する
実施時期・期間	平成 30 年 8 月～10 月 全 19 回（10:00～17:00）

3.7.2. 背景と目的

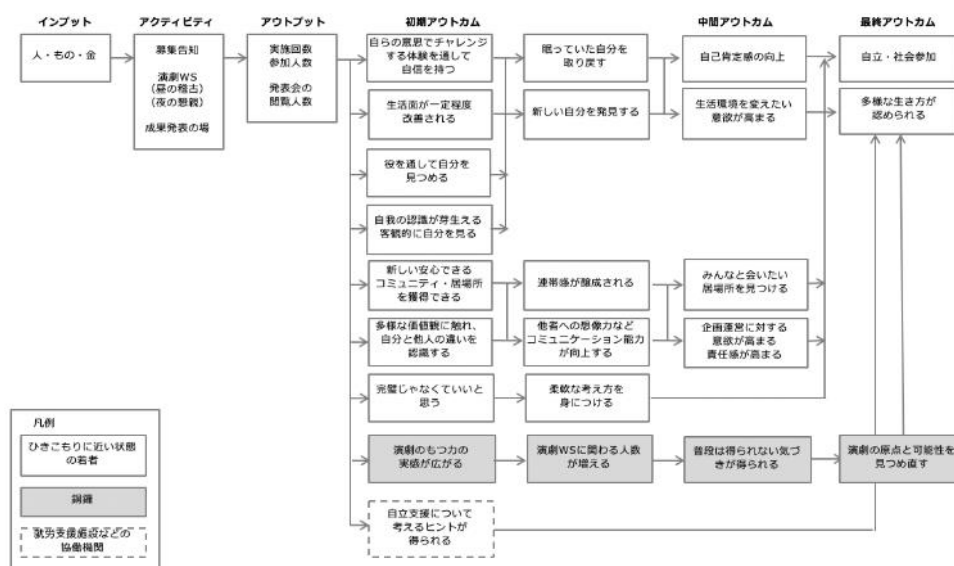
内閣府の平成 27 年度版子ども・若者白書によると 15 歳から 34 歳の非労働力人口のうち、通学、家事を行っていない若年無業者は平成 26 年度で約 56 万人であった。若年無業者やひきこもりの若者の現状は、若者自立支援の更なる充実を必要とする。

本プログラムの講師は、日本労働者協同組合ワーカーズコープ連合会が開塾した労協若者自立塾（千葉県芝山町）において、若年無業者の支援プログラムの一環として取り入れられた演劇ワークショップの講師を平成 18 年から平成 22 年に渡って務めた。今回は昨年に引き続きワーカーズコープに協力してもらう形で、若年無業者やひきこもりの若者たちに向けた演劇ワークショップ（以下、ワークショップ）を開催した。仲間と共に舞台をつくり上げる体験を通して、彼らに信頼感や自己効力感を土台とする自己表現力を培ってもらい、社会参加や就労へと繋げることを目的とした。

3.7.3. ロジックモデル

昨年度のロジックモデルを踏まえて、劇団銅鑼からのヒアリングを実施し、今年度の新たなロジックモデルを作成した。本プログラムの目的はワークショップ参加者の自立支援であるため、プログラムにとっての重要な受益者はワークショップ参加者になる。ワークショップを通して、就職のためのスキル習得といったことではない、「生きる力」の土台となるような、自己肯定感、達成感、仲間との絆などを深めていくことで、結果としての社会参加につなげていくことが本プログラムの目指す成果である。

図表 3-89 青年対象（東京）プログラムのロジックモデルの修正版



3.7.4. 評価設問と指標

策定したロジックモデルに従って、下記の評価設問と指標を設定した（図表 3-90）。

図表 3-90 評価設問と指標

	評価設問	指標
1.	ワークショップ参加者は、起床、食事、睡眠などの生活のリズムは規則正しく変化したか	生活リズムの変化
2.	ワークショップ参加者は、生活していく上での目標や計画を自分で立てているか	生活目標や計画を立てる度合い
3.	ワークショップ参加者は、相手の話や気持ち、場や状況を理解した上で、自分の意志や意見を伝えることができるか	場や状況を意識して意見をつたえられる頻度
4.	ワークショップ参加者は、友人や知り合いとの会話の機会が多いか	友人や知り合いとの会話の多さ
5.	ワークショップ参加者は、自分にはいろいろな良い素質があると思うか	自己肯定感の高さ
6.	ワークショップ参加者は、自分のことを好ましく感じるか	自己肯定感の高さ
7.	ワークショップ参加者は、自分が安心できる居場所をもっているか	安心できる居場所の有無
8.	ワークショップ参加者は、何事も完璧を求めるだけでなく、柔軟・臨機応変に対応できるか	生活態度の柔軟性

また、本プログラムの昨年度参加者である S 氏が、今年度は継続して協力者として演劇ワークショップに関係したことを踏まえ、彼を情報源に本プログラムが与える中・長期的影響を知ることができると考え、「ワークショップ参加者に発現した中・長期的変化にはどのようなものがあるか」という設問を追加した。

3.7.5. 測定と分析結果

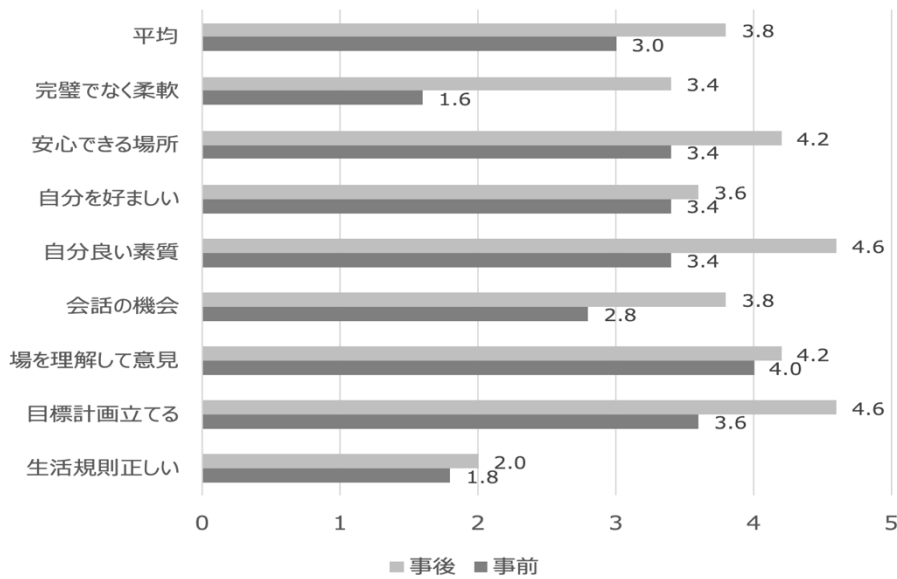
3.7.5.1. ワークショップ参加者アンケート結果

ワークショップ参加者に対しては、8 月ワークショップ 開始以前の面談の際に事前アンケートを、発表会終了後の 10 月 15 日の振り返り会合の際に、事後アンケートを自己記入で実施した。アンケートの質問内容は、指標から導き出した以下 8 問であり、事前、事後とも同じである。それぞれに「当てはまる：5 点」「やや当てはまる：4 点」「どちらとも言えない：3 点」「やや当てはまらない：2 点」「当てはまらない：1 点」から自分の現状に合致するもの一つを選んでもらった。アンケート対象者は、本プログラムに最初から最後まで参加した 5 人であり、辞退者 3 人は除外した。質問項目と事前・事後の 5 人の平均値、前後差は図表 3-91、図表 3-92 を参照されたい。自己肯定感に関する質問（問 5、6）で、数値が向上したと推定される人数は 3 人（60%）であった。

図表 3-91 事前・事後アンケート結果①

	質問項目	事前平均	事後平均	前後差
1.	私の起床、食事、睡眠などの生活のリズムは規則正しい	1.8	2.0	+0.2
2.	私は生活していく上での目標や計画を自分で立てている	3.6	4.6	+1.0
3.	私は相手の話や気持ち、場や状況を理解した上で、自分の意志や意見を伝えることができる	4.0	4.2	+0.2
4.	私は友人や知り合いとの会話の機会が多い	2.8	3.8	+1.0
5.	私は自分にはいろいろな良い素質があると思う	3.4	4.6	+1.2
6.	私は自分のことを好ましく感じる	3.4	3.6	+0.2
7.	私は自分が安心できる居場所をもっている	3.4	4.2	+0.8
8.	私は何事も完璧を求めめるだけでなく、柔軟・臨機応変に対応できる	1.6	3.4	+1.8

図表 3-92 事前・事後アンケート結果②



事後アンケートの自由解答欄にワークショップの感想を書いてもらったところ、図表 3-93 の回答があった。

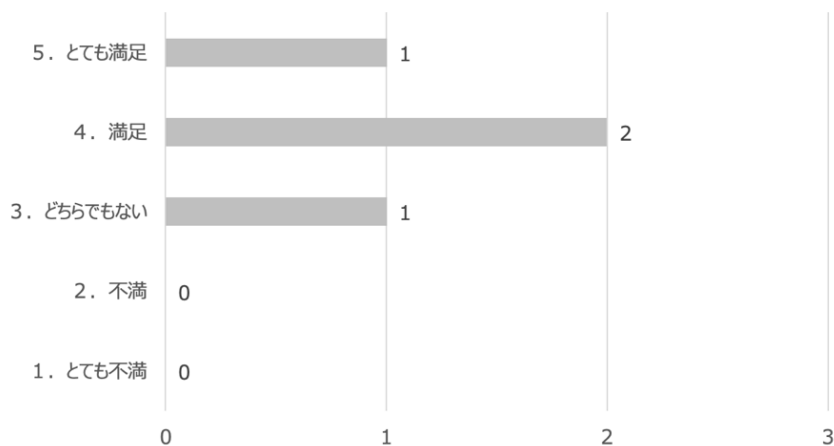
図表 3-93 参加者事後アンケート自由解答欄より抜粋

質問：プログラムを振り返っての感想を自由に書いてください
<ul style="list-style-type: none"> ・ 台本のセリフに助けられた。やるしかないと思うようになった ・ 明日から自分に少し自信を持てるように思います ・ 何かを成し遂げる素晴らしさ、人と人との繋がり、チームワークの大切さを感じました

3.7.5.2. 講師、協働先アンケート結果

10月15日の振り返り会および本プログラム終了時に、講師・協働先アンケートとして、劇団銅羅、日本劇団協議会、ワーカーズコープなどを対象としたアンケートを実施した。それらの結果の抜粋は、図表 3-94（質問：演劇ワークショップに貴団体利用者が参加してみていかがでしたか）、および図表 3-95 である。

図表 3-94 講師・協働先の演劇ワークショップへの満足度（n=4）



図表 3-95 講師・協働先の演劇ワークショップへの感想

<p>質問：プログラムを通じて、あなたやあなたの所属団体にどのような気づき、学びがありましたか。貴団体にとって自立支援や就業支援を考えるヒントが得られましたか</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 安心・安全な場であること（自分が受け入れられている）、そして否定されずに意見を言える場が保証されることによってチームの力も高められる ・ ホットシーティング（役作りの手法）等を通じて、自分とは違う役を演じるにあたり、『自分はどんな人間か』を考える機会があります。それで自分自身にも発見があるのだと思います。他者と接することで自分が見えてくるのだと思います ・ 自分が受け入れられているという感覚が持てるコミュニティの中で、若者は最も力を発揮できる、という点

3.7.5.3. 参加型評価手法 MSC ワークショップ

10月15日の振り返り会合において、ワークショップ参加者と講師・協働先を対象に、参加型・質的評価手法であるMSC（モスト・シグニフィカント・チェンジ）を応用したワークショップを実施した。まず演劇ワークショップ参加者5人と講師・協働先7人の一人一人が、演劇ワークショップを通じて発生したアウトカムを、「自己に起こった重大な変化」と「仲間が起こった重大な変化」の領域で考えてもらった。そして、それぞれを付箋に書いて大きな紙にはり、お互いに共有した。その後、それぞれの領域の中で「最も重大な変化」を1人1票の投票によって一つずつ選ぶ作業を行った。なお、投票は領域ごとにワークショップ参加者および講師・協働先12人全員で行った。MSCワークショップ結果の詳細に関しては図表3-96および図表3-97を参照のこと。

図表 3-96 MSCワークショップで作成した図解



図表 3-97 参加者および講師協働先による MSC ワークショップ結果

	抽出されたアウトカム（重大な変化）	投票得票数
自分に起こった変化：ワークショップ参加者において	演じている様で、それがあるままの自分なんだ（自分はこのままで良いと思えた）	●● (2/12)
	強くなった。1人じゃないと思った。人の目を気にしなくなった	●●● (3/12)
	これを機会に、もう一度夢に挑戦したくなった	●●●●●● (6/13)
	自然な自分（ナチュラル・ライフ）	● (1/12)
	共同体験することを怖がらなくてもいいかな？と思えるようになりました	
自分に起こった変化：講師・協働先において	「ま、いっか」がますます増えた（完璧でなくて良いと思えた）	●●●●● (5/12)
	なんとかなる、なんとかする、と思えるようになった	●●● (3/12)
	参加者の演技が変わるにつれ、入れる音の間がわかってくる	
	人は表に見えている部分だけでなく深いということが改めてわかった	● (1/12)
	自分に嘘をつかなくてもいい（無理しなくていい）と思えるようになった（周りのフォローがあるので）	●● (2/12)
	ますます人が好きになった（人が変わる姿、一所懸命）	● (1/12)
	言葉を伝えられるようになった。勇気がでた	
仲間が起こった変化：ワークショップ参加者、講師・協働先両方において	自然な会話が増えた。仲間意識が高まった	
	自己主張しあっても良い場になった	●●●●● (5/12)
	いろいろご迷惑をおかけしたのですが、最初は「お仕事柄よくしてくれるのかな、だから甘えちゃいけないな」と一般的な判断してしまいましたが、よく知るにつれ、素でいい人なんだと、人間信頼につながりました	
	ビッグブラザーになった。家族・友達と違う仲間、大好き	●● (2/12)
	みんなの心が一つになった	
	エネルギーがUPした	● (1/12)
	Mくんの本番のセリフ「岩島に頼ったんは私が弱かったんじゃ」とも気持ちのつた大きな声が出ていた	
	支え合っている仲間意識が強くなった。一体感	
	笑顔が増えた（劇団に入るとき。ワークショップ）	
	みんなの顔つきがイキイキしてきた。かっこよくなった（内面）	●●●● (4/12)
	先輩も間違える（カワイイ）	
	自分は自分でいい。あなたはあなたでいい。折り合いをつけ、許し合う関係へ	

「最も重大な変化」に選ばれたのは、ワークショップ参加者における「自分に起こった変化」においては「これを機会に、もう一度夢に挑戦したくなった」であった。講師・協働先の「自分に起こった変化」では、「『ま、いっか』がますます増えた（完璧でなくて良いと思えた）」が選ばれた。ワークショップ参加者、講師・協働先で一緒に変化を表明した「仲間が起こった変化」における選択では、「自己主張しあっても良い場になった」が、「最も重大な変化」となった。

3.7.5.4. 二年間連続して演劇ワークショップに関わった青年 S 氏への In Depth インタビュー⁷

本プログラムによる中・長期的なアウトカムを探る目的で、昨年度（平成 29 年度）に本事業の青年対象演劇ワークショップ（東京）の参加者であり、今年度（平成 30 年度）は、協力者として 2 年連続で本プログラムに関わった青年 S 氏に、In Depth インタビューを実施した（12 月 11 日）。図表 3-98 で概要を記す。

図表 3-98 S 氏の In Depth インタビュー結果

演劇ワークショップ参加以前	中学校 1 年から学校へ行かなくなった。飲食店の仕事は 3 日で辞めてしまい、職業訓練校では面接で落とされ、がっかりした。サポートステーションでは面接、フリートーク、コミュニケーション等のプログラムがあった。複数の人と話すのが苦手だったが、相手との距離感の取り方を学んだ。集中訓練プログラムで職場体験の 1 週間があり、大変だったが乗り切れた。ここでの経験があったため、演劇ワークショップに参加できたのだと思う
最初に演劇ワークショップに参加する経緯	もともと劇に関する興味があった。サポートステーション経由で演劇ワークショップの情報が来た。やってみたいことだったし、タイミングが良かった。合宿など大変そうだったが、これまでの経験（就職訓練）があったので、大丈夫と思えし、やりたい気持ちが強かった
演劇ワークショップで自身にどのような変化があったか	第一に、自信がついたこと。それまでは自分の考えを周囲に言えなかった。演劇を通じて、言ってもいいんだ、という安心感を得ることができた。意見や個性を尊重してくれる場所が存在することがわかった。役作りに関して自分で考える必要があった。セリフの意図やキャラクターやその経験を考えた。後半から自分を出せば出すほどしっくり来た。辛かったけど、良い経験になった。以前は考えすぎることがあったが、それがなくなった。第二には、あらゆる場面、特に演劇では自分一人ではできないと思ったこと。これまで人と協力して何かやることを経験してこなかった。本番のときの自分の中の高揚感やお客さんの満足感は、自分だけでは絶対に得られない
演劇ワークショップで嫌だったこと	辛いことが多かった。辛さ 9 割。考えてしまう自分がいたが、考える期間が長くて辛かった。考えることも、稽古自体も辛かった。投げ出さなかったのは、自分で決めたことだから
2 年目に参加する経緯	劇団からお声がかかった。去年と今年の間保育園の用務のアルバイトしていた。子どもが苦手だったが、仕事をしていくうちに、考えすぎないようになり、接し方がわかった
成長に演劇ワークショップ以外の要因はあるか	いかに人と関わるかだと思う。成長は人との関わりである。この 1～2 年で、人との関わりが生まれたのは、サポートステーション、演劇、仕事。詩吟も習っている。場所によって全然違う人たちがいるが、全然違うことが学べる

引きこもりであった S 氏が、サポートステーション参加を契機に、演劇ワークショップに参加した。そこで役作りを通じて自分を見つめ直したり、他者と協力したりすることを学んだ。辛いことも多かったが、過去の経験に支えられて決断し、階段を一步一步登るように、時間をかけて成長してきた過程が生き生きと語られている。

3.7.5.5. 講師がワークショップ参加者から得た情報

上記のデータ以外に、講師がワークショップ参加者との電話、E メールなどのやり取りによってもたらされた情報を列挙する。発表会当日に把握された情報として、「それまで生活が昼夜逆転していた参加者が、無事に、日中の発表会に出演できるようになった」がある。加えて、本プログラム終了後に確認された変化としては、ワークショッ

⁷ In-Depth Interview：綿密なインタビュー。質的研究で用いられるインタビューの方法で、インタビュアーにより、解釈された情報提供者の経験を理解することを目的とする（後略）。参考文献「プライマリ・ケア英和辞典」<https://ejje.weblio.jp/category/healthcare/prcry>（2018 年 12 月 19 日閲覧）

ブ参加者 5 人中 3 人から「アルバイトなどで就労する」との連絡が入ったという情報がある（平成 30 年 12 月現在）。

3.7.6. まとめと今後の展望

3.7.6.1. 自己肯定感の向上と演劇ワークショップの価値を認識した割合

自己肯定感の向上と演劇ワークショップの価値を認識した割合は、下記のとおりにまとめられる。

図表 3-99 2つの指標の結果

No.	内容	目標値	実績値
1	コミュニケーションワークショップ実施前後で、ワークショップ参加者の自己肯定感が高まった割合	50%	60%：無記名アンケートで 5 人中 3 人の自己肯定感が向上と推定
2	本事業の協力団体が、演劇的手法によるワークショップの価値を認識した割合	70%	75%：協働団体アンケート 4 人中の 3 人が「たいへん満足」「満足」と回答

3.7.6.2. 評価の総括

本プログラムの評価の総括として、3.3.6と同様の5つの観点で、講師・協働先・調査員による分析・査定作業を行った。図表 3-19 に示された各項目に対し、五段階で回答した結果を図表 3-100 に示す。

図表 3-100 青年対象プログラム（東京）の評価に関する総括

	評価設問	詳細
1	課題分析の妥当性（ニーズ）	B：ある程度可能性がある
2	内容の妥当性（セオリー）	A：十分に可能性がある
3	実施の適切性・十分性（プロセス）	B：ある程度可能性がある
4	効果（アウトカム）	A：十分に可能性がある
5	効率性	C：どちらとも言えない

ニーズ評価について、本プログラムは参加者ニーズに答えていたと考えられる。本プログラムは無業・無就学の青年を対象としているが、誰でも気楽に参加できる容易な内容ではない。しかし、「自分を変えたい」と決意をし、ある程度の覚悟のある青年の特定したニーズに合致したプログラムといえる。二泊三日の合宿に始まり終日スケジュールで 19 回続くワークショップに参加し続けることは、それまで就業や就学をしていなかった青年にとっては、かなりの困難を伴うと考えられる。しかし、「自分を変えたい」という意思を持った参加者にとっては、厳しいけれど適切な内容であった。S 氏の「投げ出さなかったのは、自分で決めたことだから」という発言や、今年の参加者アンケート自由記入欄「やるしかないと思うようになった」もそれを裏付けている。

プログラム設計においては、「集団で協力して芝居を創り、発表を行う」という演劇的手法を採用したことが、目標を達成する上で非常に効果的であった。これについては、以下の三つの要素があったと考える。

一番目は、参加者に「安心して自己表現をできる、受け入れられる場」を作ったことである。MSC ワークショップにおいて「仲間が起こった変化」の中で「最も重大な変化」とされたのは「自己主張しあっても良い場になった」であった。自分に起こった変化では「演じている様で、それがありのままの自分なんだ（自分はこのままで良いと思え

た)」など類似の回答が見られた。講師・協働先アンケートにおいて「安心・安全な場であること(自分が受け入れられている)、そして否定されずに意見を言える場が保証されることによってチームの力も高められる」との回答があった。事前・事後アンケートでも「7. 安心できる居場所をもっている」が0.8ポイント増えている。

二番目は参加者が芝居の「役作り」を通じて、自分を見つめ直したり、チームワークの良さを学んだりしたことである。そのことが各々の「自分を変える」契機となった。講師・協働者アンケートで「ホットシーティング(役作りの手法)等を通じて、自分とは違う役を演じるにあたり、『自分はどんな人間か』を考える機会があります。それで自分自身にも発見があるのだと思います。他者と接することで自分が見えてくるのだと思います」という答えがあった。それに関して、S氏は、「細かい演技指導はなく、自分で考える必要があった」と述べている。

三番目に、本プログラムは、本物の演劇しながらに「最後に一般客を対象とした本番の発表会という明確な目標が存在する」ことを指摘したい。S氏は「本番のときの自分の中の高揚感」が印象に残ったと述べている。この件について講師は「最後に上演があり、人に見られる経験や裏方の仕事を知ることもできる」ことが参加者の自己変革に効果的であると発言している。発表会という「明確な目標を伴う」ことは、参加者の「覚悟」を必要とするが、より真剣に「自分を見つめ直す」機会を提供し、自己変革につながって行くと考えられる。

プロセスについては、プログラムは計画通り19日間の演劇ワークショップが実施され、問題は生じなかった。次に実施プロセスを振り返る。講師・協働先による以下の発言がある。「ワークショップ最初に合宿で参加者と交流する中で、参加者のニーズを詳細に把握した。そのことがワークショップ後半の運営に反映され、より適切な運営が可能になった」という点をあげたい。プログラム実施中に柔軟な調整が行われたことで、参加者に与えるストレスを軽減し、最後までワークショップを貫徹することを助けた。実績とプロセスのあり方は高い水準にあったといえる。

効果(アウトカム)はたいへん高いと考えられる。参加者アンケートの前後比較において、全ての指標において望ましい方向への変化が起こっている。また自由回答欄やMSCワークショップで把握した変化、S氏へのインタビュー結果などがそれをサポートしている。実際にアルバイトを開始した参加者もいる。以下調査結果を解説する。

「生活のリズムは規則正しさ」の指標では、0.2ポイント増だが、具体例では昼夜逆転していた参加者が、無事日中の発表会に出演できるようになった、という効果があった。次に「目標や計画を自分で立てる度合い」は1.0ポイント増である。この点MSCワークショップでは参加者の「もう一度夢を」が「最も重大な変化」に選ばれた。これは「以前は音楽関係の夢を持っていたが、諦めていた。ワークショップ参加を契機に今一度その夢に挑戦したい気持ちになった」と、いう内容であった。これは参加者の人生の目標設定に本プログラムが影響を与えたと考えられる。「自分に良い素質がある」、「自分を好ましく感じる」という「自己肯定感」に関する指標では、前者が1.2ポイント増、後者が0.2ポイント増である。「自分が安心できる居場所をもっている」に関しては、MSCワークショップにおいて「強くなった。1人じゃないと思った」「自己主張しあっても良い場になった」と関連する変化が報告されている。「何事も完璧を求めず、柔軟・臨機応変に対応できる」は事前1.6から事後3.4で、1.8ポイント増えている。この点に関してS氏も「(ワークショップ参加)以前は考えすぎることがあったが、それがなくなった」と述べており、興味深い。しかし、当プログラムだけが変化を起こした唯一の要因ではなく、サポートステーションの活動や、参加者自身の努力など、いくつかの要因が重なり、相乗効果で変化が発現したと考えられる。S氏は「成長は人との関わりである。(中略)サポートステーション、演劇、(昨年プログラム参加後の)アルバイトや趣味として習っている詩吟」と、様々な活動で人と交流することが成長につながったと語っている。

効率性に関しては、本プログラムの性質上、参加者の意識・行動変容といった成果を定量的に価値化することが困難であり、裨益者数も5人と少ない。投入と効果の比較が不可能である。効率性は、どちらとも言えない、との判定になった。

事前・事後アンケートではすべての指標で望ましい変化がみとめられ、自由記入欄やMSCワークショップでは変化に関する定性的情報が示された。参加者の数人がアルバイトなど就業を始めたことが確認され、本プログラ

ムが高い成果を上げていることがわかる。しかし S 氏に見られるように、変化の発現には一定の時間がかかっている。これらの変化が今後どの程度継続するか、注意して見守り、適宜必要なサポートをする必要があるだろう。

指標を考察するにあたり注目できるのが「何事も完璧を求めだけでなく、柔軟・臨機応変に対応できるか（生活態度の柔軟性）」である。講師・協働先の観察によると、プログラム前のワークショップ参加者は、「何ごとも完璧でなければならない」と言った完璧主義の傾向があったという。しかし、最終アウトカムである「自立・社会参加」を実現するには、完璧を求めるとも大切であるが、時には適当なところで折り合いをつける柔軟な生活態度が必要である。その視点を、本プログラムで学んだ、という声が多かった。

また自己肯定感に関して発見があった。ロジックモデル作成時には、「プログラム以前は参加者の自己肯定感が低いであろう」という推測があり、「自己肯定感の向上」を指標の一つにした。ところが、実際の事前アンケート調査によると、自己肯定感を問う質問に対して、低い自己肯定感を示す回答があった一方で、高い自己肯定感を示す回答をした参加者が複数存在した。従って、参加者の自己肯定感事前の段階で必ずしも低くはない、ことがわかった。類似のプログラムで、「自己肯定感」の指標を設定する場合は注意を要するかもしれない。

総合的に見て、本プログラムは効果が非常に高く、参加者のニーズに対応し、適切な設計がなされて、また柔軟かつ適切に実施されている。講師は本プログラムを、「今後行われる類似プログラムに対するモデルケースとしていきたい」と語っている。調査員の実感でも、モデルケースにふさわしいプログラムであると考えている。このようなプログラムが継続的に実施され、無業・無就学の青年の自立や社会参加に貢献していくことを希望する。

図表 3-101 参加者がデザインした発表会のチラシ

若者演劇ワークショップ
in 東京 公演発表

ビッグブラザー

～Big brother～

★公演日時★
2018年10月14日（日）
14時開演（13時30分開場）

★公演会場★
劇団銅鑼アトリエ
（東武東上線
上板橋駅下車 徒歩10分）
※地図は裏面記載

★入場無料★
（※客席数が限られているので
事前のご予約が必要になります）

上演時間 60分（予定）
※終演後 懇親会を予定しております。
よろしければそちらもあわせて
ご参加下さい。

作：小関直人
構成・演出：佐藤文雄
舞台協力：劇団銅鑼
協力：ワーカーズコープ
NPO 法人文化学習協同ネットワーク
NPO 法人業の会リーラ
べてぶくろ

やってみようプロジェクト
文化庁委託事業「平成30年度戦略的芸術文化創造推進事業」
主催：文化庁 公益社団法人日本劇団協議会
制作：公益社団法人日本劇団協議会

文化庁

3.8. 【在日外国人対象】（小野市うるおい交流館エクラ）

3.8.1. 概要、プログラム内容

本プログラムは、小野市および周辺地域在住の外国人を対象として実施した、外国人支援を目的とした演劇ワークショップである。演劇ワークショップを3回開催した。

図表 3-102 在日外国人対象プログラムの講師、コーディネーター、調査員

講師	本田千恵子、山田裕、眞山 直則、中川義文
コーディネーター	田窪哲旨
	以上 ピッコロ劇団
調査員	千葉直紀、落合千華

図表 3-103 在日外国人対象プログラムの概要

対象者	小野市および周辺地域在住の外国人（主な対象は子どもと若者）
活動場所	小野市うるおい交流館エクラ （NPO 北播磨市民活動支援センター。以下、エクラ）
プログラム目的	日本語によるお芝居づくりを通して、外国人にとってふだんの仕事や日常生活では機会が少ないと思われる深く親しいコミュニケーションを体験してもらうことで、地域におけるコミュニティづくりを促進する。また日本の生活になじめない外国人の参加を促し、今後の地域社会への参加へとつなげ、日本人と外国人がいきいきと共生する地域社会の実現をめざす
プログラム概要	日本語のせりふや歌による5分程度の小作品を、チームに分かれてつくる
実施時期・期間	平成30年8月～9月 全3回（各2時間前後）

3.8.2. 背景と目的

本演劇ワークショップは、エクラと国際交流協会と協働をして小野市および周辺地域在住の外国人（特に、子どもと若者）を対象として実施する。小野市の人口5万人弱に対して、市内在住の外国人は約700人（25ヶ国の出身者）が居住している。国際交流協会が開催する日本語教室の参加者は、小学生～40代の120～130人程度であり、課題を抱えているのは全ての年代で、また内容も多様である。課題を抱える外国人が増加する中で、エクラから国際交流協会に相談したところ、快く受け入れてくれた。国際交流協会からは、「東南アジア、インドネシアやベトナムといった国々から来て、日本で就労している人々に対して、より地域になじんでもらうために何かしたい」というニーズや、「日本語指導を長くやっているが、日常生活に即した日本語を使った自己表現力を養えると良いと思う」などの声が聞かれており、本プログラムを開催する運びとなった。

本ワークショップの目的は、日本語によるお芝居づくりを通して、外国人にとってふだんの仕事や日常生活では機会が少ないと思われる深く親しいコミュニケーションを体験してもらうことで、地域におけるコミュニティづくりの促進を狙いとする。また日本の生活になじめない外国人の参加を促し、今後の地域社会への参加へとつなげ、日本人と外国人がいきいきと共生する地域社会の実現を目指して企画された。

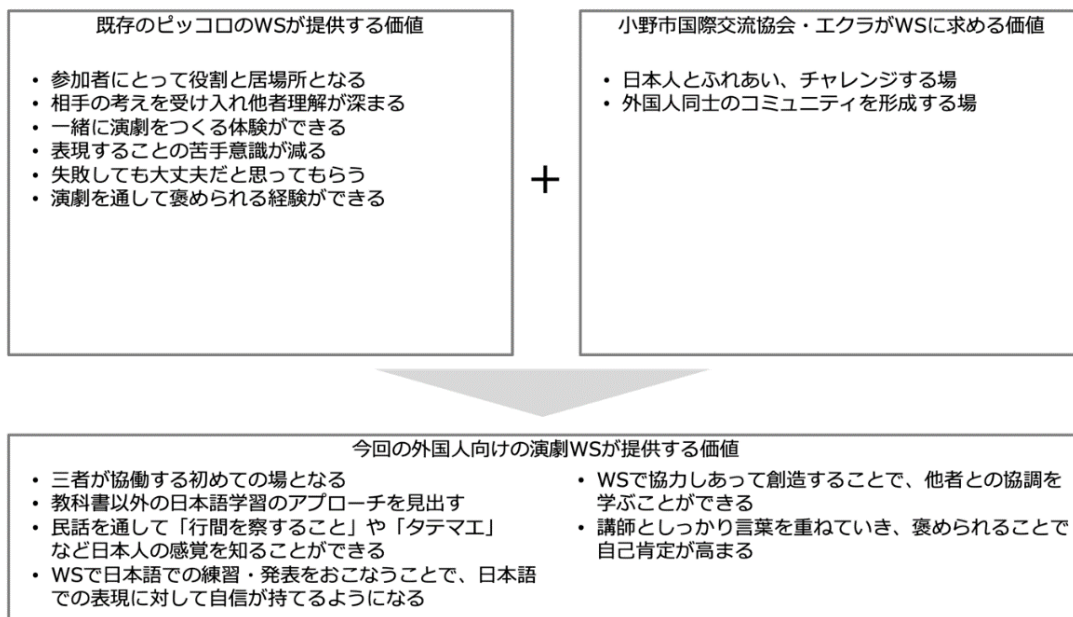
調査チームが入ったのキックオフミーティングで、三者での対話を通して、それぞれの対象者の課題が下記のように整理された。

図表 3-104 国際交流協会に関わる外国人が抱える課題の例

対象者	対象者が抱える課題とエピソード
小学校高学年～中学生の子ども	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自国で優秀だった子どもほど、プライドが高く、引きこもってしまう ・ 英語や数学はできるが、テストや教科書は日本語で書いてあるため点数が取れず、自信をなくしてしまう ・ 海外の子どもは物事を素直に受け止める。周囲の「勉強していない」という言葉をそのまま受け止めて、全く勉強していない（日本人の本音とタテマエ、裏のことがわからない） ・ Cくんは、学校に行けておらず、ひきこもり状態。参加して欲しい子どもの一人。家族とは仲が良いが家族以外とのコミュニケーションはない
技能実習生の19歳～30代の若者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 会社ではテキストに無い言葉（方言）が使われるので、日本人に言われることがわからない ・ テキスト通りの綺麗な言葉を使うと笑われてしまうので、日本人と会話をする勇気がない ・ 会社の寮で同じ国の人たちと共同生活を行っており、会社と寮だけの往復の生活で、日常で日本人との交流がない ・ スーパーで物を買う時に店員さんに尋ねることもできない（花を買ったつもりが、ネギを買って植えていたというエピソードあり）
子どもの保護者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本語教育の重要性を理解していないことが多い ・ 忙しくて、子どものことまで頭がまわらない ・ 保護者が日本語を理解できていないことも多い
教育委員会・学校の先生など	<ul style="list-style-type: none"> ・ 先生が家庭訪問している ・ 学校では入学後4ヶ月間、2週間に1度母国語サポートの機会があるが、少ない
外国人が暮らす地域の住民	<ul style="list-style-type: none"> ・ 協会主催の日本語スピーチ発表会・茶話会・交流会に参加しても、日本人から話しかけられることが少ない ・ 近所の人とうまくコミュニケーションを取れないために、ルールを破ったゴミ出しがあると、外国人居住者のせいにされてしまう ・ 上記のクレームが国際交流協会にくる

さらに課題と成功のイメージを踏まえて、三者での対話を通して洗い出された「ピッコロの演劇ワークショップがもたらす価値」を整理すると下記図表 3-105 の通りとなった。また、実際のワークショップの流れ、様子を図表 3-106、図表 3-107 に示す。

図表 3-105 外国人向け演劇ワークショップが提供する価値



図表 3-106 在日外国人対象プログラムの流れの例

実施内容	詳細
ワークショップの流れの説明 ファシリテーターの自己紹介	<ul style="list-style-type: none"> 途中でわからない日本語があれば、言ってもらい、スマートフォンで調べてもらうよう促す 文化や宗教上の理由で嫌なこと、できないことがあれば、遠慮なく言ってくださいと促す（他者に触れる、手を繋ぐなど）
それぞれの国のじゃんけんの違いを紹介してもらう	—
参加者みんなの自己紹介をしてもらう	<ul style="list-style-type: none"> 名前と、出身国、好きな日本語を言ってもらう 好きな日本語で挙がったことは、「しずか、電車、一期一会、頂戴、海、山、挨拶、ありがとうございます、孤独、空、おはようございます、お寿司、温泉、タダ」など
誕生日順に並んでもらう	<ul style="list-style-type: none"> 立ち上がって、誕生日順に並んでもらう 誕生日が近いと盛り上がった
みんなでひらがなを体で表してもらう	<ul style="list-style-type: none"> 円になって、全員一文字ずつ表されたひらがなの紙を受け取り、体を使ってひらがな一文字を表すことに取り組んでもらう まずは代表の2人に実施してもらい、みんなが何の文字か当ててもらう さらに、全員がそれぞれ自分で実施してみる 自分のひらがなのカードを胸に貼り、チームになって、単語を作る、というゲームを実施 2文字、3文字、4文字、5文字、となって、いろいろなチームで行う 参加者の発想で出た単語は、次のようなもの。加東市、くま、テーマ、さつまいも、たくさん、やさしい、たのしい、など

図表 3-107 在日外国人対象プログラムの様子

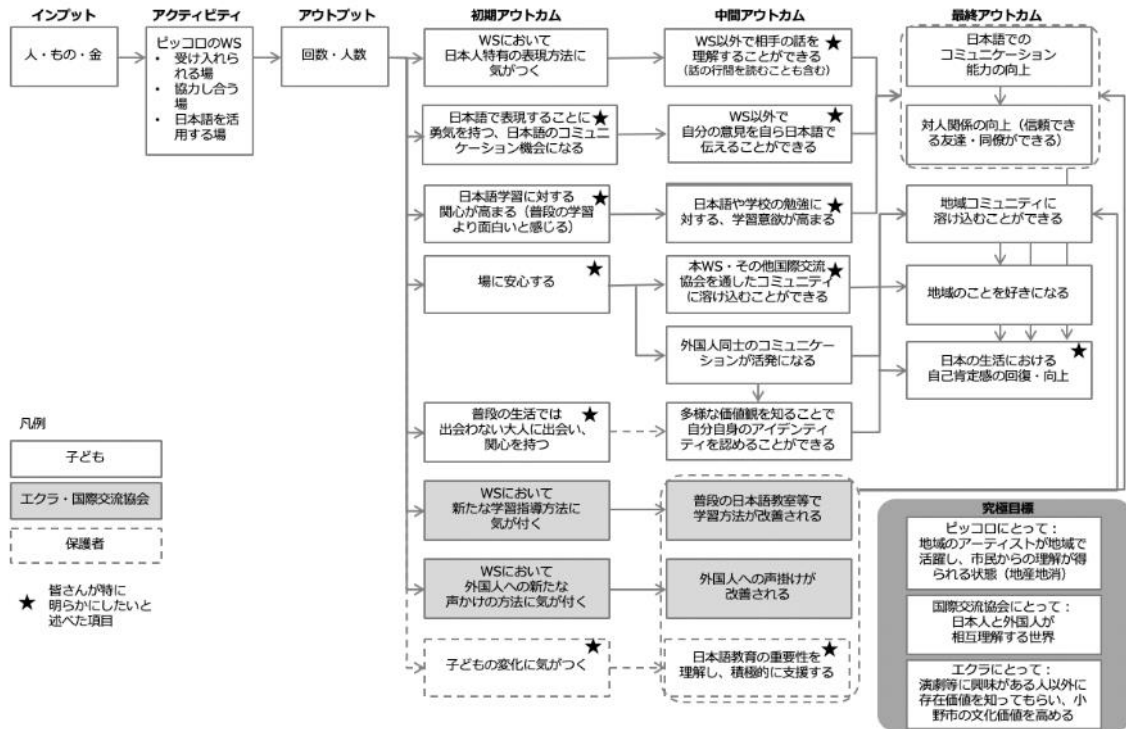


3.8.3. ロジックモデル

エクラ、国際交流協会、ピッコロへのヒアリングを実施し、以下のとおりロジックモデルを作成した。図表 3-108 に示す。

図表 3-108 プログラムのロジックモデルの全体像

対象プログラム	演劇ワークショップ「にほんごであそぼう」 正式タイトルは、「お芝居づくりを通して、日本語を勉強しよう、体験しよう」
対象者	小野市および周辺地域在住の外国人（主な対象は子どもと若者）
目的	1. 日本語によるお芝居の小作品づくり、といういつもの学習とは違う角度から日本語の習得に楽しく取り組んでいただく機会とする 2. お芝居づくりの過程を通して、ふだん親しく接することの少ない外国人同士でも深いコミュニケーションをとることによって、コミュニティづくりを促進する 3. 日本の生活になじめない外国人（子どもを含む）にも広く門戸を開き、お芝居づくりをきっかけにして、今後の地域社会への参加へとつなげていきたい



3.8.4. 評価設問と指標

3.8.4.1. 調査の概要

①調査の目的

本プログラムにとっての重要な受益者である外国人が演劇ワークショップに参加することによって、最終的に日本の生活における自己肯定感の回復・向上につなげていくことが本プログラムの成果である。そのために、初期アウトカムや中間アウトカムを整理し、これらに貢献したかどうか重要な観点である。そこで、本プログラムの成果を検証するために、ワークショップ参加者の変化の把握を目的とした調査を実施した。

②調査の方法

図表 3-109 に調査対象とデータ取得時期、および調査方法を示す。ワークショップ参加者の外国人には国際交流協会のスタッフを通してアンケートを取得した。

図表 3-109 調査対象とデータ取得時期

	事前	第1回ワークショップ	第2回ワークショップ	第3回ワークショップ	終了後
ワークショップ参加者		初期アウトカム測定 のアンケート	初期アウトカム測定 のアンケート	初期アウトカム測定 のアンケート	中間アウトカム測定 のアンケート
国際交流協会	ワークショップの目的・内容のディスカッション ロジックモデル（セオリ）の再整理	アウトプット指標 の測定	アウトプット指標 の測定	アウトプット指標 の測定	協働先調査に関するアンケート
エクラ		-	-	-	
ピッコロワークショップ講師		-	-	-	

3.8.4.2. ロジックモデルに基づいたアウトカム指標の設定

作成したロジックモデルに従って、各重要なアウトカムに対して、指標（アンケート項目）を設定した。図表 3-110 に示す。

図表 3-110 ロジックモデルから抽出した各重要なアウトカムと指標（アンケート項目）

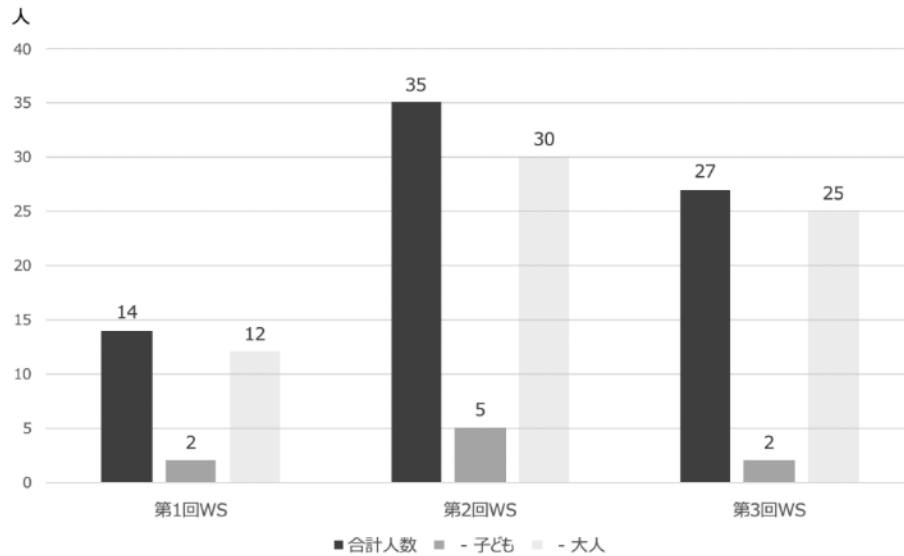
No.	ロジックモデルから抽出した重要なアウトカム	指標（アンケート項目）	
		外国人	国際交流協会
1	（初期）言いたいことを日本語で表現できる	にほんご、はなせた？	参加者の何割くらいが、言いたいことを日本語で表現できていましたか
2	（初期）いつもの日本語の勉強よりも楽しむ	たのしかった？	参加者の何割くらいが、いつもの日本語の勉強よりも楽しんでいましたか
3	（初期）安心して参加する	あんしんできた？	参加者の何割くらいが、安心して参加できていましたか
4	（初期）普段会わない日本人に関心をもつ	せんせい、すき？	参加者の何割くらいが、演劇の先生たちのことを好きになっていましたか
5	（中間）本ワークショップ・その他国際交流協会を通じたコミュニティに溶け込むことができる	-	今住んでいる場所で、なんでも話せる友達が何人いますか
		-	日本人で何でも話せる友達が何人いますか
		-	学校や仕事に次の日も行きたいと思いますか
		-	ワークショップで出会った人と今も話すことがありますか
6	（最終）日本の生活における自己肯定感の回復・向上	-	国際交流協会のイベントなどによく参加しますか
		-	自分自身に満足していますか

3.8.5. 測定と分析結果

3.8.5.1. ワークショップ参加者数

図表 3-111 にワークショップ参加者数の推移を示す。参加者数は合計 76 人（重複あり）で、想定以上であった。特に第1回ワークショップに 14 人参加したことに對して、第2回ワークショップは 35 人参加に大幅に増加した。国際交流協会が非常に熱心な個別の声がけを行ったり、第1回ワークショップの様子をまとめたショートムービーを作成して SNS 上で拡散するなど、参加を促す工夫を行った。

図表 3-111 ワークショップ参加人数の推移



図表 3-112 に、参加者の感想（第 2 回目のワークショップ）の抜粋を示す。ワークショップ最後に円になって座って、それぞれが一言ずつ日本語で感想を述べた。参加者それぞれが、日本語で肯定的な感想を述べた。

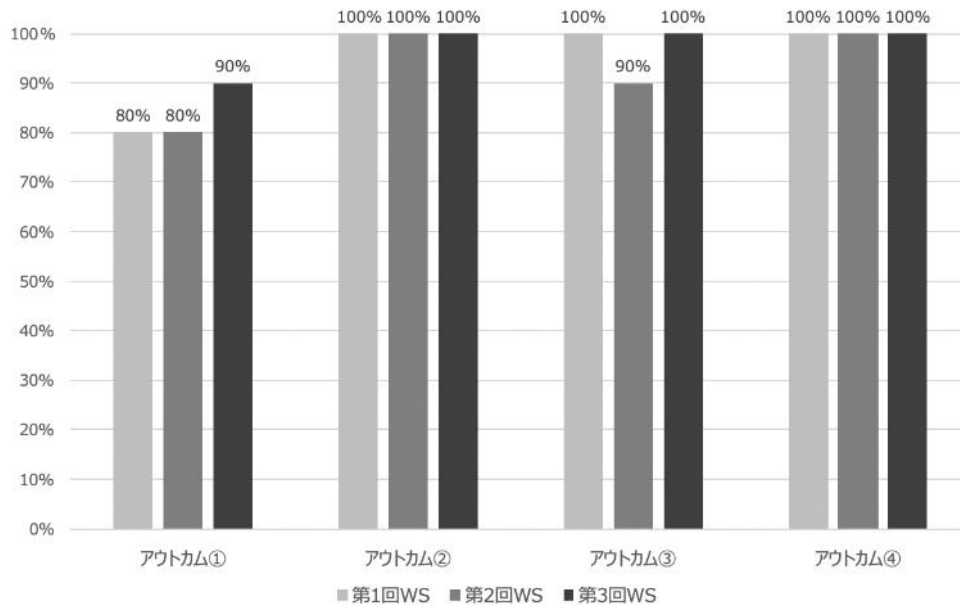
図表 3-112 ワークショップ参加者の感想

- ・楽しかった、面白かった、参加してよかった
 - いろいろな国の人と集まって楽しかった、チームになれて楽しかった
 - からだでの表現が楽しかった
 - みんなとの会話が楽しかった
 - ゲームは難しかったが、面白かった
 - 最後のゲーム（静止画）が一番面白かった
 - 「だるまさんがころんだ」が面白かった
 - また参加したい
- ・新しい友達ができた
- ・元気になった、ストレス発散になった
 - 仕事終わりの参加で疲れていたが、元気になった
 - ストレス発散になった
- ・日本語をたくさん話すことができた、日本語が理解できた
 - ゲームの説明は日本語だったが、理解できた

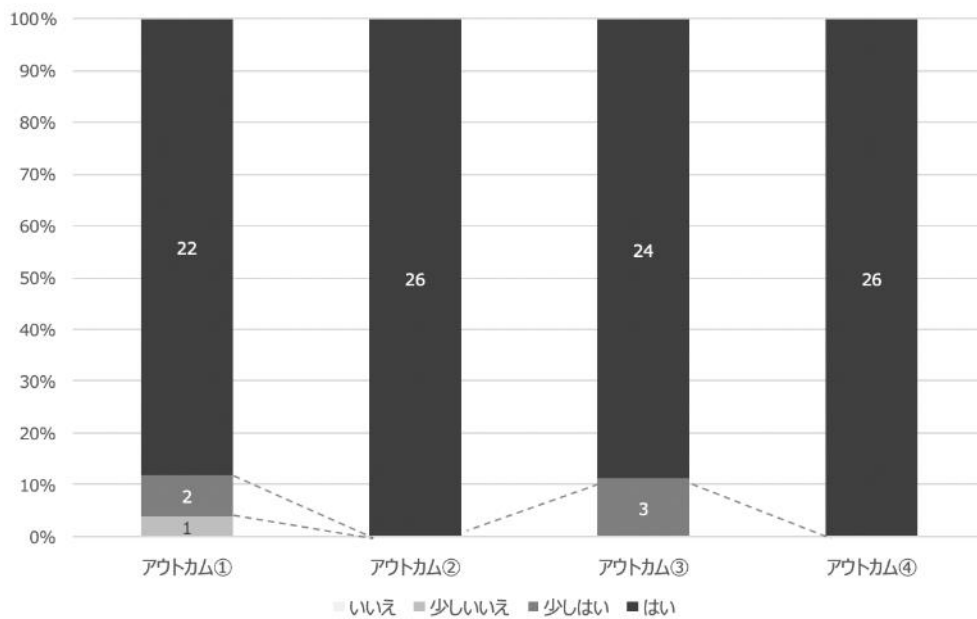
3.8.5.2. 初期アウトカム測定結果

図表 3-113、図表 3-114 に、初期アウトカムの 4 項目（①言いたいことを日本語で表現できる、②いつもの日本語の勉強よりも楽しむ、③安心して参加する、④普段会わない日本人に関心をもつ）の測定結果を示す。図表 3-113 が国際交流協会スタッフによる他者評価で、図表 3-114 がワークショップ参加者による自己評価である（ワークショップ参加者による自己評価は、第 1 回ワークショップは「はい」と「いいえ」の 2 択であったが、回答のほとんどが「はい」だったため、第 2 回ワークショップ以降はその間の選択肢も作って 4 択とした）。「普段の日本語学習よりも楽しめた割合」、「先生（劇団）のことが好きな割合」はほぼ 100%と、全体的に非常に良好な結果であった。

図表 3-113 初期アウトカム測定結果（スタッフによる他者評価、N=76 人）



図表 3-114 初期アウトカム測定結果（ワークショップ参加者自己評価、N=76 人）



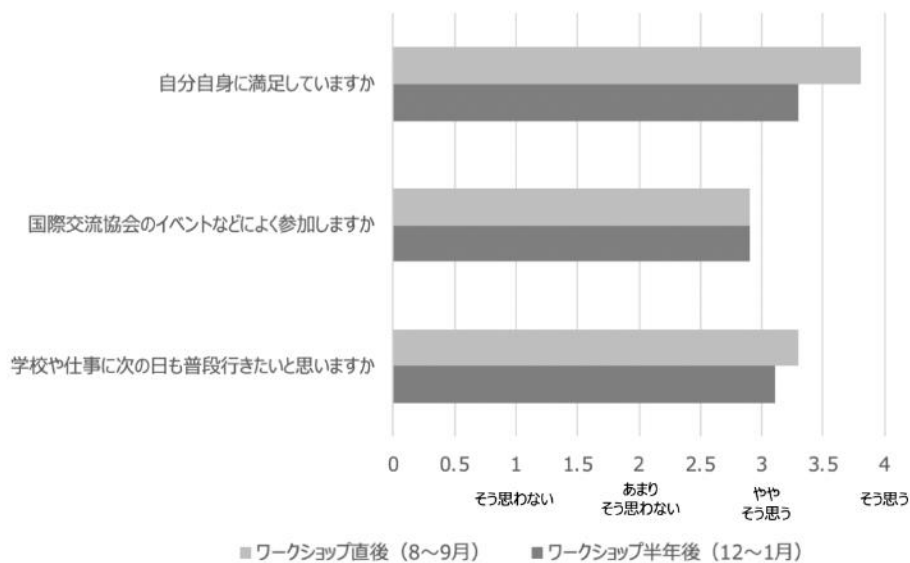
3.8.5.3. 中間アウトカム測定結果

図表 3-115、図表 3-116 に、中間アウトカム測定結果を示す。各ワークショップ終了後（8～9 月）と約半年後（12～1 月）に、中間アウトカムの測定を行った。結果は、「今住んでいる場所で、なんでも話せる友達が何人いますか」、「日本人でなんでも話せる友達が何人いますか」の 2 項目で、それぞれ 3.1 人→9.6 人、3.3 人→4.1 人全て向上しており、「ワークショップで出会った人と今も話すことができますか（それは何人ですか）」の設問には平均 2.7 人という回答であった。本ワークショップが対象者にとって人とのつながりをもち、コミュニティに参加する機会となっていることがわかる。一方で、No.2「学校や仕事に次の日も行きたいと思うか」、

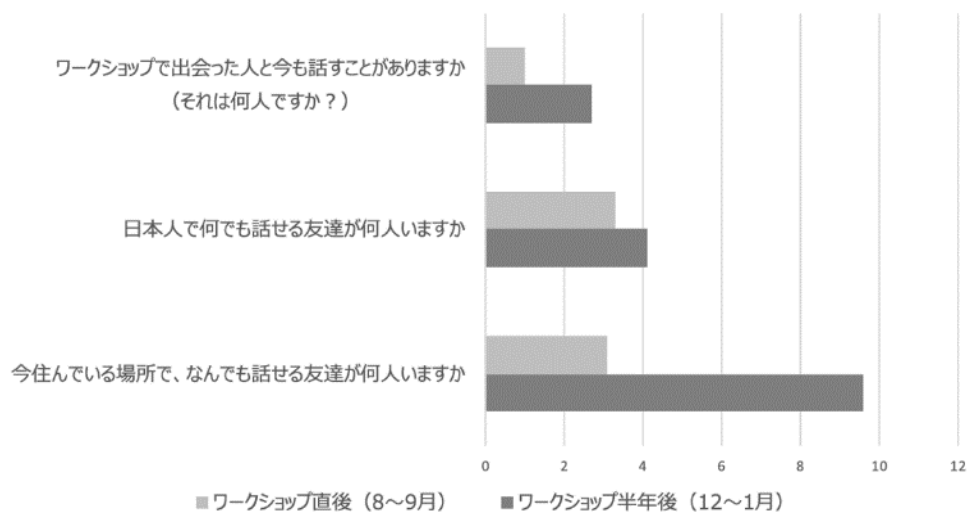
No.5「自分自身に満足していますか」の設問への回答は、若干低下が見られた。No.4「国際交流協会のイベントなどによく参加しますか」の設問については、不変であった。本ワークショップは単発のものであり、彼らの変化（中間アウトカム）とワークショップを直接結びつけるわけにはいかないが、No.3「ワークショップで出会った人と今も話すことがありますか（それは何人ですか？）」の設問で、本ワークショップによってつながった割合がわかる。尚、No.5 で測定を行なった自己肯定感についてはもともと高い可能性あり、ワークショップ半年後の調査で低く出た理由は不明である。

また、図表 3-116 では一方で、「今住んでいる場所で、なんでも話せる友達が何人いますか」、「日本人で何でも話せる友達が何人いますか」の質問に対して、ワークショップ半年後の調査で「たくさん」、「いっぱい」と人数で答えていない人がいるが、ワークショップ直後の結果（それぞれ 10 人、20 人）と同一として平均値を算出したため、数値には留意が必要である。

図表 3-115 中間アウトカム測定結果① (N=9)



図表 3-116 中間アウトカム測定結果② (N=9)

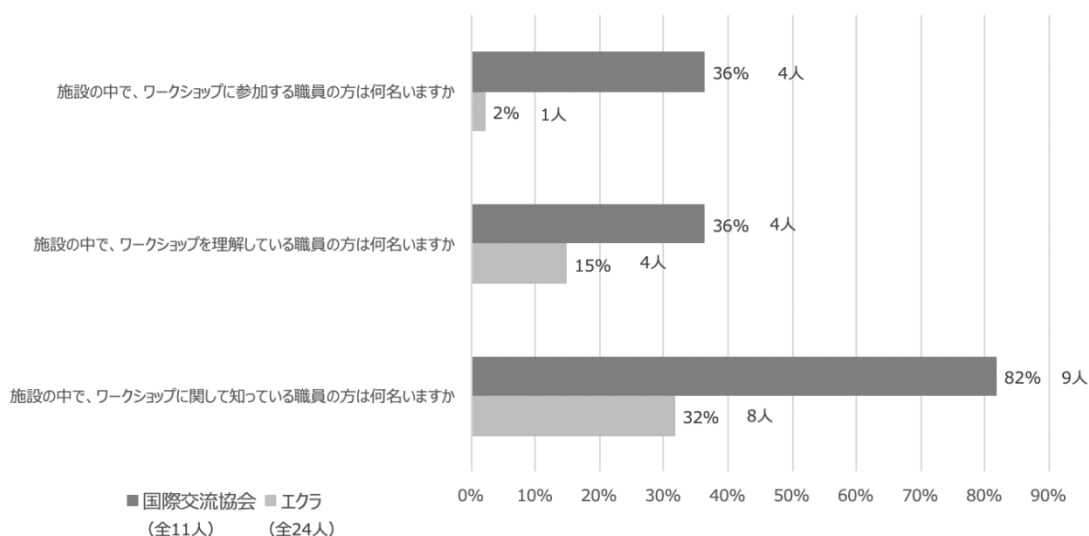


3.8.5.4. 協働力の調査結果

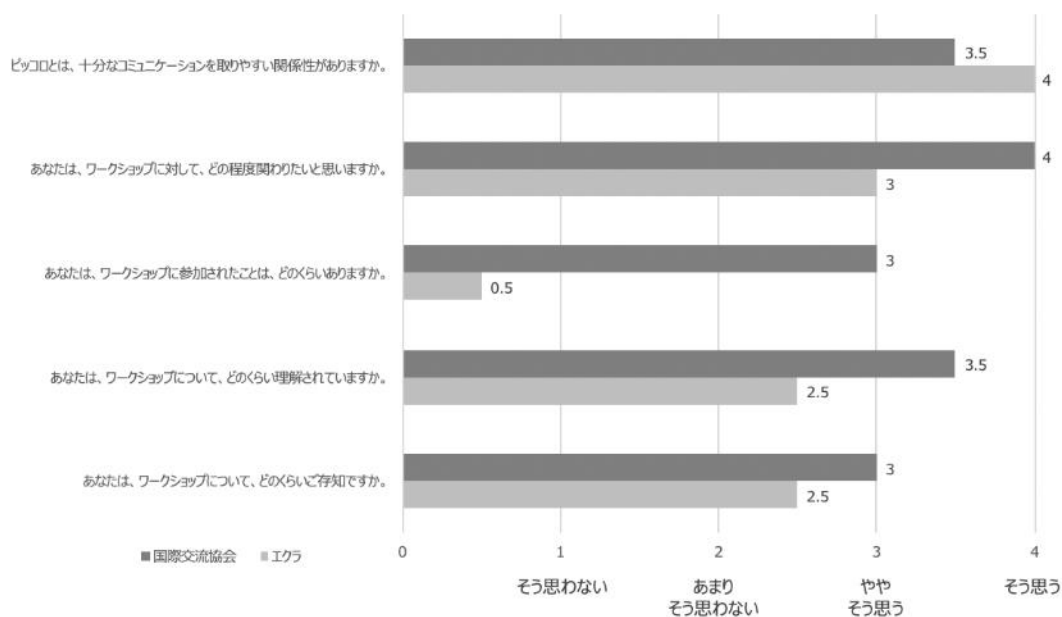
図表 3-11 に示した協働体制を問う指標に関して、複数の項目を定量的に測定した。結果を図表 3-117、図表 3-118、図表 3-119 に示す。その結果、国際交流協会では 8 割以上がワークショップについて知っている、4 割近くがワークショップを理解している、参加しているとの結果であった。また、ピッコロ劇団とのコミュニケーションや関わりの希望について肯定的な回答であった。一方、ピッコロ劇団からの回答では、各ワークショップについて相談・議論ができたか、コミュニケーションがとりやすかったか、協働先の熱意は充分であったかという設問に対しては、非常に肯定的な回答が得られた。

以上の結果より、外国人対象プログラムにおいては、ピッコロ劇団と国際交流協会、エクラの間で十分な協働体制が取れていたことが示唆された。

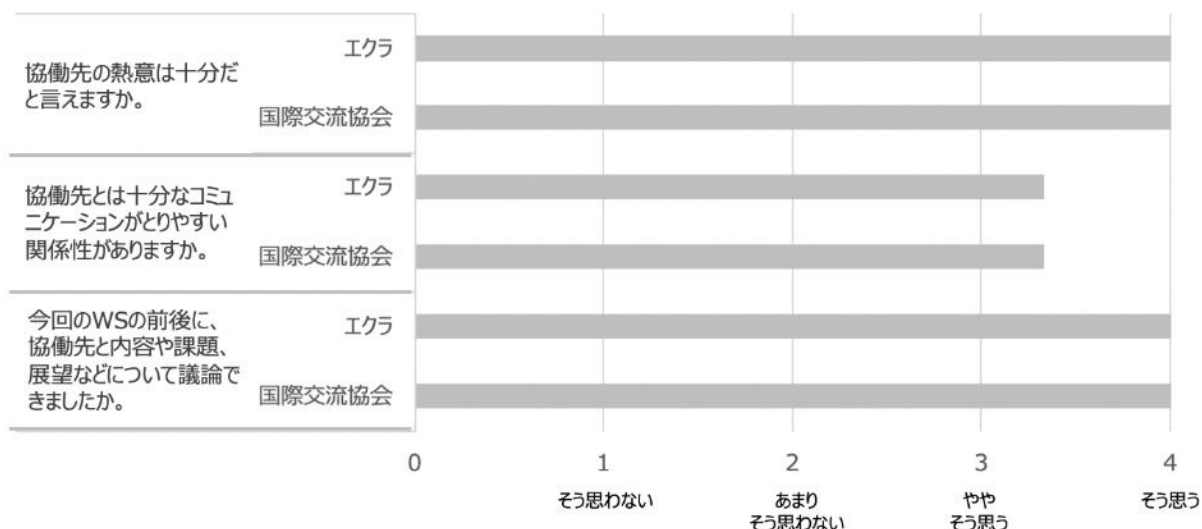
図表 3-117 外国人対象プログラムの協働体制に関するアンケート結果① (国際交流協会の平均値 N=2、エクラの平均値 N=2)



図表 3-118 外国人対象プログラムの協働体制に関するアンケート結果② (国際交流協会の平均値 N=2、エクラの平均値 N=2)



図表 3-119 外国人対象プログラムの協働体制に関するアンケート結果③（ピッコロによる回答 N=3）



3.8.6. まとめと今後の展望

3.8.6.1. 自己肯定感の向上と演劇ワークショップの価値を認識した割合

日本劇団協議会があらかじめ設定した項目と目標値に対して、以下のような結果となった。自己肯定感の指標については概ね変化していないか、下がっているかであるが、ワークショップ直後の調査では「自分自身に満足していますか」の設問に、9人中7人が「そう思う」と答えており、自己肯定感はもともと高かったので参考程度で良いであろう。

図表 3-120 2つの指標の結果

No.	内容	目標値	実績値
1	コミュニケーションワークショップ実施前後で、ワークショップ参加者の自己肯定感が高まった割合	50%	0% (アウトカム測定アンケート結果より)
2	本事業の協力団体が、演劇的手法によるワークショップの価値を認識した割合	70%	100%

3.8.6.2. 評価の総括

また、以下の5つの観点で、評価者による総括を行った。結果を図表 3-121 に示す。

図表 3-121 総括の結果

No.	評価の視点	評価結果
1	課題分析の妥当性（ニーズ）	A：十分に可能性がある
2	内容の妥当性（セオリー）	B：ある程度可能性がある
3	実施の適切性・十分性（プロセス）	A：十分に可能性がある
4	効果（アウトカム）	B：ある程度可能性がある
5	効率性	B：ある程度可能性がある

1：課題分析の妥当性（ニーズ）

本ワークショップは、日頃から小野市在住の外国人を支援している国際交流協会が参加者の個別の事情を細かく把握していて、それを丁寧に劇団側に共有したことによって成功したと言えるであろう。例えば、参加者の出身国、宗教、日本語レベルの基礎情報のみならず、個別に配慮が必要な情報なども事前に細かく劇団とエクラに共有して、ワークショップ当日も事前のスタッフミーティングを設けることで、演劇ワークショップの内容やレベルの調整など、当日の運営に活かすことができた。大目的である「日本人と外国人がいきいきと共生する地域社会の実現をめざす」に向けて、より本質的な課題解決を行うのであれば、地域コミュニティ側の調査も必要となってくるであろうが、今回は対象の外国人の方達にはじめて演劇ワークショップのイベントに参加して楽しんでもらう、地域社会に溶け込む一歩目として、ニーズの把握は「A：十分に可能性がある」として良いだろう。

2：内容の妥当性（セオリー）

本ワークショップのセオリー設計は、最終アウトカム「日本の生活における自己肯定感の回復・向上」のために、「地域のことを好きになる」、「日本語でのコミュニケーション能力の向上」などとし、そこに至る道筋として中間アウトカム、初期アウトカムを整理した。特に学校や職場に馴染めない外国人が多いことから、初期アウトカム「場に安心する」、「日本語で表現することに勇気を持つ」、「普段の生活では出会わない大人に出会い、関心を持つ」などの項目を見ることとした。振り返りミーティングでのエクラと国際交流協会のコメントとして、「出来栄としては100点満点。さらにもっと違うこともできるのではないかと思う」、「単発イベントはあるけど、継続的なイベントはない。文化的なことはあるが、活動的なイベントはない。このワークショップは参加者みんなが主役になれる」との意見が出ていた。

また地域に馴染めない外国人の子どもも本事業の対象者として考えていたことから、保護者も含めたセオリー設計とした。開催当日は国際交流協会の日本語教室の先生も見学に来て、もっと遊びを取り入れるヒントとなったようだ。今後は、ロジックモデルの範囲を地域の関係者にも広げて考えるとよいのかもしれない。

一方、小野市は県内でも外国人が多く在住している地域のひとつだが、本ワークショップに来てくれる人は、そのうちのごくわずかである。このことを踏まえると、単発で実施することが良いのか、連続講座として実施することが良いのか、日本人も参加者に含めた方がよいのか、いかに敷居を下げて効果を上げるかといった視点でセオリーを見直すことも必要であろう。これらを勘案して、結果は「B：ある程度可能性がある」とした。

3：実施の適切性・十分性（プロセス）

劇団によると、演劇ワークショップでは予定していた内容まで辿り着かないことが多かったという。それでも、客観的に見て「A：十分に可能性がある」と判断した。当日は参加者をあたたかく迎える運営側の雰囲気づくりも素晴らしく、国際交流協会、エクラ、ピッコロ劇団の3者の連携体制がよく取れて運営されていたと感じている。

募集告知の面では、参加時間の調整（自転車に来る人が多いため、あまり遅い時間は好ましくない）や、参加者を募る際にチラシを対象者にわかりやすいもの（ひらがな表記や、参加費が無料であることをしっかりと明記）に仕上げたり、演劇ワークショップの映像を撮影して動画編集したものをSNS上で拡散したり、さらに来てもらいたい外国人の方には個別に連絡をとるなど、国際交流協会が尽力された。その成果もあって、第1回ワークショップ14人の参加者に対して、第2回ワークショップは35人参加に大幅に増加した。またこの機会に、国際交流協会としてどうしても来てもらいたかった人たちに声がけをすることができたそうで、例えば「心配していたNくんも参加してくれて良かった。はじめベンチに座っていた。途中で呼びにいて入ってもらった。次にも張り切って声がけできる」などの振り返りコメントが挙がった。参加者数が多かったのは、しっかりと対象者である地域の外国人のことを把握して、彼らに届きやすい手段で情報提供したためであると言えるであろう。

劇団側からは、「演劇を体験してもらって日本語の勉強になるのかとか、童話をしなきゃとか中身の積み重ねばかりを考えていたが、そうじゃないところが大事だと感じた」、「前回からの積み上げで考えたいが、（はじめて参加する人もいるため）すぐゆるくやっている。本来であれば人数が少ない方が一人ひとり体験できるが、今回の

目的からすればウエルカムが大事。ゆるさがいい」と、本ワークショップの運営の姿勢に関する発言があった。また、象徴的な広くて綺麗な施設があったことも、本ワークショップの成功要因のひとつであろう。振り返り際には、「県内各地でやりたいが、こんな立派な施設をもっているところはあまりない」というコメントも挙がっていた。

4：効果（アウトカム）

本ワークショップを通して生まれた外国人の変化は、初期アウトカムで非常に望ましい変化がみとめられた。特に対象者である外国人の方々が劇団講師に興味を持ったこと、楽しい時間を過ごせたことは大きいと思う。中間アウトカム測定の結果、「今住んでいる場所で、なんでも話せる友達が何人いますか」が半年後に 3.1 人→9.6 人、「日本人で何でも話せる友達が何人いますか」が 3.3 人→4.1 人と向上しており、「ワークショップで出会った人と今も話すことがありますか（それは何人ですか？）」の設問には平均 2.7 人という結果であり、本ワークショップが人とのつながりをもたらし、コミュニティに参加する機会となっていることがわかる。日本で、外国人の方達が地域コミュニティでの人とのつながりができたことの収穫は大きく、これからもみんなで仲良くして欲しい」と運営側からコメントがあった。さらに言えば、本ワークショップが参加者にとって価値を感じてもらえた割合は、リピーターの割合や口コミなどでどれだけ人を連れて来たのかも見ることで把握できるであろう。さらに「日本語教室に参加しなかった人がワークショップに参加してくれた」、「ワークショップ参加者が日本語教室に通うようになった」などの変化が認められ、本プログラムが高い成果を上げていることがわかる。

エクラ・国際交流協会・劇団の 3 者 + 調査員または日本劇団協議会で行なった事前ミーティングで、国際交流協会がどうしても来てもらいたいと話していた C くん（10 代、フィリピン国籍）が来てくれたことは成果である。彼は母国ではとても優秀であったが、日本に引っ越してきてからは日本語ができないことから引きこもりになってしまっていた。以前は週 2 回日本語教室に通っていたが、現在は完全なひきこもりになってしまっており、何か話すと真っ先に「ごめんなさい」という言葉が出てくるようになっていたとのこと。演劇ワークショップがあることで国際交流協会側も誘うことができ、彼は 3 回中 2 回参加してくれた。地域には、他にもこのような子どもが少なからずいるという。今回は単発のワークショップであり、本当に望ましい変化を見るのは限界があるが、上記を踏まえて「B：ある程度可能性がある」が妥当と考える。

5：効率性

本事業は、どれだけ効率的に、継続的に実施していける可能性があるか。参加者の中には、「こんな楽しいことをやってくれるなら、みんなに広めたい」と感想を述べる方もいた。参加者の満足度の高さと、参加者募集や外国人コミュニティへの波及効果という点で、今後の継続可能性を感じる。今後、エクラという地域資源（文化施設）を活用して、地域在住の外国人コミュニティに向けて劇団のような他者と協力して魅力的な参加型のイベントを行うことで、地域の中での知り合いが増えたり、日本語を使う機会が増えるであろう。実施体制の面では、特に劇団と国際交流協会・エクラが地元同士で出会えたことは大きいと考える。国際交流協会からは、「日本語教室という母体があって、そこでの活動は続けていくので、機会があれば土台はあるので色々とお話しさせていただく可能性はある」といったコメントがあげられた。その他、ワークショップには市議員の方も見学に見えていたようで、「珍しい催しには来てくれて、SNS に投稿してくれるので声をかけてみた」との話が挙がった。

今回は 1 回完結型のワークショップであったが、外国人がコミュニティに参加する良いきっかけになったことは間違いない。ここで同じような境遇の外国人と出会うことでの良い効果や、学校や職場以外の大人（日本人）と出会うことによる世界の広がりもあるだろう。本ワークショップ自体がロジックモデルに描いた中長期的なアウトカムに直結するというよりは、これをきっかけに日本人コミュニティ参加への一歩が踏み出せるということだろう。

劇団講師からは、「僅か 3 回でも、隔たりを感じずに付き合っていけることを学べた」などのコメントが挙がった。この気づきは今後継続していく際の財産となるであろう。より参加者を拡大して長期的な関わりを志向するならば、今回の協働体制を活かせるような継続的なファンディングの獲得が必要であろう。これらを踏まえて「B：ある程度可能性がある」が妥当と考える。

総合的にみて、本プログラムは高い成果を上げており、参加者のニーズを的確に把握した上でプログラムが実施されていると言える。これは国際交流協会が日頃から対象者をケアしていることが大きな要因であろう。本ワークショップのセオリーについては、小野市在住の外国人のうち、本ワークショップに来てくれた人はそのうちのごくわずかであるため、いかに敷居を下げて効果を上げるかといった視点でセオリーを見直すことも必要であろう。

事業目的「1. 日本語の習得に楽しく取り組んでもらう」、「2. コミュニティづくりの促進」、「3. 地域社会への参加とつなげる」の3点と照らしても、本ワークショップが全て良いきっかけとなっていることが分かる。本ワークショップの成果は3者の強みを活かした協働体制によって適切な運営が行われた賜物であると言える。この協働体制から学べることは大きく、成功要因を分析することで、今後の協働のヒントになると考える。このようなプログラムが継続的に実施され、地域に貢献していくことを期待する。

3.9. 岐阜県立不破高校（岐阜県不破郡垂井町）

3.9.1. 概要、プログラム内容

県立不破高校（以下不破高校）での演劇表現ワークショップは、文学座が平成 26 年度より継続的に実施している。本プログラムは岐阜県立東濃高校でも実施されており、東濃高校での本プログラムは日本劇団協議会が文化庁の平成 28 年度委託事業でまとめた報告書と、平成 29 年度委託事業でまとめた報告書により、長期間によるワークショップの結果が表れていることが実証されている。

図表 3-122 不破高校演劇表現ワークショップの講師、調査員

講師	西川信廣（文学座）
講師アシスタント	高柳絢子、星智也（以上 2 人、文学座）
調査員	鈴木豪、落合千華

図表 3-123 不破高校演劇表現ワークショップの概要

対象者	不破高校 1 年生全員
活動場所	岐阜県立不破高等学校
プログラム目的	演劇的手法を取り入れたワークショップを通し、不破高校 1 年生全員のコミュニケーション能力向上を目指す
プログラム概要	文学座講師と講師アシスタントが新入生に対して「演劇表現ワークショップ」を開催し、コミュニケーション能力向上を目指す。講師 1 人と講師アシスタント 2 人で 1 クラス約 30 人の生徒を担当し、各クラスが合計年 3 回ワークショップを受けるように設計されている。1 回 80 分のワークショップでは、演劇的要素を取り入れたシアターゲームを実施するグループとそれを鑑賞するグループに分け、各グループが複数回シアターゲームを実施。特徴としては、演劇手法を活用したシアターゲームによる「他者を観察して相手に合わせること」、「集中力や他者に意思を伝える表現力」および「素の人柄がわかる」等のコミュニケーション能力向上や関係性の改善効果がある。またシアターゲームの合間に講師が、シアターゲームで必要な要素と社会で生きていくために必要な要素との関係性を説明することも特徴的な点である
実施時期・期間	1 回 80 分のワークショップを年 3 回実施、平成 26 年度以降毎年度同様に実施

演劇表現ワークショップは様々なシアターゲームを用いて実施される。講師は「集中、開放、コミュニケーション、イマジネーションを養うこと」が目的であるとワークショップ冒頭で説明し複数のゲームを実施する。今取り組むべきことに真剣に取り組む「集中」、自分を他者に向けて開くコミュニケーションの態度を意味する「開放」、人に自分の考えや思いを伝えようと努力しそれを受け取る「コミュニケーション」、相手の気持ちや考えていることを想像する「イマジネーション」。それぞれの要素について、各ゲームで丁寧に説明しながらワークショップは進行する。例えば、シアターゲームの一つ「ブラインド・タクシー」では運転手役はペアになるクラスメイトの気持ちを考えて運転することや、タクシー役は運転手の手に集中することが強調される。また、「ジェスチャーゲーム」では自己表現に集中する、相手に自分のジェスチャーを想像させる確に相手に自分の意図を渡すことの重要性が指摘された。

ワークショップ中には、講師が話題となっている有名人や社会的課題を例にあげながら、いかにそれらの要素が今後大切になっていくかを説明する。そして普段の努力の積み重ねの重要性や、相手に伝えることの勇気の大切さも伝えている。

図表 3-124 不破高校演劇表現ワークショップのシアターゲームの例

ゲーム名	実施内容
シェル・ゲーム	3人1組でグループをつくる。2人が貝の殻で、1人は中身の役になる。講師が「ハイ」と声で合図をすると3人は貝の形で部屋の中をゆっくり動き回る。「チェンジ」と合図すると中身役の1人だけが外に出て、他の2人の貝殻に入る。「ボーン」と合図すると、貝をすべて解体し全く新しいメンバーで貝をつくる。これらを、無作為に声を出さずに行う
ブラインド・タクシー	2人1組になり前後に立つ。前の人がタクシー、後ろの人が運転手になる。運転手がタクシーの背中を片手で軽く押すと前進し、右肩に手を置くと右折、左肩に手を置くと左折、両肩に手を置くと停止というルールで操作する。はじめはタクシー役の前の方は目を開けたまま練習するが、2回目からはタクシー役の方は目をつむり運転手の操作のみに従って動かなくてはならない
ジェスチャーゲーム	クラスを3つのグループに分け1グループずつ行う。1グループは1列になり、全員座って目をつむる。はじめにお題が劇団員の方から伝えられ、そのお題の動きをジェスチャーする。次の生徒がそれを見て、その次の生徒にむけてジェスチャーし、それを繰り返して最後の生徒が何のジェスチャーかを当てる

3.9.2. 背景と目的

不破高校は平成26年度より文学座の提供する演劇表現ワークショップをカリキュラムに導入した。その目的は不破高校が抱える三つの課題を解決することにある。

① 学校の定員割れ

不破高校はかつての生徒の態度やマナーのため学校周辺からの評判が芳しくなく、不破高校に自分の子どもを通わせることに抵抗を覚える保護者もいた。こうした課題の原因の一つとして生徒のコミュニケーション不足があげられる。学友や近隣住民と適切なコミュニケーションをとりながら学校—生徒—地域という関係性を構築する必要があると考えられている。

② 中退者数の多さ

不破高校は中学校時代から不登校だった生徒、特に目的もなく高校に進学している生徒に中退者数が多いと考えている。また、学校が生徒にとっての居場所になりきれていないことも懸念している。これも生徒同士のコミュニケーション不足がその原因である可能性が考えられる。

③ 基礎学力の不足

不破高校は生徒の基礎学力が不足していると考えており、この底上げも重要視している。基礎学力の向上のためにはクラスメイトや教員への質問、意見の発表等様々な側面でコミュニケーション能力の開発が重要と認識している。

文学座が提供する演劇表現ワークショップはこれらの課題を解決する一助になることを期待されている。第一に、演劇表現ワークショップを通じたコミュニケーション能力開発である。不破高校では上述の課題はコミュニケーション能力不足により発生していると考えている。演劇表現ワークショップを通じ生徒のコミュニケーション能力を向上させ課題の解決を期待している。第二に、クラスづくりへの貢献である。演劇表現ワークショップは1年生のクラ

ス単位で行われるため、生徒が普段コミュニケーションをとらないクラスメイトとの交流の場にもなる。生徒同士のクラス内交流の幅が広がりクラスづくりに貢献することが期待されている⁸。

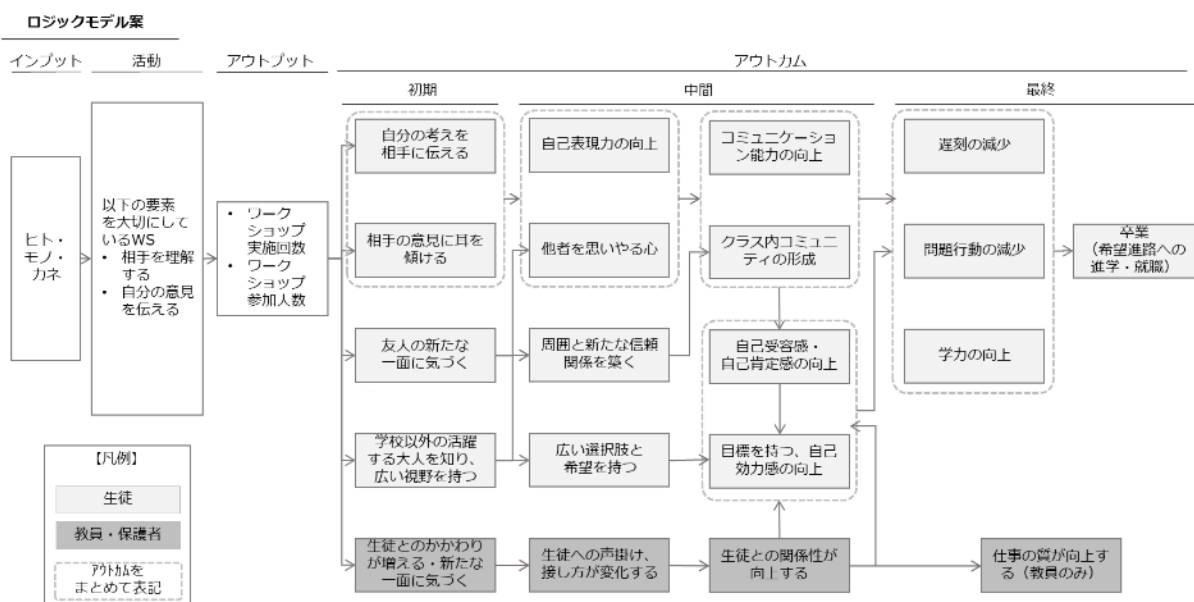
3.9.3. ロジックモデル

演劇表現ワークショップでは生徒と教師ともに参加し影響を受けることを想定している。生徒は演劇表現ワークショップ内でクラスメイトと意見や考えの交換を行いながらクラスメイトの新たな一面に気づく。これを通じ自己表現力や思いやり、信頼関係の構築が可能となりコミュニケーション能力やクラス内コミュニティの形成、そしてコミュニケーションによる自己受容感と自己肯定感の向上につながる。これにより学校が居場所化し遅刻の減少や問題行動の減少、ひいては学力の向上が期待される。それと同時に演劇という非日常体験と演劇表現ワークショップの講師による説明から生徒が広い視野、将来への選択肢そして希望を持つことも期待され、それは自己効力感の向上に帰結することも期待される。

一方、教員の参加も想定している。演劇表現ワークショップ内での生徒とのコミュニケーションにより生徒の新たな関わりに気づき、それに応じて生徒への接し方を変え生徒との関係性が向上することも期待される。それは教師の仕事の質が向上することに繋がる。こうした生徒と教師の期待される変化を図示したものが下図のロジックモデルである。

図表 3-125 ロジックモデル

対象事業	不破高校の1年生全体に向けた演劇表現ワークショップ
関係者	①不破高校1年生全体 ②教員・保護者、③劇団の俳優（文学座）
目的	生徒のコミュニケーション能力向上、学校内コミュニティの形成（居場所づくり）、入学者の増加



3.9.4. 指標と評価設問

ロジックモデルの各アウトカムがどの程度実現しているかという視点から評価を実施した。生徒および教員にご協力いただき、アンケート調査、インタビュー、そして社会的投資収益率（Social Return on Investment,

⁸ 不破高校教頭増田氏ヒアリング

以下 SROI) の算出を実施した。アンケート調査では、生徒と教員に普段の生活に関するアンケートとワークショップに関するアンケートをそれぞれ実施した。各設問はロジックモデルのアウトカムに紐づいた形で設計されている。

図表 3-126 調査概要

評価手法	対象	実施時期	概要
現地訪問	生徒 教員	7月 9月	演劇表現ワークショップの実施日に合わせて現地訪問、不破高校と演劇表現ワークショップの観察
インタビュー	教員	7月	不破高校増田泰志教頭へのインタビュー調査(30分程度)
インタビュー	生徒	9月	不破高校生徒2人へのインタビュー調査(各10分程度)
アンケート調査	1年生 教員	9月	学校生活の様子と演劇ワークショップの感想を調査票調査として実施。調査設計の都合上、今年度3回目のワークショップ後に実施
SROI	不破高校	—	不破高校提供資料と2次データを用いてSROIを算出

なお、本来であれば演劇表現ワークショップ後のアンケートだけではなく、事前と事後について比較するために演劇表現ワークショップ前後両方のアンケート実施が望ましい。しかし、本プログラムでは(ワークショップ実施の時期と調査開始時の兼ね合いなどのため)、ワークショップ後および現在の普段の様子アンケートのみとなった。よって両アンケートとも演劇表現ワークショップ後の状態を示し、ワークショップ実施前後の比較は困難となった。ロジックモデルと対応するアンケート内の評価設問と指標を図表 3-127 に示す。

図表 3-127 初期アウトカムと評価設問

アウトカム	アウトカム項目	評価設問	回答対象者
初期 アウトカム	自分の考えを相手に伝える	友だちに率直に意見や考えを言えたか	生徒
	相手の意見に耳を傾ける	友だちの自分と違う考えや意見が面白いと思ったか	生徒
	友人の新たな一面に気づく	クラスメイトの新しい部分に気づいたか	生徒
	学校以外の活躍する大人を知り広い視野を持つ	新しい世界を知り楽しかったか	生徒
	生徒との接点・関わりが増える、新たな一面に気づく	<ul style="list-style-type: none"> 普段よりご自身(教員)と生徒との接触が増えたか 生徒の新しい部分に気づいたか 	教員

図表 3-128 中間アウトカムと評価設問

アウトカム	アウトカム項目	評価設問	回答対象者
中間 アウトカム	自己表現能力の向上	友だちに意見を伝えることは恥ずかしい	生徒
	他者を思いやる心	困っている友だちは助ける	生徒
	周囲と新たな信頼関係を築く	困ったときに相談できる友だちがいる	生徒
	広い選択肢と希望を持つ	いろいろなことに興味があり挑戦したい	生徒
	コミュニケーション能力の向上	生徒はコミュニケーション能力が高いと思う	教員
	クラス内コミュニティの形成	クラスの居心地は良い	生徒
	自己受容感覚・自己肯定感の向上	自分なりの個性を大切にしている	生徒
	目標を持つ、自己効力感の向上	目標に向けて頑張っている	生徒
	生徒への声掛け、接し方が変化する	自分（教員）は多様な生徒の状況に応じて声掛けをしている	教員
	生徒との関係が向上する	よく先生と話をする	生徒

図表 3-129 最終アウトカムと評価設問

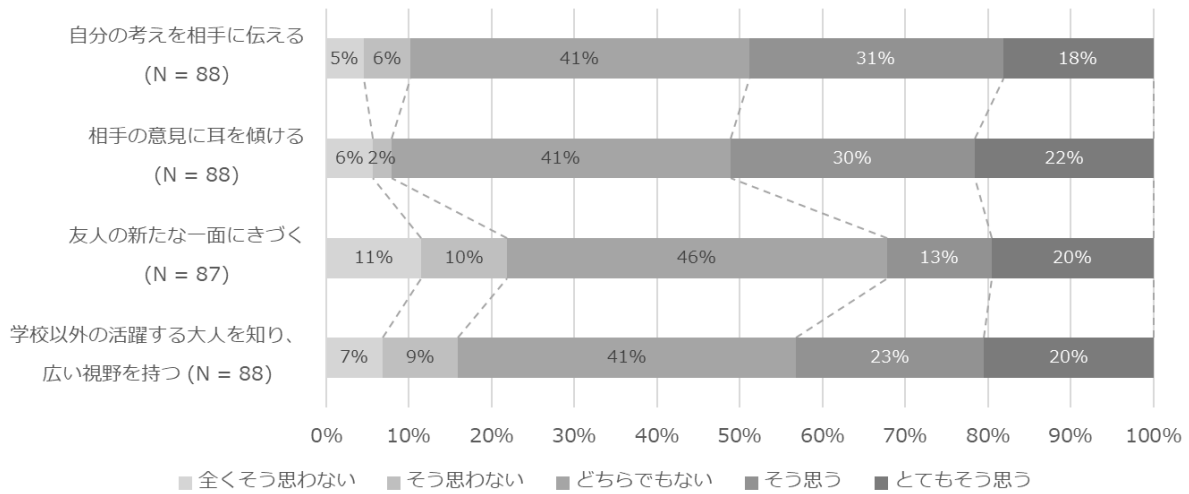
アウトカム	アウトカム項目	評価設問・指標	回答対象者
最終 アウトカム	学力の向上	<ul style="list-style-type: none"> 学校の勉強に励んでいる 生徒は学校の勉強に励んでいる 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒 教員
	遅刻の減少	遅刻数（不破高校提供資料の利用）	—
	問題行動の減少	問題行動数（不破高校提供資料の利用）	—
	卒業（希望進路への進学・就職）	中退数（不破高校提供資料の利用）	—

3.9.5. 測定と分析結果

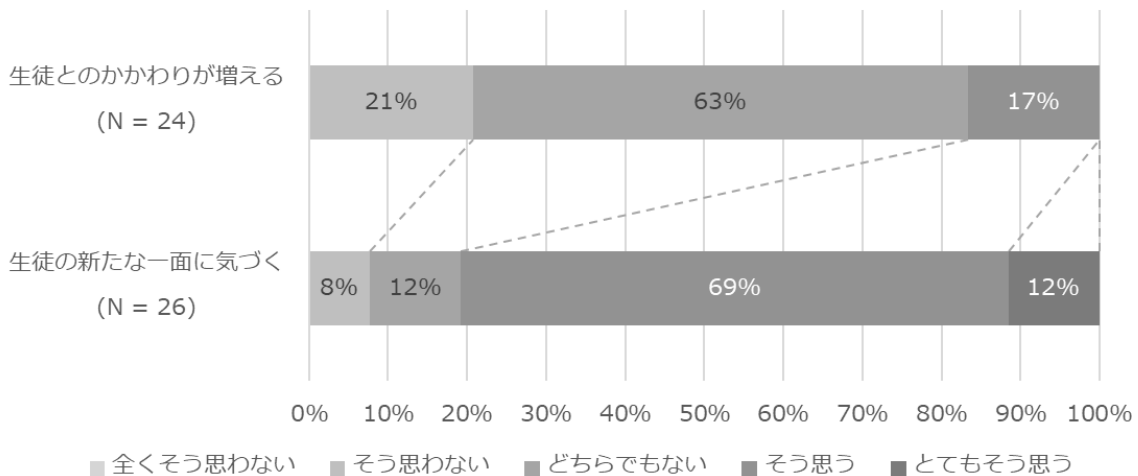
はじめにアンケート調査から生徒と教員の初期アウトカムについての結果をまとめる。生徒への初期アウトカムのうち「自分の考えを相手に伝える」と「相手の意見に耳を傾ける」はともに50%程度の生徒が肯定的な回答をしており、否定的な意見はともにおよそ10%であった。一方で、否定的な回答はおよそ20%と少なかったものの「友人の新たな一面に気づく」に対し肯定的に回答した生徒は約30%であった。アンケート調査の実施が年に3回行われる演劇表現ワークショップの3回目（9月）であることを考慮に入れるとこの数字は特別低い数字とは考えづらい。同様に「学校以外の活躍する大人を知り、広い視野を持つ」への肯定的回答も約40%であったものの、こちらも3回目ということもあり生徒が既に演劇という世界で活躍している大人を知っていることを考慮すると、必ずしも低い数値ではない。

教員への初期アウトカムでは、「生徒とのかかわりが増える」について肯定的回答はわずか17%であった。この点について、調査員の現地訪問および観察ではすべての教員が参加しているわけではなく生徒が取り組んでいるのを観察している教員が多いことがわかっている。この点の影響も考えられる。一方で、約80%もの教員が「生徒の新たな一面に気づく」について肯定的に回答しており、教員は観察を通じて生徒の新しい部分を見出していることが推察される。

図表 3-130 生徒への初期アウトカム



図表 3-131 教員への初期アウトカム

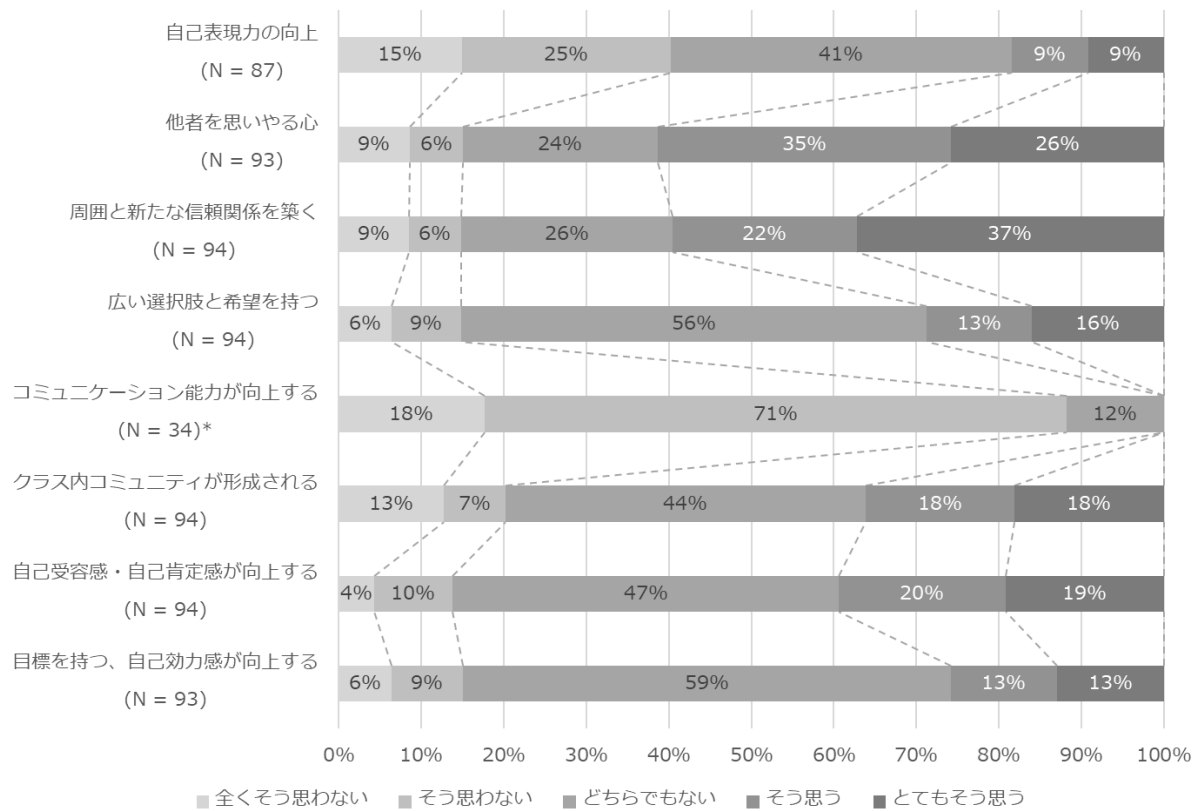


次に生徒と教員の間アウटकムについてのアンケート結果を考察する。生徒への中間アウटकムでは、「他者を思いやる心」、「周囲と新たな信頼関係を築く」について約 60%の生徒が肯定的な意見を示した。次いでおよそ 40%が「クラス内コミュニティが形成される」、「自己受容感・自己肯定感が向上する」に肯定的に回答を示していた。これらの要素は互いに関連し合っており他者を思いやる心とそれに基づく他者関係の拡大とその充実化が垣間見える。しかしながら興味深いことに「自己表現力の向上」について肯定的な回答は 18%に過ぎず、教員から見た生徒のコミュニケーション能力によって示される「コミュニケーション能力が向上する」に至っては誰も肯定的に回答しなかった。ここで表現を受けることの充実化の一方で表現を伝えることの難しさが推察される。「広い選択肢と希望を持つ」、「目標を持つ、自己効力感が向上する」について肯定的に回答した生徒はともに 30%に満たない結果となった。

一方で教員への中間アウटकムとして「生徒への声掛け、接し方が変化する」に肯定的に回答した教員は 65%にのぼった。教員の努力によることが大きいのが、演劇表現ワークショップで生徒の新たな一面に気づきそれに応じて教員が接し方を変えていることも推察される。一方で、生徒から見た教員との関係性から見る「生徒との

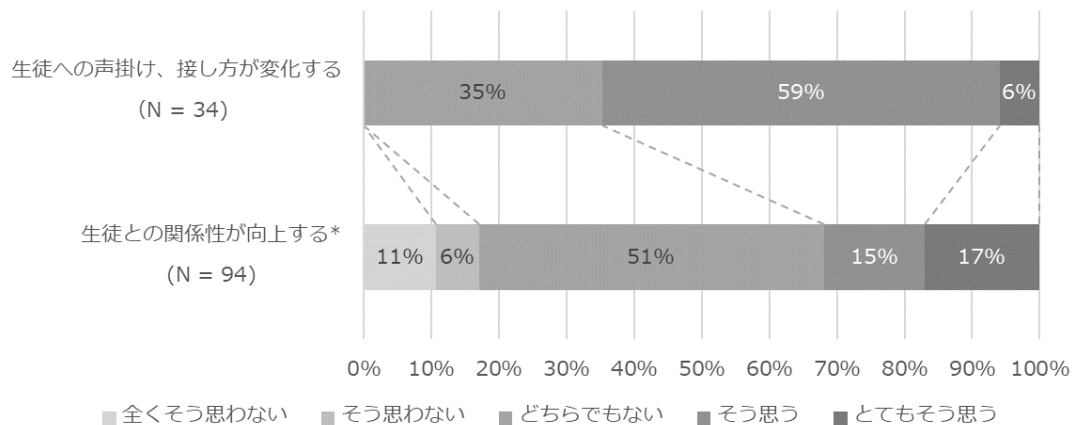
関係性が向上する」の項目では約 30%の生徒のみが肯定的に回答した。ここでも教員は演劇表現ワークショップに参加せず観察を行っていたことが一つの要因として考えられる。

図表 3-132 生徒への中間アウトカム



*教員向けアンケートの項目を利用したため回答数が少ない

図表 3-133 教員への中間アウトカム

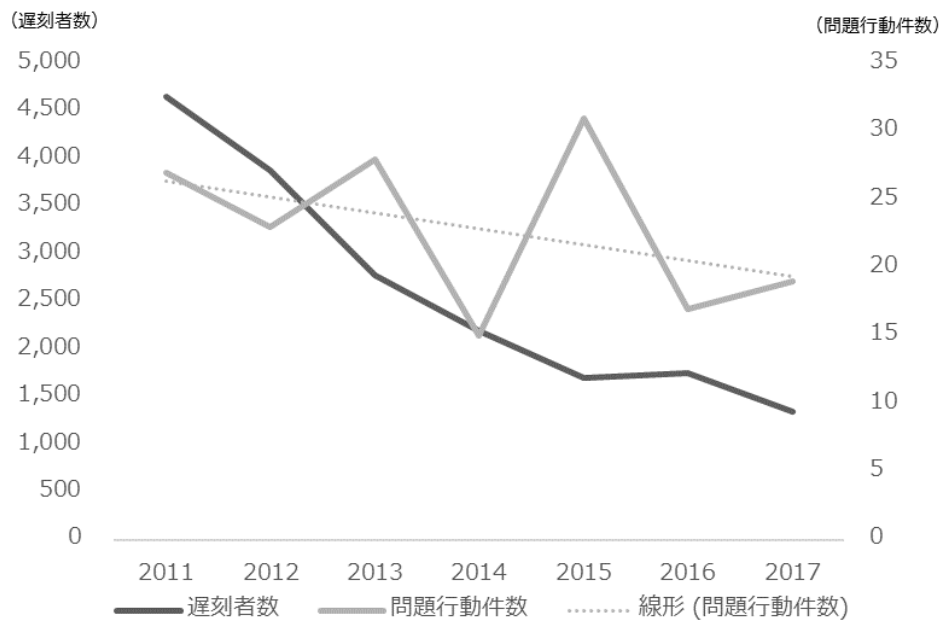


*生徒向けアンケートの項目を利用したため回答数が多い

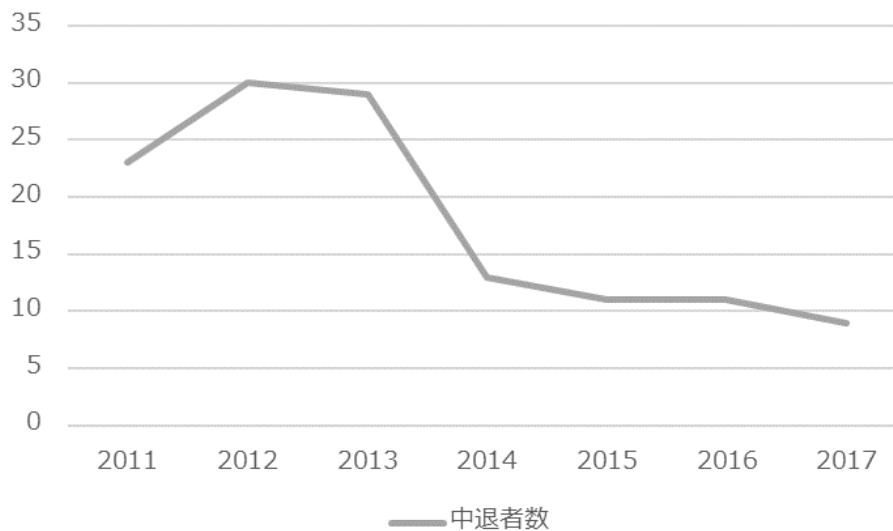
次に最終アウトカムを分析する。最終アウトカムは生徒について「遅刻の減少」、「問題行動の減少」、「学力の向上」、そして「卒業」である。このうち、「学力の向上」以外は過去 7 年の各年度における全学年のデータを不破高校に提供していただいた。それによるといずれの数値も減少傾向にある。生徒の学力では学力そのものに

ついでにデータは取得できなかった。それゆえ参考値として、勉強への日頃の態度を生徒の自己認識と教員からの認識をアンケートで取得した。生徒の自己認識でも肯定的回答は30%に満たず、教員による認識でも否定的な回答が70%に達した。

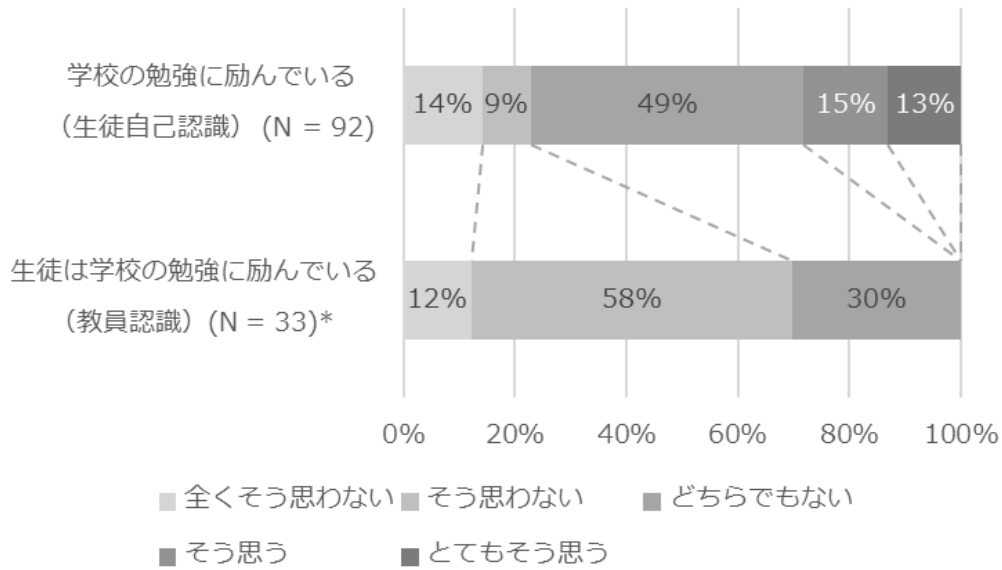
図表 3-134 遅刻者数と問題行動件数の経年変化



図表 3-135 中退者数の経年変化



図表 3-136 生徒の勉強への日頃の態度



*教員向けアンケートの項目を利用したため回答数が少ない

アンケート用紙からロジックモデルの初期アウトカムと中期アウトカム項目の結果を一覧にまとめたものを下図表に示す。1~5段階の評価を-5~5のスケールに変換し（-5：全くそう思わない、-2.5：そう思わない、0：どちらでもない、2.5：そう思う、5：とてもそう思う）、各項目における平均値を算出した。正の数として数値が大きいほど肯定的回答の比重が大きいことを意味する。全体の傾向を通じて多くのアウトカム項目で肯定的意見の割合が多いことがわかる。

一方で、下図表にて灰色で塗られている行の「生徒との接点・関わりが増える」、「自己表現能力の向上」、「コミュニケーション能力の向上」では否定的回答が多いことがわかる。「生徒との接点・関わりが増える」については先に述べた通り教員が演劇表現ワークショップに参加せずに生徒の様子を観察したことによるものだと考えられる。「自己表現能力の向上」では演劇表現ワークショップは普段の会話とは異なる形の表現を行うことから一定の「恥ずかしさ」があると考えられる。このアウトカム項目は「友だちに意見を伝えることは恥ずかしい」という評価設問からとっていることからこうした結果が得られたと考えられる。「コミュニケーション能力の向上」は教員による生徒への評価であることから、その判断基準は教員でありこのような低い結果となったと考えられる。

図表 3-137 初期アウトカム結果一覧

アウトカム種類	アウトカム項目	生徒	教員
初期アウトカム	自分の考えを相手に伝える	1.30	-
	相手の意見に耳を傾ける	1.48	-
	友人の新たな一面に気づく	0.45	-
	学校以外の活躍する大人を知り広い視野を持つ	1.02	-
	生徒との接点・関わりが増える、新たな一面に気づく	-	-0.10, 2.11

図表 3-138 中間アウトカム結果一覧

アウトカム種類	アウトカム項目	生徒	教員
中間アウトカム	自己表現能力の向上	-0.69	-
	他者を思いやる心	1.59	-
	周囲と新たな信頼関係を築く	1.84	-
	広い選択肢と希望を持つ	0.59	-
	コミュニケーション能力の向上	-2.65	-
	クラス内コミュニティの形成	0.53	-
	自己受容感覚・自己肯定感の向上	1.01	-
	目標を持つ、自己効力感の向上	0.43	-
	生徒への声掛け、接し方が変化する	-	1.76
	生徒との関係が向上する	-	0.53

次にワークショップ後に実施したヒアリングの結果を下記にまとめる。生徒たちの演劇表現ワークショップへの受け止め方は様々で自分のコミュニケーション能力向上に貢献はしているものの、他の学校行事や日常の友だちとのやりとりの影響も大きいことがうかがえる。

図表 3-139 生徒①へのインタビュー結果のまとめ

生徒① ⁹	将来的に演劇の仕事をしたいこともあってこのワークショップへの参加に強い意欲があったが、生徒①曰く意欲のある学生は半分程度であり、数ある学校行事の一つという認識があった。しかし実際に参加してみると、意欲が高くない友達も楽しんでいたとも指摘していた。生徒①は演劇表現ワークショップ中のクラスメイトとの協働により相手を知り、協調性を学んだ。まわりとの緊張が緩和されたとも語っており、生徒①の言葉を借りれば、「緊張をほぐすやり方」を学んだ
------------------	---

図表 3-140 生徒②へのインタビュー結果のまとめ

生徒②	生徒②は初回ワークショップの参加を躊躇していたが、3回目には楽しみになっていた。演劇表現ワークショップのゲームで自分を表現することを恥ずかしく感じていたが、ゲームを通じ集中力を高めることができるようになったと指摘した。なかでも第2回ワークショップでの「タコハチゲーム」のときに自分の表現を楽しみと感じられた。生徒②は演劇ワークショップを通じ自己表現と集中力の向上を実感しているが、それは演劇表現ワークショップのためだけではない。学校の球技大会でバレーボールをしているときに、自分のミスを周りの友人が励ましてくれたことが非常に印象に残っており、この経験も自己表現や友達とのコミュニケーションが磨かれる一因にもなっていると指摘した
-----	---

最後に、ロジックモデルをふまえて SROI の算出も行った。SROI の算出について、想定されるアウトカム指標の検討にあたっては、初期および中間アウトカムを踏まえて、最終アウトカムの「遅刻数の減少」「問題行動の減少」および「卒業（中退者数の減少）」におけるインパクトを検討した。その結果、演劇表現ワークショップにおけるインパクトに対する最終アウトカムを貨幣価値換算した SROI の値は、「2.2」となり、「1.0」を上回ることでワ

⁹ 生徒①はもともと不登校であったが、その期間中演劇表現ワークショップには参加していた。そしてそれを契機に復学し現在も学校に通っているという経緯があり、注目に値する。（西川氏ヒアリング）

ークショップの有効性が示された。ただし、この数値には学力の向上や教員の仕事の質の向上が含まれていないことから過大あるいは過小に評価している可能性がある。また、計算に用いた一部の数値についてはデータ取得が困難であったために文化庁委託事業平成 29 年度戦略的芸術文化創造推進事業『演劇による社会的包摂プロジェクト調査研究報告書』（以下、昨年度データ）から参考値として数値を利用しており、遅刻数、問題行動数、中退も全学年のもののみ取得可能であったためそれぞれ 3 で割ったうえで計算に利用している。

図表 3-141 各種件数の推移 ※ハイライト部分を SROI 算出に活用

年度	新入生数	全学年における各種件数		
		遅刻	問題行動	中退
平成 23 年	113	4,650	27	23
平成 24 年	120	3,878	23	30
平成 25 年	108	2,777	28	29
平成 26 年	99	2,194	15	13
平成 27 年	109	1,700	31	11
平成 28 年	109	1,756	17	11
平成 29 年	120	1,345	19	9

図表 3-142 インプット

項目	講師謝金	諸経費	施設利用料
算出方法	2 日間×3 回×3 人に対する謝金等（個人により単価は異なるが合計の平均値が毎年度同程度）	2 日間×3 回×3 人に対する旅費等（2012 年度から平成 27 年度の旅費等の中から最も高い金額）	—（学校内での実施のため、算入しない）
金額	900,000 円*	240,000 円*	0 円
その他補足	教員についてはワークショップの参加が任意であり、授業内の実施のため除外		

*昨年度データのからの参考値

図表 3-143 平成 24 年度～平成 25 年度の平均値と平成 28 年度～平成 29 年度の平均値の差分

	一人当たり遅刻数	一人当たり問題行動数	中退件数の割合 (%)
平成 24 年度～平成 25 年度の平均値	9.73*	0.07*	8.63*
平成 28 年度～平成 29 年度の平均値	4.51*	0.05*	2.91*
差分	5.22	0.02	5.71

*各年度の全学年合計数値のみデータ利用が可能のためそれぞれの数値を 3 で割った上で計算

図表 3-144 不破高校演劇表現ワークショップの SROI 算出のロジック

アウトカム	情報源	変化量	継続期間 (年)	財務変数
遅刻の減少	一人当たりの 平均遅刻数	5.22	2	複数回（10 回）遅刻をした生徒に対する教員の対応時間*
問題行動の減少	一人当たりの 平均問題行動数	0.02	2	問題行動を起こした生徒に対する教員の対応時間
学力の向上	平均学力	測定無し	2	—
卒業	中退件数の割合	5.71%	2	高卒と中卒における生涯賃金からの差異—高校生活に必要な費用
教員の仕事の 質の向上	教員の希望 継続年数	測定無し	2	—

*昨年度データのからの参考値

図表 3-145 不破高校演劇表現ワークショップの SROI 算出における貨幣価値換算ロジック

アウトカム	算出方法	金額（円）
遅刻の減少	算出：平均回数×人数/10×1 時間×高校教員時給 (3,600) *	214,052
問題行動の減少	算出：平均回数×人数× { 30 時間×教育支援員時給 (1,250 円) + 40 時間×高校教員時給 (3,600 円) } *	458,505
卒業	算出：平均人数×割合×（高卒と中卒における生涯賃金の差 異（男女平均）－公立高校学習費総額）*	102,217,834

*昨年度データのからの参考値

図表 3-146 不破高校演劇表現ワークショップの SROI 算出

アウトカム	変化の価値	過大評価	外部要因	遞減率	1 年目	2 年目
遅刻の減少	214,052	0	75	70	53,513	16,054
問題行動の 減少	458,505	21.2	75	70	90,362	27,109
卒業	102,217,834	3.8	75	90	(2 年目に 表れるため算 入しない)	2,457,065
合計					143,876	2,500,228
現在価値					134,309	2,333,990
総現在価値						2,468,299
SROI 値						2.2

図表 3-147 不破高校演劇表現ワークショップの SROI 算出において使用した各因子の設定値とその根拠

	設定値	設定の根拠
継続期間	2 年	ヒアリングから高校 3 年生まで効果が持続すると仮定し設定
過大評価	上表の通り	岐阜県内高等学校全体の傾向より設定 ¹⁰
外部要因	75%	学校として修学旅行等のプログラムについても力を入れたというヒアリング結果より長期のアウトカム程外部要因が大きいと仮定し設定
逓減率	70~90%	年に 3 回 80 分のプログラムより、長期アウトカム程逓減率が大きいと仮定し設定

3.9.6. まとめと今後の展望

アンケート調査や SROI から演劇表現ワークショップは概ね不破高校一年生のコミュニケーション能力の向上、特に他者の受容に寄与していると考えられる。インタビュー結果からも生徒が良い影響を受けていることが確認できるがその濃淡は生徒によって異なる。一方で、生徒の学力向上などどの程度寄与しているかは更なる検討の余地が残った。次項では自己肯定感の向上と演劇表現ワークショップの価値について検討し、その後に評価の総括を行う。

3.9.6.1. 自己肯定感の向上と演劇ワークショップの価値を認識した割合

評価の設計上、自己肯定感やワークショップの価値そのものを直接的に聞く機会がなく、またワークショップ前にデータの取得をすることが困難であった。それゆえワークショップ参加者の自己肯定感が高まった割合は生徒へのアンケートから考察し、本事業の協力団体の演劇的手法によるワークショップの価値の認識した割合は不破高校教員へのアンケートから考察した。いずれの数値においても目標値は下回った結果となったものの、教員から演劇表現ワークショップの価値は認識されていることがうかがえる¹¹。今後評価設計の改善を通じた正確なデータの取得に向けた検討が求められる。

図表 3-148 2つの指標の結果

No.	内容	目標値	実績値
1	コミュニケーションワークショップ実施前後*で、ワークショップ参加者の自己肯定感が高まった割合	50%	36%**
2	本事業の協力団体が、演劇的手法によるワークショップの価値を認識した割合	70%	51%***

*評価設計上、前後比較が困難であったため不破高校ではアンケート項目のうち肯定的意見の割合より計算

**生徒向けアンケートの全項目のうち肯定的意見の割合

***教員向けのワークショップに関するアンケートの全項目のうち肯定的意見の割合

¹⁰ 「平成 28 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査【岐阜県公立学校結果概要】」

¹¹ 不破高校教頭増田氏へのヒアリングからも本事業へ高い期待があることがうかがわれた。

3.9.6.2. 評価の総括

本プログラムの評価の総括として、3.3.6 と同様の5つの観点で調査員によるアセスメントを行った。図表 3-19 に示された各項目に対し、A：十分に可能性がある B：ある程度可能性がある C：どちらとも言えない D：あまり可能性はない E：全く可能性はない、のいずれかで回答した結果を下図表に示す。

図表 3-149 県立不破高校のプログラムの評価に関する総括

No.	評価設問	詳細
1	課題分析の妥当性（ニーズ）	A：十分に可能性がある
2	内容の妥当性（セオリー）	A：十分に可能性がある
3	実施の適切性・十分性（プロセス）	A：十分に可能性がある
4	効果（アウトカム）	B：ある程度可能性がある
5	効率性	A：十分に可能性がある

1：課題分析の妥当性（ニーズ）

十分に可能性があると考えられる。不破高校では学校として抱える種々の課題を分析したうえでその一つの解決策として生徒のコミュニケーション能力の向上をあげている。演劇表現ワークショップはこのニーズに対して有効な手法の一つとして認識されており、それが着実に実施されている。

2：内容の妥当性（セオリー）

十分に可能性があると考えられる。演劇表現ワークショップはコミュニケーション能力の向上に直接的に寄与することが期待される。生徒の「集中、開放、コミュニケーション、イマジネーションを養うこと」が目的とされており、生徒は他者と向き合ううえでの重要な要素について演劇表現ワークショップで体感しながら講師からの説明を受ける。これはニーズに対応した内容といえる。

3：実施の適切性・十分性（プロセス）

演劇表現ワークショップは計画通りに実施されており、当日の状況や演劇表現ワークショップ中の生徒の状況を見てワークショップ内容を調整するなど臨機応変に実施されていた。不破高校では教員は観察することが多く、これにより教員が生徒の新しい側面に気づくこともあったが、今後は教員も参加することが期待される。

4：効果（アウトカム）

アンケートでは生徒の学力の向上や自分の考えを発信することへの寄与には疑問の余地が残ったものの、他者の受容を中心にコミュニケーション能力の向上が見られた。また、生徒へのインタビューを通じ一部の生徒には不登校の状況が解消するなど大きな変化があることもわかった。この結果から、演劇表現ワークショップは生徒に対し一定程度効果があったと考えられる。

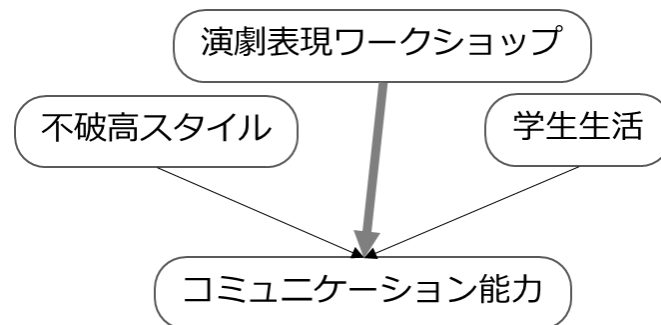
5：効率性

十分に可能性があると考えられる。先に示した通り、SROI は 2.2 であり費用対効果は高いといえる。また、他校での実践も行われていることから今後も継続すると考えられる。

最後に、より正確に評価を行うために三つの論点を提示する。第一に、新入生に対する 1 回目の演劇表現ワークショップを実施する前にアンケートなどの調査を行い基準となるデータを取得することがあげられる。そうするこ

とで 2 回目以降の演劇表現ワークショップの結果を比較することが可能となる。第二に、不破高校は演劇表現ワークショップ以外にも少人数制授業の導入や不破高スタイルという適切な指導のための教員の心得、地域の企業への職業体験など多様な取り組みを行っている¹²。それらに加えて日常生活も生徒のコミュニケーション能力や学力等ロジックモデルで想定されたアウトカムの実現に寄与すると考えられる。こうした状況のなかで演劇表現ワークショップのみの効果を抽出することも今後の課題である。第三に社会的インパクトは面として捉える場合と深さとして捉える場合がある。面は多くの人へ遍く効果が行き渡ったか、深さはある個人にどの程度大きな変化をもたらしかを見るといえる。SROI やアンケート調査では面を捉えたが、今後は更に深さを捉えるために十分な時間を確保したうえでのインタビューも検討の余地がある。

図表 3-150 不破高校における生徒のコミュニケーション能力向上に寄与する要因



不破高校では演劇表現ワークショップの重要性を認識しており、その効果も概ねあると推察される。SROI は数ある評価手法の一つであるが、これらのデータや評価からの学びが活用されより良い演劇表現ワークショップが展開されることを期待する。最後にこの調査に協力していただいた不破高校の増田泰志氏をはじめ教員の皆様、生徒の皆様および文学座の西川信廣氏、星智也氏、高柳絢子氏に深甚なる謝意を表す。

¹² 不破高校教頭増田氏ヒアリング

3.10.日本演劇情動療法協会（仙台市）

3.10.1. 概要、プログラム内容

仙台富沢病院での演劇情動療法は、NPO 法人日本演劇情動療法協会の前田有作氏により行われている。この病院の院長であり東北大学医学部老年科名誉教授佐々木英忠氏と、理事長であり東北大学医学部老年科臨床教授である藤井昌彦氏は、長年にわたり、認知症治療における様々な非薬物療法の研究を続けており、徘徊や妄想などのいわゆる周辺症状（BPSD）を改善する治療を行い、効果を上げている。

認知症の症状は、中核症状と周辺症状の二つに分けられる。物忘れや判断力の低下等、脳機能の低下を直接示す「中核症状」、そして「中核症状」に伴って現れる精神・行動面の異常である「周辺症状」である。BPSD(Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia)」とは、周辺症状とほぼ重なる概念である。周辺症状には行動症状として暴力、暴言、徘徊、拒絶、不潔行為等、また、心理症状として抑うつ、不安、幻覚、妄想、睡眠障害などがあげられる。

演劇情動療法は、この「周辺症状」を緩和する。認知症患者は、中核症状とよばれる認知機能の低下があっても、怒り、泣く、喜ぶなどの情動機能は比較的保たれている。情動機能は社会生活を円滑に進めるために必要であり、演劇情動療法は情動に良い刺激を繰り返すことにより、情動の整流化を行い、情動機能の回復、あるいは低下を予防し、社会生活をできるだけ長く送れるようにする療法である。「Balanced Aging」という概念を大切にしており、認知機能の低下について薬物による対処療法をするのではなく、温存されている情動機能に演劇情動療法でアプローチすることによって周辺症状を緩和し、そのことで認知症患者が社会と関わりを失わずに暮ることができるのだと考えている。医療と演劇が入念に協働した結果実現した、社会的包摂活動といえよう。

演劇情動療法では、演劇情動療法セッションが行われる。プログラムとしては、金曜日の午後のデイケアの時間に、1室の中に希望の10人程度の高齢者が参加し、前田氏が新聞記事、小説、戯曲や落語といった作品の朗読を行い、その前後に関連する会話（語らい）を実施する。その内容としては戦争時の手記「英霊の言の葉」や、落語など、高齢者の方たちの語らいにつながりやすいような内容となっている。

図表 3-151 演劇情動療法の講師、コーディネーター、調査員

講師	前田有作
調査員	落合千華、千葉直紀、石川純

図表 3-152 演劇情動療法の概要

プログラム名	演劇情動療法セッション
対象者	仙台富沢病院へのデイケア通所者
活動場所	仙台富沢病院デイケア
プログラム目的	演劇的手法を活用した朗読や会話によるセッションを通し、認知症患者の保たれている情動機能に良い刺激を繰り返し、情動機能の低下を予防し、社会生活をよりよく過ごせるように支援する
プログラム概要	演劇情動療法士による朗読と会話（語らい）のセッション
実施時期・期間	毎週金曜日約1時間（平成28年より継続）、デイケアのレクリエーションの時間

3.10.2. 背景と目的

演劇情動療法とは、認知症において認知機能は低下していても情動機能は比較的保たれているということに焦点をあてた、非薬物療法である。演劇を用い情動機能を刺激することで周辺症状を緩和し、患者の方々のいきいきとした社会生活を支えるものである。

認知症は平成 28 年、高齢者が介護の必要になった主な理由として 18.0%を占め、初めて一位になった¹³。認知症患者数は高齢化社会の中で年々増加し、平成 24 年には 462 万人とされるが、平成 27 年には約 520 万人、2020 年には 602 万人にもものぼるとされる¹⁴。その予防もちろんながら、認知症になった後のケアについても注目が集まっている。また、認知症治療薬（アルツハイマー型）と称されるアリセプト、メマンチン、ガラントミン、リバスチグミン等の市場規模は年々拡大しており、平成 17 年には 423 億円規模だったが、平成 27 年には 1,600 億円、2020 年には 2,900 億円にのぼるとされる¹⁵。

NPO 法人日本演劇情動療法協会の『演劇情動療法セッション』は仙台市太白区にある仙台富沢病院で行われている。この病院の精神科医である佐々木英忠氏と藤井昌彦氏は様々な非薬物療法の研究を行う中で、人を感動させることを得意とする「俳優」に、情動を刺激する療法の担い手になってもらいたいと発案し、仙台市で劇団を主宰し演出家・俳優・プロデューサーとして公演活動を行い、地域や学校で演劇ワークショップなどの実績を持つ前田有作氏に朗読の協力を依頼した。朗読は富沢病院デイケア時間内で行われ、療法としての可能性を感じた佐々木氏と藤井氏が、平成 25 年末から、前田氏と共に週 1 回 1 時間のセッションを開始した。こうしたセッションの結果、認知症患者の情動機能検査（MESE）に有意な差が見られることがわかり（図表 3-153）¹⁶、また、ESI（情動満足度指数）でも演劇情動療法参加者が情動に働きかける他のプログラムと比較しても最も肯定的な反応を示したことがわかっている（図表 3-154）¹⁷。認知機能に関してのエビデンスを得ている。少量のコリンエステラーゼ阻害剤を使用した認知症患者に対して、演劇情動療法を加えた群とそうでない群に 1 年後の認知機能テストを行った結果、有意な差が現れた。認知症患者の認知機能は 1 年後には下がるのが当然であるが、演劇情動療法を 1 年間絶えず続けていると、演劇情動療法を実施していない群（図中 DET(-)）の平均値 90%と比較して認知機能が約 110%（図中 DET(+)の平均値）になっていることがわかる（図表 3-155）¹⁸。

2016 年度、2017 年度はデイサービスでの情動療法の実施を行っていたが、今年度の 7 月 20 日より、入院患者向けの情動療法を開始し、デイサービスとは違う高齢者の方を対象としたプログラム設計を必要とした。対象者を変更した理由には、より精度の高い医学的データを取得することが主にあり、今年度は昨年度、一昨年度と比較するとやや認知症が重い患者を対象にしている。

¹³ 厚生労働省「国民生活基礎調査」（平成 28 年）

¹⁴ 内閣府「平成 28 年版高齢社会白書（概要版）」http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/gaiyou/pdf/1s2s_3.pdf

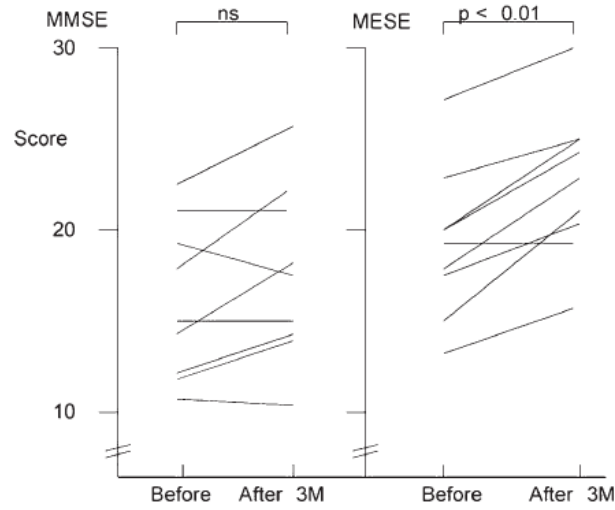
¹⁵ シード・プランニング「アルツハイマー型認知症・軽度認知障害（MCI）の治療・診断の現状と今後の方向性」

¹⁶ Maeda, Y., Fujii, M., Sasaki H., et al. "Dramatic Emotional Therapy for dementia patients" *Psychogeriatrics* (2015)

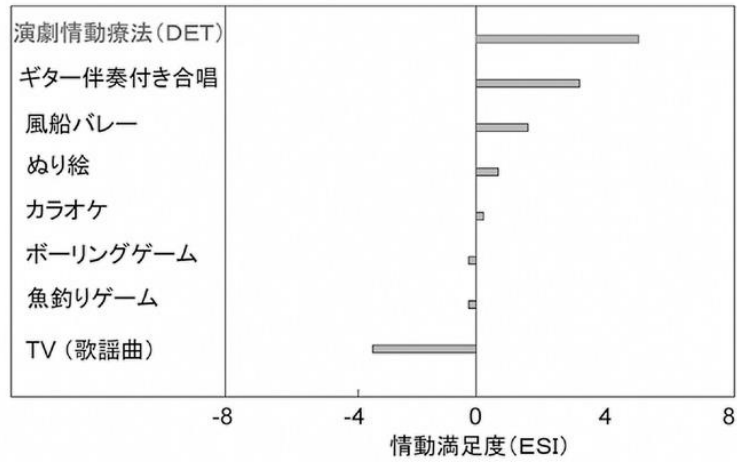
¹⁷ Maeda, Y., Kaneko, E., Fujii, M., Sasaki H. "Emotional Satisfaction Index for dementia patients" *Geriatr Gerontol Int* (2016)

¹⁸ Maeda, Y., Fujii, M., Sasaki H., et al. "Cholinesterase inhibitors and Dramatic Therapy for dementia patients" *Geriatr Gerontol Int* (in press)

図表 3-153 演劇情動療法 (DET) による MMSE および MESE の効果



図表 3-154 情動満足度



図表 3-155 演劇情動療法と認知機能

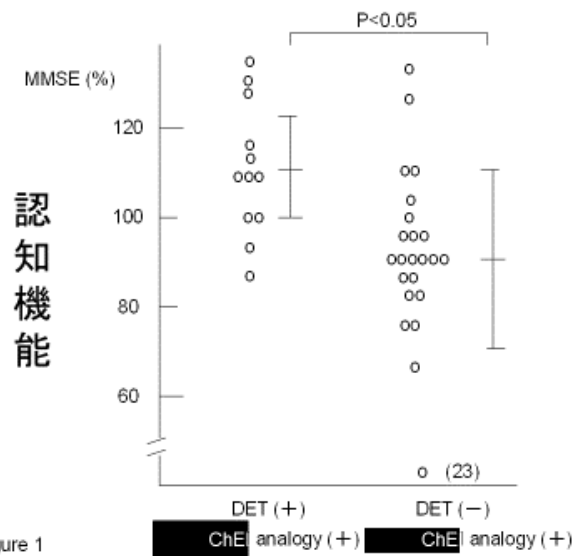


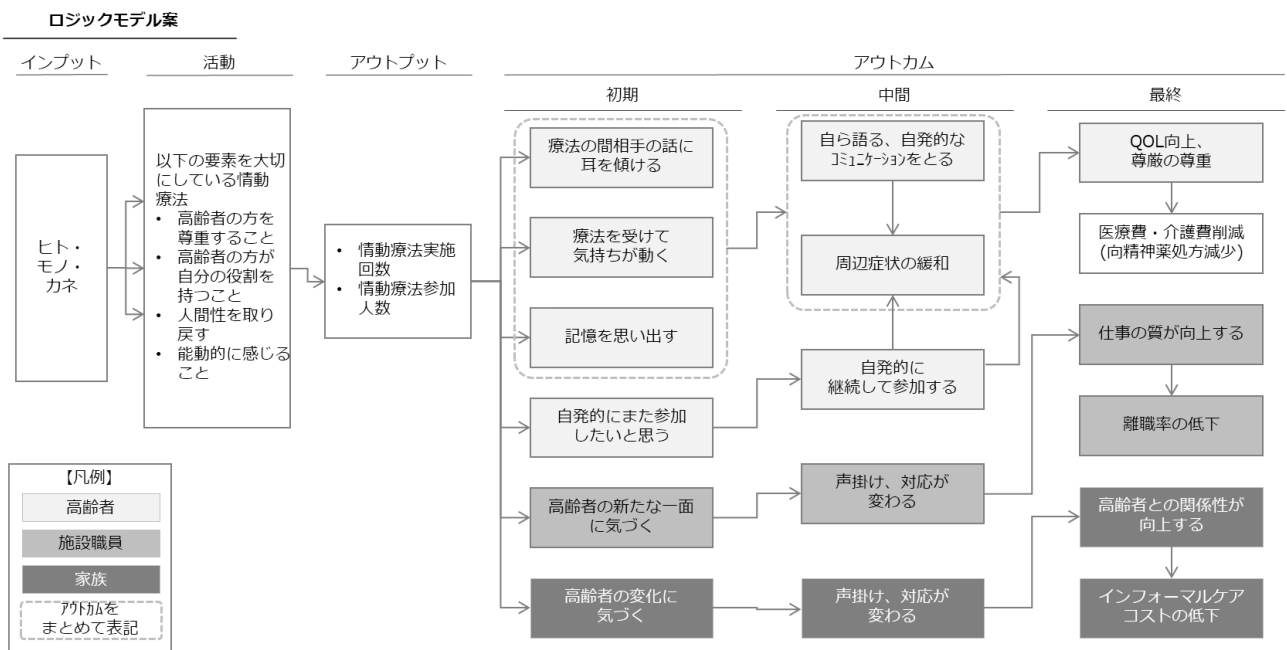
Figure 1

3.10.3. ロジックモデル

ロジックモデルは下記のとおりである。療法の初期にはその間にゆっくり耳を傾けること、気持ちが動くこと、ということが想定され、「また参加したい」という希望につながる。さらに、徐々に安心感のある場として参加者が認識すれば、継続的に参加することで、周辺症状が緩和され、QOL の向上につながっていくと考えられる。また、情動療法による高齢者の変化により、参加する高齢者に対する効果・変化だけではなく、施設職員や高齢者の家族にとっても変化が生じると考えられる。今回の調査では高齢者の家族の声を直接きくことはできなかったが、ロジックモデルの中には想定される成果を入れている。

図表 3-156 演劇情動療法のロジックモデル

対象プログラム	仙台富沢病院の認知症患者に向けた情動療法
対象者・関係者	①介護施設でのWSに参加する高齢者 ②施設職員、③家族、④情動療法に参加する情動療法士
目的	高齢者の尊厳を守りながら周辺症状を緩和する



3.10.4. 評価設問と指標

調査の目的としては、情動療法の効果を把握する一環として、新規に取り組みの始まった作業療法士（以下、OTとする。）・看護師向けの研修の効果をj知ること。情動療法の高齢者に対する効果について、介護費・医療費の観点から、限定的な対象（入院患者の約10人が対象）を設定して効果検証を試みることにした。

調査目的に基づき、仙台富沢病院への訪問は以下の日程で3回行い、演劇情動療法の観察、佐々木医師、藤井医師、前田氏との意見交換を行いながら、評価目的や調査方法を定めていった。

図表 3-157 演劇情動療法の訪問日程と議論内容

日時	内容
2018年6月15日	前田氏と調査員との事前打ち合わせ、情動療法見学、情動療法後の振り返り（前田氏、森氏、調査員）、作業療法士への情動療法士3級研修、評価設計の相談
2018年7月13日	藤井医師、その他の見学者との意見交換、情動療法の見学、情動療法後の振り返り（前田氏、森氏、その他見学者、調査員）、佐々木医師、藤井医師との評価設計の相談
2018年12月14日	情動療法見学、作業療法士・情動療法対象者へのインタビュー、佐々木医師、藤井医師との評価設計の相談

議論内容を踏まえて、高齢者に関するアウトカム、施設職員に関するアウトカムに関してそれぞれ優先度付けを行い、以下のような評価設問を立てた。

図表 3-158 演劇情動療法の高齢者に関するアウトカムと評価設問

アウトカム種類	アウトカム項目	評価設問	測定方法	測定回数
初期	療法の間に相手の話に耳を傾ける	療法中に、集中して耳を傾けていたか	OTによるアンケート	1回
	療法を受けて気持ちが悪く動く	療法中に、気持ちが動く様子があったか	OTによるアンケート	1回
	記憶を思い出す	療法中に、記憶を呼び起こされている様子がどの程度あるか	OTによるアンケート	1回
	自発的にまた参加したいと思う	療法後にまた参加したいという様子がどの程度あるか	OTによるアンケート	1回
中間	自ら語る、自発的なコミュニケーションを取る	療法を通して、自発的なコミュニケーションの様子がどの程度増えたか	OTによるアンケート	1回
	自発的に継続して参加する	療法に対して、関心があり、どの程度自ら参加する意欲があるか	OTによるアンケート	1回
	周辺症状の緩和	療法を受けて、どの程度周辺症状が緩和する様子があったか	OTによるアンケート	1回
最終	QOL向上、尊厳の尊重	療法を受けていれば、生活の質がどの程度向上すると思うか	OTによるアンケート	1回

図表 3-159 演劇情動療法の施設職員に関するアウトカムと評価設問

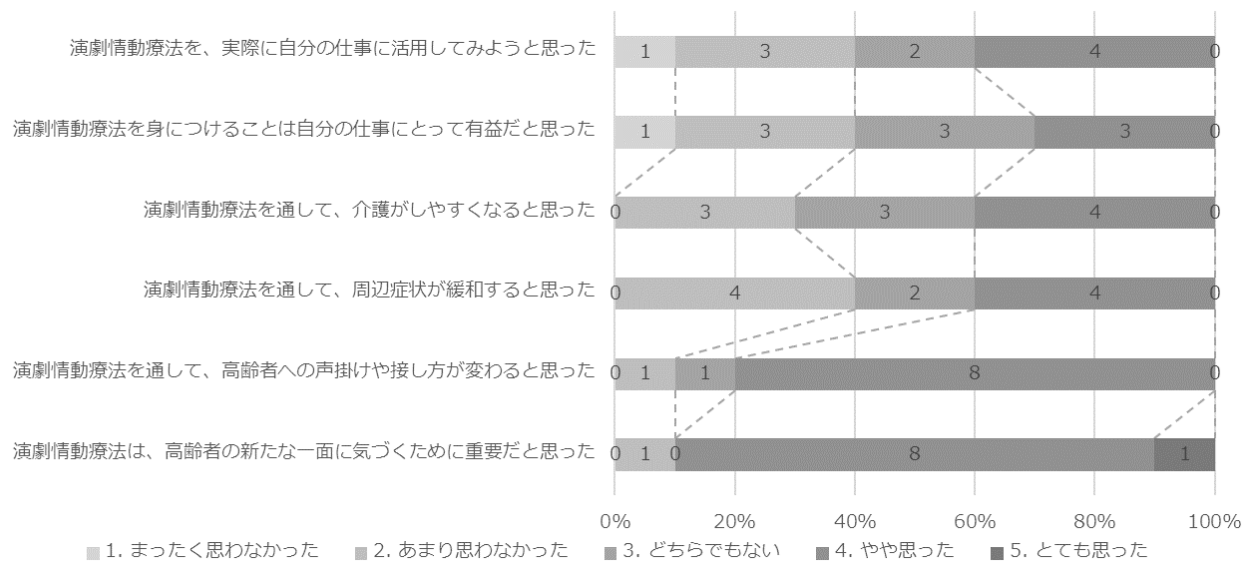
アウトカム種類	アウトカム項目	評価設問	測定方法	測定回数
初期	高齢者の新たな一面に気づく	ワークショップを通して気づきがあったか	自己評価アンケート	1回
中間	声掛け、対応が変わる	ワークショップの知見を普段活用できているか	自己評価アンケート	1回
最終	仕事の質が向上する	ワークショップを通して、介護・リハビリがやりやすくなったか 仕事の質が向上したか	自己評価アンケート	1回

3.10.5. 測定と分析結果

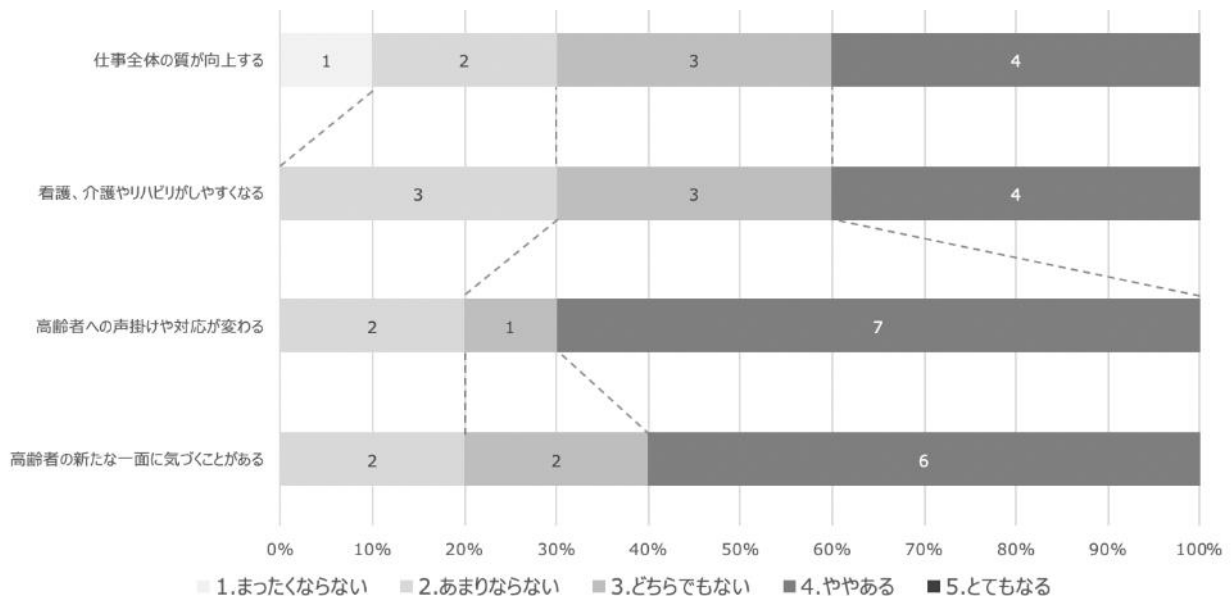
3.10.5.1. OT 向けアンケート結果

2018 年に、看護師・OT 向けに演劇情動療法養成講座（3 級）を開催した。合計 10 人が受講した。医師らと相談の結果、看護師は現場で非常に忙しく演劇情動療法を活用することは現実的ではないため、理解が進んでおり協力的な OT に協力を依頼した。演劇情動療法に関する研修を受けた OT10 人に対して、研修効果を把握するために、アンケート調査を実施した。結果を図表 3-160、図表 3-161 に示す。

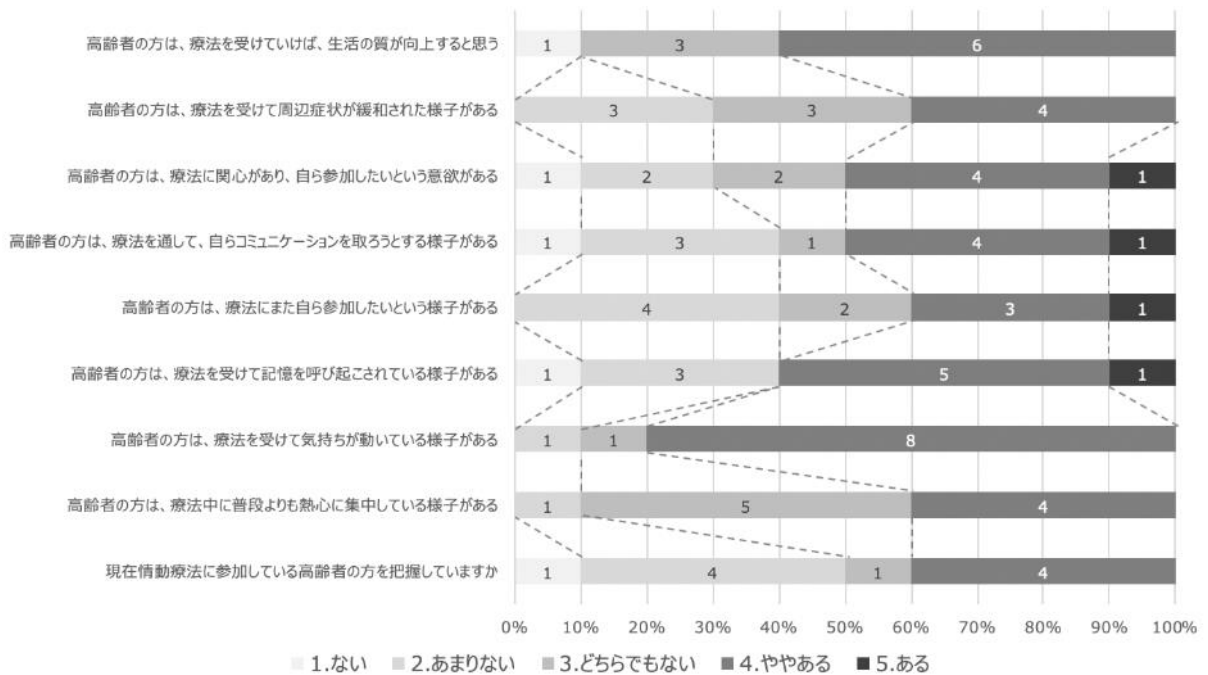
図表 3-160 OT 向けアンケート結果①「研修受講の感想」(N=10)



図表 3-161 OT 向けアンケート結果②「OT 自身の変化」(N=10)



図表 3-162 OT 向けアンケート結果③「OT が感じる高齢者の変化」(N=10)



①演劇情動療法に関する研修を受けてのOTの感想は、A1「演劇情動療法は、高齢者の新たな一面に気づくために重要だと思った」の項目で9割が肯定的な回答（やや思った/思った）をし、A2「演劇情動療法を通して、高齢者への声掛けや接し方が変わらと思った」で8割が接する上で効果を感じると回答するなど、新たな気づきがあったことがわかる。一方で、A5、A6の設問にあるように、自身の業務にとって有益と感じたり、活用してみようと思う割合については半々の結果であった。

②高齢者の方が演劇情動療法に参加することでのOT自身の変化については、全体的にややあるという傾向が見られた。具体的には、B1「高齢者の新たな一面に気づくことがある」、B2「高齢者への声掛けや対応が変わる」にあるように、ケアギバー側が対象者（認知症高齢者）の新たな側面に気がつくこと、それによって声掛けなどの接し方にも影響がある様子が見られた。B4「仕事全体の質が向上する」では、仕事にも好影響と回答した方が4割いた。

③現状の演劇情動療法に関して、高齢者の変化について、C3「高齢者の方は、療法を受けて気持ちが動いている様子がある」は8割がややあると回答すると顕著であった。一方で、効果は人による、どちらでもない、と感じている方が一定数いた。C9「高齢者の方は、療法を受けていけば、生活の質が向上すると思う」は6割が肯定的な回答結果となった。

3.10.5.2. インタビュー結果

図表 3-163 に、複数の対象者に関して実施したインタビューの実施結果を示す。

図表 3-163 演劇情動療法における関係者へのインタビュー結果

対象者	インタビュー内容
OT の F 氏	<ul style="list-style-type: none"> ・ OT と高齢者との関わり合いが増えた <ul style="list-style-type: none"> ➢ 情動療法が入ったことによって、(OT が) 入院したばかりの患者さんと接する機会が増えた。 ・ 高齢者に関する成果が見えている <ul style="list-style-type: none"> ➢ 当初否定的だった人が、参加してコミュニケーションが取れるようになった。自室でずっと過ごしている人で、出てくることになるようになった人もいる ➢ 入院当時言葉がうまく話せない状態だったが、今は話せている人もいる ➢ 情動療法では特に戦争の体験者が、話を聞いてイメージがつかうのだと思う ➢ 人間関係や感情が出てくるので、「あの人の近くには座りたくない」等、女子会や学校のような状態になる。まさに情動だと思う。向精神薬等でボーっとしているよりも人間らしい ➢ 先日の家族つれのイベント (メデットシアター) では、音楽が流れることで、効果が倍増する気がした。悲しいときは悲しい曲、音楽の効果がよかったと思う ・ OT の役割と情動療法の相性は悪くない <ul style="list-style-type: none"> ➢ OT は心の状態を観察することが重要なので、情動療法の手法は活かせる。若手の OT などにとって、情動療法からコミュニケーション上の気づきがあると思う。生の声、トーンなどに気が付いてくれるといいと思っている ➢ 他の OT は、情動療法士の資格をとっても、ケアの時間がかぶるのでなかなか来られない現状がある ・ 情動療法の経験は日ごろのケアに活かしている <ul style="list-style-type: none"> ➢ 自分がやってきたコミュニケーションが、こういう仕組みで機能していたんだという風に腑に落ちた。OT は 1 人で 48 人を担当するので、この他に他の作業療法士を見るとか、マンツーマンで教育するなど難しい
演劇情動療法対象者 (87 歳、男性)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 退院後も、情動療法が毎回楽しみになっている <ul style="list-style-type: none"> ➢ 情動療法が楽しみ。半年間入院したが、以前は物忘れがあったけど、思ったより良くなって今は退院して月・金でデイサービスに通っている。やっぱり情動療法を聴いて、脳体操のようになる ➢ リハビリは普通一対一だが、情動療法では講師が 10 人を対象にできる。効率的だと思う ➢ NHK (2018/11/5 放映) のインタビューで話した。知人から「病院にいるから大変な状態かと思ったら、そんな楽しそうなことやっているのか」と言われた (嬉しかった) ・ 元々本読みが好きで、いろいろな分野、話に興味がある <ul style="list-style-type: none"> ➢ 戦争関連でも初めて聞く話もある ➢ 一方で、家では話を共有できる相手がいない
佐々木医師 藤井医師	<ul style="list-style-type: none"> ・ 情動療法の効能について <ul style="list-style-type: none"> ➢ 認知症の方は外の世界と繋がらないように自分でブロックしているが、心の琴線に触れることや自分の体験と話が重なると、付随した記憶が呼び覚まされ、畳み込まれたものが一気に解凍されるようなイメージがある。演劇情動療法が、そうしたきっかけになっていると言える ➢ 例えば、「震災で家族を亡くして俺ほど不幸なやつはいない」と言い、認知症が悪化していた患者がいたが、演劇情動療法で特攻や空襲の話聞いてもっと大変な思いをした人を知り、感情移入したことで、感情のコントロールが効くようになったことがある ➢ メデットシアターでは、認知症の患者がじっと座って聞いていた (徘徊する人たちがずっと座っているとは普通は考えられず、興味がなければ帰ってしまう)。子ども向けのものは患者に怒られることもあるが、クオリティの高いものを認知症の患者に提供することが、治療の役割を果たしていると考えられる ・ 情動療法と向精神薬の違いについて <ul style="list-style-type: none"> ➢ DEI (Delightful Emotional Index) と NPI (Neuropsychiatric Inventory) の 2 つを見て情動を見るが、今は NPI のみ見ている。NPI が下がって DEI 上がることが良い精神状態だと言えるが、向精神薬を使うと、NPI も DEI も下がってしまう ・ 家族の役割の重要性について <ul style="list-style-type: none"> ➢ NPI が高い人の家族は、BPSC (Behavioral Psychological Symptoms of Caregiver、介護者の精神行動異常) も高い。今問題なのは、周辺症状は人の関係性の影響があるのに、それが全て認知症の患者のせいとされることである ➢ 認知症の患者を取り巻く環境や関係者 (職業的な介護者、家族)、彼らの BPSC を減らす方法を考えないといけない

3.10.5.3. 公開演劇情動療法（メデットシアター）の観察結果

図表 3-164 に、公開演劇情動療法（メデットシアター）に参加した患者の様子を情動療法スタッフが客観的に評価した結果を示す。当日の参加者（患者 20 人、家族 8 人）のうち、スタッフから見える範囲の 11 人（家族も入れると 16 人）に対して、観察を行った。11 人中 7 人は公演中に反応を示し、その中でも 5 人は比較的大きな反応（++以上）を示した。スタッフ記録によると、「歌にリズムをとる。うなずき笑顔。拍手するなどの反応」、「話に反応を見せる。笑顔が見られた。家族へも笑顔を向けていた」、「話によく反応する。拍手や笑顔、笑い声など楽しんでいる」などの様子であった。

図表 3-164 メデットシアターの観察結果

（情動療法士による観察結果。+++、++、+、-の順で、情動の動きが見えた人数をカウントしている）



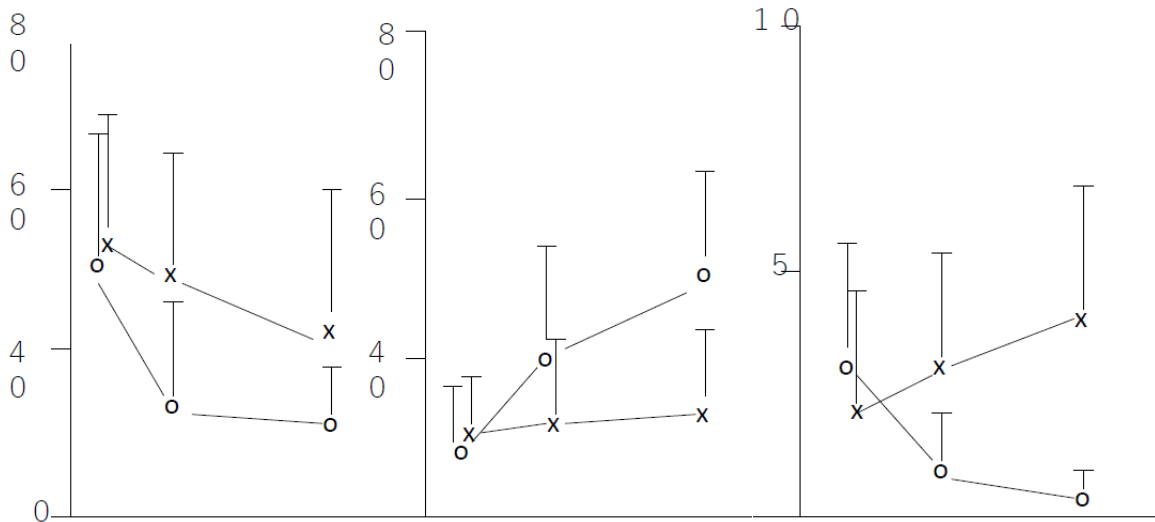
3.10.5.4. 演劇情動療法による歓喜的情動指数の変化

佐々木医師、藤井医師の研究結果であるデータより、演劇情動療法による情動を見る指数である NPI、DEI および向精神薬の変化の結果を図表 3-165 に示す。その結果、1 か月後、3 か月後でいずれも NPI が現状、DEI が向上、向精神薬の量が減少するという結果が得られた。

加えて、6 人の患者への向精神薬の使用中止による MMSE の変化の結果では、受診後 1 ヶ月で 12.3 錠から 0 錠に減らしており、その結果認知機能(MMSE)は 10.7 から 21.3 に改善していることがわかる。これらの結果より、非薬物療法を実施することにより、NPI の減少、DEI の向上、すなわち精神状態の改善と、それに伴う向精神薬の減少が示唆され、向精神薬が減少すれば、認知機能を示す一つの指標となる MMSE も改善することが示唆された。

図表 3-165 左から NPI と DEI、向精神薬（錠）の変化（演劇情動療法群と非演劇情動療法群の比較）

（○：演劇情動療法群（N=10）、×：非演劇情動療法群（N=10））左から前、1 か月後、3 か月後のデータポイント



図表 3-166 演劇情動療法による NPI と DEI、向精神薬（錠）の 1 か月の変化¹⁹

症例	年齢	性別	診断名	向精神薬		認知機能(MMSE)の変化	
				初診時	1ヶ月後	前	後
1	86	女	認知症	7	0	19	29
2	79	女	認知症	4	0	13	22
3	68	女	うつ状態、認知症	9	0	17	28
4	66	女	ピック病	12	0	15	27
5	84	女	認知症	17	3	0	10
6	74	男	認知症、悪性症候群	25	0	0	12
平均値				12.3	0.5	10.7	21.3

これらのデータをさらに精度高く蓄積し、非薬物療法による周辺症状の緩和と向精神薬の減少が証明されれば、演劇的手法を活用した非薬物療法の効用が認められるだろう。

3.10.5.5. 協働体制に関する結果

演劇情動療法の実施において、病院側との協働体制を問う指標に関して、複数の項目を定量的に測定した。その結果、平均して約 50 人の施設職員、OT がワークショップを知っている、30 人が理解しているという結果となり、平均して情動療法に参加する施設職員、OT は毎回約 2 人との結果であった。また、情動療法協会は、協働先の熱意は十分あり、十分なコミュニケーションがとりやすいと認識しており、今後の具体的な改善の希望としては、デイサービスでの情動療法の再開と、OT の増員があげられた。

¹⁹ Azumi M, Ishizuka S, Fujii M, Sasaki H. Antipsychotics and cognitive function. Psychogeriatrics 2011; 11: 79-82.

図表 3-167 演劇情動療法の協働体制に関するアンケート結果（教員による回答、N=13(12月)）

No.	項目	結果
1	情動療法を知っている施設職員、OT の人数	50 人
2	情動療法を理解している施設職員、OT の人数	30 人
3	情動療法に参加する施設職員、OT の人数	毎回 2 人
4	協働先の熱意は十分か	十分
5	協働先とは十分なコミュニケーションがとりやすい関係性があるか	ある

以上の結果より、情動療法においては、情動療法協会と仙台富沢病院の間で十分な協働体制が取れていたことが示唆された。

3.10.6. まとめと今後の展望

3.10.6.1. 自己肯定感の向上と演劇ワークショップの価値を認識した割合

日本劇団協議会があらかじめ設定した項目と目標値に対して、以下のような結果となった。

図表 3-168 2つの指標の結果

No.	内容	目標値	実績値
1	コミュニケーションワークショップ実施前後で、ワークショップ参加者の自己肯定感が高まった割合	50%	—（アウトカムに自己肯定感がないため、実測無し） 一方で、「生活の質向上」に関しては 60%
2	本事業の協力団体が、演劇的手法によるワークショップの価値を認識した割合	70%	56%（OT アンケート結果）

3.10.6.2. 評価の総括

以下の5つの観点で、調査員による総括を行った。結果を図表 3-169 に示す。

図表 3-169 演劇情動療法プログラムの評価に関する総括

	評価設問	詳細
1	課題分析の妥当性（ニーズ）	A：十分に可能性がある
2	内容の妥当性（セオリー）	B：ある程度可能性がある
3	実施の適切性・十分性（プロセス）	B：ある程度可能性がある
4	効果（アウトカム）	B：ある程度可能性がある
5	効率性	B：ある程度可能性がある

1：課題分析の妥当性（ニーズ）

演劇情動療法は、2016 年から仙台富沢病院と共に医師監修のもと、その手法を発展させてきた。認知症患者という、直接のニーズを引き出しづらい対象者ではあるものの、病院との共同研究のような形で、

どのようなニーズがあるのか、情動療法時に用いる話の一つ一つまで精査して蓄積してきている。そのため、対象者のニーズに対する本プログラムの設計の妥当性は、十分に可能性があると見えよう。

2：内容の妥当性（セオリー）

内容の妥当性についても、ある程度可能性があると考えられる。ロジックモデルは、2016年度より毎年更新し続けてきており、高齢者だけでなく、施設職員や家族に関するアウトカム項目も整理してきた。高齢者についての成果では、データを取得することによりさらに改善を継続してきたものの、特に家族に関する成果については、その妥当性を十分に検証できていない。セオリーの検証を行うためには、データ取得と分析が必要になるが、高齢者の家族に対して評価の協力を依頼できる体制になっておらず、今後、よりステークホルダーを明確にしてセオリーの検討を行っていくためには、評価に関する協力体制を病院、家族側からもより引き出す必要があると言える。

3：実施の適切性・十分性（プロセス）

プログラム実施については、ある程度可能性があると考えられる。2016年度からの継続的なプログラムではあるが、今年度が初めての入院患者へのプログラムの実施であった。当初、夏ごろまではデイサービスでの情動療法実施であったが、冒頭にも述べた通り、2018年7月20日より入院患者への情動療法実施への切り替えを行っている。そのため、当初は病院側との連携での人材不足や、認知症がデイサービスと比較すると重い患者が多いことなどによる、情動療法実施側にも混乱があった。一方で、秋以降は現場も慣れ、定期的に問題なくプログラム実施が可能になったことが伺えた。今後は、入院患者を対象とした情動療法実施に関して病院側との体制が整ってきたこともあり、より円滑に実施が行えるだろう。

4：効果（アウトカム）

プログラムの効果に関しては、OT向けアンケートの結果より、ある程度可能性があると考えられるだろう。医学的データについても、患者に対して情動療法を実施することで、NPIやDEIが改善し、向精神薬の減少に役立てられることが示された。患者の変化に関するエピソードに関しても、次の情動療法を楽しみに参加している対象者もあり、確実に効果があったと考えられる。一方で、施設職員に関する効果では、高齢者に関する効果と比較すると相対的にやや低い結果となっており、今後、担い手を増やしていく、あるいは介護の担い手のBPSCが全体として改善していくことは情動療法を推進するためにも重要であり、今後は介護の担い手である施設職員、あるいは家族に関するアウトカムを明確にしていくことが重要であると言える。

5：効率性

本プログラムの効率性は、ある程度可能性があると見えよう。NPI、DEIの結果や、各エピソード項目からも、その効果はある程度わかってきており、情動療法の実施は、週に1回、講師が1~2人で実施する1時間程度のプログラムであるため、実質かかる費用は一人当たり1回3,000円程度である。薬剤の減少だけを考慮すれば、費用対効果はそこまで大きくないと考えられるが、高齢者のQOLの向上、施設職員の介護の質の向上、家族との関係性の向上等を考慮し、その費用対効果を見ていけば、プログラムの効率性、継続性はより説得力のあるものとなるだろう。

総合的に見て、3年間実施を続けてきている情動療法は、仙台富沢病院ではデイサービスにおいても、入院患者に対しても、そのニーズを踏まえたプログラム設計と実施がされており、効果が出てきていると言えるだろう。対象者に関する医学的なデータに加えて、施設職員や家族等のステークホルダーへの影響を加味すれば、より本プログラムが効果的なプログラムであると言えると考えられる。

4. 結論と今後の展望

本事業において、課題分析の妥当性、内容の妥当性、実施の適切性・十分性、その効果、効率性の各観点において、8つのプログラムの内2つのプログラムは十分に可能性がある、6つのプログラムはある程度可能性があると総括された。こうしたプログラムがより成果を出すためには、協働先との関係性が重要であると考えられる。また、今後評価結果を事業に活用し、事業の横展開を目指していくためには、納得性の高いエビデンスの構築が重要であり、そのための評価設計と、指標設定が重要であると考えられる。本章では、このようにプログラムをよりよく進める上での重要な観点をまとめ、結論と今後の展望としたい。

図表 4-1 プログラム

No.	対象	協力団体（劇団）	協力団体（アウトリーチ先等）
1	障害者	朋友	東京都立石神井特別支援学校
2	高齢者		社会福祉法人はるび
3	青少年		社会福祉法人光明会
4	青年（さいたま）	青年劇場	NPO 法人さいたまユースサポートネット
5	青年（東京）	銅鑼	日本労働者協同組合ワーカーズコープ連合会
6	在日外国人	兵庫県立ピッコロ劇団	NPO 法人北播磨市民活動支援センター（小野市うるおい交流館エクラ）、NPO 法人小野市国際交流協会
7	高校生	文学座	岐阜県立不破高校
8	高齢者（認知症）	NPO 法人日本演劇情動療法協会	仙台富沢病院

図表 4-2 各プログラムの評価に関する総括

評価設問	各プログラムの実績値							
	1	2	3	4	5	6	7	8
課題分析の妥当性	A	A	B	B	B	A	A	A
内容の妥当性	A	A	B	C	A	B	A	B
実施の適切性・十分性	B	A	B	B	B	A	A	B
効果	B	B	B	A	A	B	B	B
効率性	B	B	B	B	C	B	A	B
総合	B	A	B	B	B	B	A	B

4.1. 協働先との関係性

各プログラムで協働先との関係性を定性、一部定量的に把握した。その結果、多くのプログラムで、各協働先と密に連携を取り、より良い協働体制をとっているほど、特に課題分析の妥当性、内容の妥当性に影響があることが示唆された。例えば、劇団朋友が実施する3つのプログラムと比較すると、その協働体制には差があるということがわかる。協働体制を問う項目と、評価に関する総括を見比べてみると、特に課題分析の妥当性と内容の妥当性の部分において差があると言えるだろう。これは、協働先と密なコミュニケーションが取れる関係性にあるほど、実際に対象者について多くの経験を持つ協働先からその課題を聴き出すことができ、そのプログラムの設計に役立てることができるからであると考えられる。劇団朋友では、特に高齢者施設のはるびの郷と良い協働体制を取っており、プログラム実施においても、そうした効果が表れていたと言える。

加えて、本事業において初めて劇団、劇場、NPO という三者の協働体制を実施したピッコロ劇団による在日外国人対象プログラムでは、各関係者が協力し合ってプログラムを構築、実施できていたと言える。特に、対象者のことを深く理解している国際交流協会を含めたプログラムへの示唆は、参加者を集めること、またプログラムを

より効果的に実施することにおいて、大いに役立っていたと考えられる。地域の場所として機能する劇場、社会課題を理解する NPO、そこに実プログラムを提供する劇団という三者が揃うことにより、効果的に実施が可能となったモデルケースと言えるだろう。

今後、二者、あるいは三者による協働体制をいずれのプログラムでも強化していくことができれば、おのずとプログラムの効果向上が見込めると考えられる。

4.2. 今後展開していくために

今後、各プログラムを広く展開していくためには、本事業をとおして以下の 2 つの課題があると考えられる。

1. 評価設計の課題

2. 分野における指標構築の課題

1 つ目の評価設計の課題においては、納得性の高いエビデンスを集めるためには、一定程度寄与度を明らかにするための評価設計が重要である。演劇的手法を活用した現状のプログラムの規模は、対象者が各 10~30 人程度であり、また、事前・事後で同一の対象で比較をできない、あるいは比較対象群を設定できない状況がある。こうしたプログラムの構造が、評価により寄与度を明らかにできない一つの大きな課題となっていると言える。今回演劇情動療法の評価において試みたように、対照群と介入群を設定し、データを取ってその有意差を見ていくこと、あるいは同一の対象に対して長期的に事前・事後の比較を見ていくことなど、その評価設計をあらかじめ構築することが重要となるだろう。

2 つ目の分野における指標構築の課題においては、特に児童対象、障害者対象の分野で課題があると言える。高齢者の介護予防、認知症予防、あるいは就労支援の分野においては、例えば介護度、認知度を測定する医学的指標、あるいは就労率等、ある程度客観指標が構築されてきている分野だと言えるだろう。一方で、児童対象や障害者対象の分野においては、その成果の設定が関係者によって異なることも多く、中退率の減少や、学力の向上等、客観指標を用いて表せる明確な目指す成果がない限りは、その設定が難しい。本事業においても、各プログラムにおいて「自己肯定感の向上」といった成果が重要な成果と位置付けられたが、こうしたアウトカムはアンケート等の主観指標で測定することになり、横並びでの比較や、納得性のあるエビデンスとして展開していくのに活用しづらい課題がある。こうした客観指標で測定をしづらい分野においては、無理に客観指標を活用するのではなく、むしろその本質的な価値を明らかにできる定性評価を活用していくことで、周囲の共感を得て展開していくことが重要なのではないかと考える。いずれにしても分野によって（主に客観指標に代表される）汎用性が高い指標設定が可能かどうかは、その都度確認することが必要であり、各分野、どのような指標を用いれば納得感があるのかについても都度検討が必要だろう。

社会的事業の評価において、その対象の規模の小ささによる評価設計の難しさや、対象分野における指標設定の課題はまだ多くあると言える。特に文化芸術分野においては、プログラムの規模が小さいことや、プログラムの構造上対照群を設定しづらい、事前・事後での比較をしづらい等の課題が多くあげられるだろう。そうした制限がある中で、まずは各プログラムの事業改善に活用できるような評価を実践し、長期的にデータを蓄積していくことが重要であると考えられる。

5. 終わりに

演劇の社会的認知を拡張するためのマーケティング戦略を

可児市文化創造センターala 館長兼劇場総監督 衛 紀生

2月下旬に全国市町村職員研修所(市町村アカデミー)で文化施設経営の3時間の講義を行った。全国から部課長クラスから主事まで、それに総務省の外郭団体地域活性化センターからの職員3名を加えて文化振興系及び劇場音楽堂等の所管部署、現場関係者60名ほどの受講者であった。なかには医療保険部主査の参加者までいた。予定していた講義内容は、2011年に閣議決定された第三次基本方針から昨年の文化芸術推進振興基本計画、文科省設置法一部改正まで大きく転換した国の文化政策について、可児市文化創造センターalaの現場に則したものに予定だったが、「集客に苦慮している」という事前アンケートの傾向があり、講義の前に受講生に「マーケティングについても持ち帰りたい人は挙手してください」と呼びかけたところ、3分の2以上の手があがったので前半の80分を予定していた講義内容、休憩をはさんで70分程度をマーケティング1.0から2000年以降のフィリップ・コトラーの提唱したマーケティング3.0、経営戦略研究のマイケル・ポーターのマーケティング4.0までの概要を織り込みながら、劇場サービスにおける「創客」による客席稼働率の増加戦略を、急遽話すことにした。その戦略で、少し古いデータだが、2007年から2014年までで、観客数で3.86倍に、パッケージチケットで8.75倍になったいくつかの戦術を交えながら顧客を増やすためにやるべきこととやるべきではない非効率なセリングについて私の経営戦略を話した。

仄聞するところによれば、東京での演劇の総観客数は減少傾向にあるらしい。そこで公立の劇場はタレントやマスコミ露出度の高い俳優を起用して、いささか商業主義的な舞台が増加傾向にあると劇団関係者から聞いたことがある。演劇マーケットは、成長期を過ぎて、成熟期も経過して衰弱期に入ったのだろうか、との疑問が私にはある。だとするなら、何らかの大きな転換期を演劇界は迎えていることになる。大きなパラダイムシフトの転換をしなければ、いかなる「変化」を生じさせることが出来なくなってしまう。減少傾向にある観客数の前で、ただ立ち尽くすことになってしまう。タレント等を起用するのむひとつの打開策ではあるが、それによって舞台成果に翳りが生じるのなら、それは一時的な対症療法でしかないと思ふのである。

社会環境や個人の孤立と孤独に変化をもたらす、つながりの貧困からの回復を目指す包摂型のプログラムは、「本来事業」である芸術創造の片手間にやれば良い、という考え方がある。日本のオーケストラの50代より上の世代の大半の演奏家が主張する典型的な「芸術聖域主義」の思考である。彼らの言では「それをやったからと言って演奏技術が向上するわけではない」というものだ。果たしてそうだろうか、という疑義が私にはある。スキルが向上する訳ではないが、その背景にある「生き方」、演奏を聴いた子どもたちの変化を前にして、音楽の持っている力を信じることになり、演奏家としてもう一段ステップアップすると私は考えている。ベルリンフィルの芸術監督に招かれたサイモン・ラトルの最初の仕事は、貧困地区や移民や難民の子供たちと、ベルリンフィルによるストラヴィンスキーの『春の祭典』で彼らにコンテンポラリーダンスを踊ってもらうプロジェクトだった。サイモン・ラトルはバーミンガム市響のころから、自身が労働者階級の出身だったこともあり、「生きづらさ」や「生きにくさ」を感じている市民たちに向けたプログラムに積極的に関わって、多くの支持者と擁護者を創り出し、市響を世界的なオーケストラに押し上げている。その時のマーケティング&ファンドレイジング部長であったセーラ・ジーさんに、ラトルの経営方針の卓越さを聞いた。

日本劇団協議会の『やってみようプロジェクト』は、文化庁に提案した時から、演劇の社会的認知を視野に入れていた。つまり、このプロジェクトは舞台創造事業と社会包摂事業によって「新しい価値」を生み、螺旋状に進化という価値をつくる循環型のマーケティングに位置付けられなければ「やった感」だけの成果しか生まない。「複数の当事者が相互に関わり合い、対話と交流を通して新しい価値を創り出し、ともに目的を達成し、かつ相互の変化と再組織を推進していく、継続的・螺旋状の進化のプロセス」は日本マーケティング協会のマーケティングの定義だが、これはそのまま社会包摂の定義でもあると思っている。公立劇場とNPOと協働する循環を設

計して、演劇の社会的認知を進めて、「創客」というアウトカムに行き着くために、私たちはもう少し時間を要するのだろうか。

6. 参考資料

6.1. コミュニケーションワークショップの記事掲載等

青年対象（東京）プログラムに関する記事

日本労協新聞（ワークスコープ発行） 2018年11月5日掲載

世田谷サポステの若者ら5人が熱演
演劇ワークショップ公演発表会

「若者演劇ワークショップin東京」の公募発表会が10月14日、劇団朝顔アトリエ（東京・板橋）で行われ、ワーカーズコープが実施する、世田谷サポステワークショップを活用する若者5人が成果を発表しました。（事業推進本部 奥平明子）

ワークショップは、協会が主催（文化庁委 地域若者サポートステーション）を主催し、ワーカーズコープも協力団体として参加しています。

月々10月の19日間（2）

講演発表会のチラシ。ワークショップには、ワーカーズコープを始め支援機関も協力

東京

約3日の合宿を含む、演劇を通じて心を開き、人生の可能性に気づいてもらい、就労や就学の意欲向上につながることを目指しています。ストレッチやシアターゲームなどで仲間づくりから始め、10月からは本格的な稽古を重ね、公演本番へ。

セリフを間違えても、言い回しに場面を進めていくという練習では、「人生でも失敗や挫折があっても、とにかく前に進むことが大事」と励ました。これまで集団の中では、自分の意見は言わずにその場を無難に過ぎようとしてきたが、自己主張をしてもいいのだと思えるようになった、といった声も。

自分が受け入れられたいという感情、フラットな関係性、思い切った表現をする、一つの作品を作り上げるための苦勞を格闘...こうした経験が活用の力を引き出し、輝かせるのだと感じました。

公演発表会に参加者は、戯曲「B1&B10th」を熱演。ワーカーズコープの成果に誇り、このように取り組みを続けていきます。

「ママにした作品です。ワークショップで出会った若者の、凄腕な演技の表情が印象的でした。舞台を観るだけでなく、舞台活動を通して、皆さんが短期間で慣れない表現活動を探めたことに驚いた。真剣に取り組んでいたことが伝わった。今後の感想が、ワーカーズコープの自立支援の現場で、その人が持つ力を発揮できるようなサポートが必要だと感じました。演劇ワークショップの成果に誇り、このように取り組みを続けていきます。」

小野で外国人30人ワークショップ
「にほんごあそび」楽しむ

小野市つるおい交流館エクラ（同市中島町）で2日、演劇の手法を用いたコミュニケーションワークショップが実施された。

文化庁と日本劇団協議会（東京都）の主催。同館指定管理者のNPO法人北播磨市民活動支援センターが、県立ビッツコ劇団（尾崎市、小野市国際交流協会と連携し、同庁の事業採択を受けて実現させた）講師は劇団の3人が務め、「言葉と体をを使い、ゲームや表現遊びを通して、楽しくコミュニケーションしよう」と切り出した後、参加者は日本流のジャンケンや「あつち向いてホイ」などを体験。好きな果物をお互いに言い合ったり、グループを作る遊びや「だるまさんが転んだ」なども楽しんだ。ブラジル人の会社員クレイソン・ナタリアさんが

「ママにした作品です。ワークショップで出会った若者の、凄腕な演技の表情が印象的でした。舞台を観るだけでなく、舞台活動を通して、皆さんが短期間で慣れない表現活動を探めたことに驚いた。真剣に取り組んでいたことが伝わった。今後の感想が、ワーカーズコープの自立支援の現場で、その人が持つ力を発揮できるようなサポートが必要だと感じました。演劇ワークショップの成果に誇り、このように取り組みを続けていきます。」

小野市つるおい交流館エクラ

ゲームを通して日本語を学ぶワークショップを楽しむ外国人

小野市つるおい交流館エクラ

在日外国人対象（エクラ）プログラムに関する記事

神戸新聞 2018年9月3日掲載

（32）川加東市大梨は「色んな国籍の人たちが集まっていた良かった。日本のゲームは楽しかったと話していた。（藤田 彰）

7. 補足：団体概要

団体名	劇団朋友
理念	朋友とは、友達・同志・学芸を同じくする意があるが、【FOR YOU】と捉え、人々の琴線に触れるようなメッセージをもった演劇を、共に創りたいという思いを込めている
主な事業	約 50 人の劇団員を抱え、全国の演劇鑑賞団体、公文協（会館公演）等での一般公演、更にアトリエ公演等と幅広い活動を展開
設立年月	1970 年（昭和 45 年）に第二次劇団新人会を発足、1994 年 10 月、社名を劇団朋友と商号変更
主な所在地	東京都杉並区上荻 4-6-7 サンケイマンション 1 F
URL	http://www.gekidanforyou.com

団体名	秋田雨雀・土方与志記念 青年劇場
理念	日本新劇界のパイオニアである秋田雨雀のヒューマニズム、土方与志のリアリズム、国際性豊かな舞台創造を受け継ぎ、さらにその遺産を今日の社会にいつそう開花させる。また「青年劇場」という劇団名には、戦後土方与志が未来を担う若者たちに優れた演劇を提供しようと精力を傾けた「青年劇場運動」と、「いつまでも青年のように」という思いが込められている
主な事業	一般公演・小劇場公演活動、青少年のための公演活動（青少年劇場運動）
設立年月	1964 年 2 月
主な所在地	東京都新宿区新宿 2-9-20 問川ビル 4 F
URL	http://www.seinengekijo.co.jp

団体名	劇団銅鑼
理念	〈根本理念〉人々の暮らしに演劇が溶け込み心豊かな人生の糧となること、それが私たちの願いである 〈創造理念〉時代の光と影を見据え、平和・人間愛・本当に人間らしく生きることとは何かをテーマに客席と舞台が火花を散らす魅力的で真摯な演劇を目指す 〈経営理念〉演劇の持つ力を社会に活かして、生活でき継続できる劇団づくりを目指し、地域から全国そして世界へ発信する
主な事業	①演劇公演の興行 ②演劇公演・映画およびテレビ出演の引き受け業務 ③ワークショップ事業 ④演劇図書類の出版業務 ⑤前記に附帯する一切の事業
設立年月	1972 年 8 月
主な所在地	東京都板橋区中台 1-1-4
URL	http://www.gekidandora.com

団体名	兵庫県立ピッコロ劇団
理念	全国初の県立劇団“兵庫県立ピッコロ劇団”は、兵庫県立尼崎青少年創造劇場(ピッコロシアター)が長年培ってきた人材育成事業の集大成として、平成 6 年に設立。現代演劇を代表する劇作家による創作劇を中心にした公演活動をはじめ、学校や地域での演劇指導・普及活動にも積極的に取り組むなど、“芸術文化立県ひょうご”を目指して、日本全国から海外まで幅広く活動を展開
主な事業	演劇公演・演劇に関する指導、相談業務・外部出演（演劇・映画・放送等） その他
設立年月	平成 6 年
主な所在地	兵庫県尼崎市南塚口町 3 丁目 17 番 8 号 兵庫県立尼崎青少年創造劇場(ピッコロシアター)内
URL	http://hyogo-arts.or.jp/piccolo/troupe/

団体名	文学座
理念	「真に魅力ある現代人の演劇をつくりたい」 「現代人の生活感情にもっとも密接な演劇の魅力を創造しよう」
主な事業	本公演、アトリエの会、附属演劇研究所での公演活動に加え、近年では、毎年恒例となった「サマーワークショップ」、シニア世代向けのワークショップ「プラチナクラス」、また、公共ホールや学校などで演劇ワークショップ事業を行うなど地域や教育の場にも参加している
設立年月	1937 年
主な所在地	東京都新宿区信濃町 10
URL	http://www.bungakuza.com/

団体名	NPO 法人日本演劇情動療法協会
理念	演劇情動療法を広く普及させ、一人でも多くの認知症患者の回復に貢献すること、また、認知症患者の尊厳を大切にし、現在の認知力に偏った診断やリハビリ、過剰な投薬の状況を変えていくことを目的とする
主な事業	提携病院での演劇情動療法士®の育成、提携劇団、劇場などでの演劇情動療法士®の育成、演劇情動療法®の普及、病院、施設などでの演劇情動療法®の普及、劇場での健常者への演劇情動療法®の普及、演劇情動療法®の更なる研究、深化（効果的な物語・音楽・絵・写真・動画などの製作）
設立年月	平成 2 8 年 1 月 1 5 日
主な所在地	宮城県仙台市宮城野区榴ヶ岡 5 番地 みやぎ NPO プラザ内
URL	https://www.jadet.jp/

【巻末資料】

i. 調査研究会議メンバー

◆調査員

- 石川 純 (ケイスリー株式会社)
 - 大沢 望 (株式会社大沢会計アンド人事コンサルタンツ 東京事務所所長)
 - 落合 千華 (ケイスリー株式会社 取締役) ◎
 - 栗野 泰成 (ケイスリー株式会社)
 - 鈴木 豪 (ケイスリー株式会社)
 - 田中 博 (一般社団法人参加型評価センター 代表理事)
 - 千葉 直紀 (ケイスリー株式会社)
- ◎調査責任者

◆監修

- 福島 明夫 (日本劇団協議会専務理事 青年劇場)
- 衛 紀生 (日本劇団協議会理事 可児市文化創造センター)

◆ワークショップ コーディネーター

- 小関 直人 (銅鑼)
- 佐藤 尚子 (青年劇場)
- 田窪 哲旨 (兵庫県立ピッコロ劇団)
- 夏川 正一 (朋友)

ii. 調査概要

◆会議 (開催日)

- 2018年 5月15日 全体会議
- 2018年 11月20日 全体会議 (中間報告会)
- 2019年 1月21日 調査員－事務局会議

iii. ワークショップ開催概要

1) 障害者対象

11月16日	11月19日	11月20日	11月27日
12月1日	2月5日	2月12日	2月19日

2) 高齢者対象

7月22日	8月15日	8月26日	9月19日
9月23日	10月7日	10月10日	11月7日
11月11日	12月23日		

3) 青少年対象

7月8日	7月21日	8月18日	8月25日
9月2日	9月17日	9月29日	10月8日
11月3日	11月23日		

4) 青年対象（さいたま）

5月2日	5月16日	5月30日	6月13日	6月27日
7月11日	7月18日	7月25日	8月8日	8月22日
9月5日	9月19日	10月3日	10月17日	10月31日
11月14日	11月28日	12月12日	12月19日	12月28日

5) 青年対象（東京）

8月28日	8月29日	8月30日	9月11日	9月12日
9月18日	9月19日	10月2日	10月3日	10月4日
10月6日	10月7日	10月9日	10月10日	10月11日
10月12日	10月13日	10月14日	10月15日	

6) 在日外国人対象

8月12日	8月26日	9月2日
-------	-------	------



文化庁委託事業
平成 30 年度戦略的芸術文化創造推進事業
(共生社会実現のための芸術文化活動の推進)

やってみようプロジェクト 調査研究報告書

2019 年 3 月

発行 公益社団法人日本劇団協議会

〒160-0023 東京都新宿区西新宿 6-12-30 芸能花伝舎 3F

TEL:03-5909-4600 FAX:03-5909-4666